ヒカリノイト
津川　梓

ヒカリノイト

津川　梓

主な登場人物

私……鉄道会社で働く会社員。喪失感を抱えて毎日を過ごす。

大沢景太（おおさわけいた）……私の友人。大学七年生でバーテンダーのアルバイトは六年目。お調子者に見えるが、将来の進路に悩む、繊り性。

椎土（しいど）……景太の友人。景太の働くバーに入り浸り、私と出会う。

菜緒……私の妹。学生結婚し、商社に入社。人付き合いが苦手な泳しがり屋。嫌いなものは大人数の飲み会。

桜井杏奈（さくらいあんな）……私が学生時代のバイト先で知り合った友人。美海とは音楽サークル仲間。クラブが好きで友達が多い。神楽坂にある小さな出版社で働く。趣味はカメラ。

石川美海（いしかわみう）……私の親友。服飾系専門学校を卒業し、現在フリーター。ピアノが趣味で、音楽サークルに籍を置く。今は、大抵カフェに行って本を読む毎日。家事全般が得意。

中島　亮（なかじま　りょう）……私の同僚で朝生の先輩。美海とは幼なじみ。麻布十番駅の駅員として働く。チェロが趣味で、カクテル好き。千夏とは、学生時代から付き合っている。

永倉朝生（ながくらあさお）……亮の後輩で、車掌の試験を受けている。真面目で、口数は少ない。甘いものが好き。昔なりたかったものは、作曲家。

安藤達大（あんどうたつひろ）……菜緒の同期。実家はかなりの資産家でちょっと天然。仕事と飲み会とゴルフに全力投球でかなり多忙。

ノブ……杏奈のクラブ友達。アルバイトを掛け持ちして修業中。

柏木千夏（かしわぎちなつ）……亮の恋人。テニスが上手いお嬢様。旅行会社に勤務し、海外旅行の添乗もこなす。社交性満点で、甘いものが大好き。

真奈未（まなみ）……達大の姉。白金高輪に住む専業主婦。六歳になる息子がいる。

目次

東京の空 …… 014
銀座線 …… 028
丸ノ内線 …… 068
日比谷線 …… 106
東西線 …… 152
千代田線 …… 192
有楽町線 …… 246
半蔵門線 …… 282
南北線 …… 334
副都心線 …… 378
東京の地下ドラマチックデイ …… 394
あとがき …… 404

建物も灯りも何も見えない。
星も見えない。
東京の空には何もない。

東京の空

朝起きて、夜眠るまで消されることのないパソコンが部屋にはあって、その電源を落として灯りを消すと、全くの静けさと暗闇が手に入る。もう、電車も通らない。

「こんな都心でも、静かな場所があるんやね」

都会で暮らしたことのない母の声が響く。

「うん。不思議だけど、田舎の方が車の音とかするもんね」

ベッドに寝転んだまま天井に返事をする私の声も、思った以上にはっきりと耳に戻ってくる。

変な感じ。と呟いた母が微かな寝息を立てたのを確かめて、母の眠る布団を踏まないように歩き、流しで水道水をごくごくと飲んだ。東京の水がまずいと思ったことは、ない。

玄関に置きっぱなしになっていた煙草と気に入りのモーブピンクのライターを手に取り、部屋のベランダから伸びている非常用はしごでマンションの屋上へ上った。本当に小さなワンルームの壁は真っ白で、私はそこに、昔焼いた写真やポスターなんかをべたべた貼っていたから、部屋で煙草を吸わないようにしていた。

誰がデジャブを覚えてもおかしくない、普通すぎる住宅街の中で、風に揺れる小さな火を見つめた。それをそっと、咥えた煙草に近付ける。高層ビル群は、近くに行けば高くてつい見上げてしまうけど、ここからはそんなに迫ってくることもない。空に刺さるなんて表現はできないけど、摩天楼って日本語はなんかいいな。と思いながら伸びをする。

部屋を出ると東京の空はそんなに暗くもなくて、煙の先に見えるビルや家は、オブジェみたいに並んでいた。

母と話したのが、人と話した久しぶりだった。私は、名前を聞けば好きとしか形容できない人と一緒にいられるなら、一週間家から一歩も出ないで過ごしても、話さえしなくてもよかった。ぼんやりと横に並んでいるだけで充たされていたのに。

隣には同じ高さのマンションが建っていて、四階の一室から灯りが消えた。誰かがそこで暮らしている。私も、屋上でちゃんと息をする。偽物っぽいバニラの風味が口の中に残らないように、深く息を吐く。

影大な人間と、そこからいくつも飛び出している糸が時間とともに絡まって、ほぐれて切れて結ばれて、小さなドラマが毎日生まれる。私から出ている糸は、今、誰に

つながっているかな。煙草の灰を屋根の傾きにトントンと落とし、私は左手の小指を立てて、夜にかざす。

さっき、眠る前に母は言った。

「ちっちゃい頃のあんたはなぁ、世界中の人と握手してみたいなぁとか言う子供やってんで。そら無理やわって言うたお母さんが悪かったんかなぁ。すぐ無理って言うたのが、あかんかったんかなぁ」

私は、そんなことを言った記憶も全然なかったし、まず虫嫌いだから、たとえばアマゾンの奥地なんて絶対行きたくないし、もしそれでも行こうと決めて向こう岸の集落に辿り着いたとしても、そのときちょうど死んでしまう人もいるだろう。そんなことは、無理なのだ。

今、目の前に水平に広がる東京の中にいて、私は、さっき隣で電気を消した人が今日をどんな風に過ごしていたのかはもちろん、名前も年齢も知らない。こんなに広い世界で、私が一生のうちに出遇う人なんてほんの一握りなのだ。一握りの束をたったの数本にして、守りとおそうとやっきになる必要はないのかもしれない。その結果がこれだったんだ。

彼とずっとパラレルな存在でいたなら、こうやって一人で東京を見下ろすこともなかったんだろう。でも一度絡まってしまったし、どちらかがほどこうとする前に彼という伸びやかだった糸は、あの高いビルの下の交差点で切れてしまった。

恋人が死んだことを、私は誰にも言わなかった。彼のことを知っている人は、私の小さな人間関係の中にはいなかった。彼はフリーのライターで、週刊誌のちょい記事を書いて生きている人だったから、会社員の私とは交友関係が全く重ならなかった。だから、誰が急に電話をくれるとか、そういうこともなかった。

違う、一人だけいたから私は彼の死を知った。彼と私が通ったバーで働いている、景太君だ。私たちのちょうど間くらいの年で、マスターの一番弟子を自称する彼は人懐っこくて、毎回オリジナルカクテルの試飲を私たちに強要してはマスターに怒られていた。そのバーは、下町風情の残る彼の家の近所にしては、シンプルで洒落た店だった。

ある日彼からメールが返ってこなくなり、電話も通じなくなって一週間が過ぎた。私は、そこにいるかもしれないと少しだけ期待して、重い扉を押した。景太君は、こんばんは。といつもの明るい笑顔を一瞬だけ向けて、うつむいた。空気が重みを増した。それはすぐに感じられて、私は咄嗟に敬語を使っていた。

「最近、彼、来ましたか？」
「誰にも……何も聞いてない……の？」
「何を？　他に好きな人できたとか？　実は最近連絡つかなくなっちゃって」
「……一週間前、都庁前の交差点で事故に遭って……」
私は、他の何も見えなくなって、景太君の目の前のカウンターに、吸い寄せられるように座った。

「……ねえ、私、なんで何も知らないんだろう」
「……僕も、偶然彼のお兄さんが店に飲みに来て……それで知ったんだ。携帯も完全に折れちゃってたらしくて、あなたにも連絡できなかったんだと思う」
景太君が聞いた話では、家族は全員遠くに住んでいるので、早々に彼の家を引き払い、実家のある高知でお別れ会をするのだそうだ。カウンターに一人で座ったお兄さんは、弟である彼の悪口をまくし立て、景太君が彼の知り合いだとわかると、あいつに出してたのと同じのをつくれ、とくだを巻いた。

「僕、慌ててカウンターの裏に置いてあるノート、取りに行きましたよ」
お兄さんは、景太君のオリジナルカクテルを一気に飲み干し続けた。五、六杯飲み干すのに、三十分からなかった。もう頭も上がらないほど酔いが回ったお兄さんは、テーブルに頬をべたりとつけて激動だにせず、
「おかしいやろ……」
と何度か呟きながら泣いていた。
「お兄さんが気に入ってくれたの、やっぱり、あの人と同じでした」
景太君は、やっと涙が落ちなくなった私の頬を見て、ほんの少しだけ笑顔を見せて呟いた。
ぱらりと開かれたノートに貼られた写真を見て、私も、それが好きだった、と思う。
「ねえ、もう一回マスターに直訴してみたら？　このカクテルならメニューに載っても注文入りそうな気がする。私も今日、それがいいな」
「マスター厳しすぎだよなぁ」
「他のについての判断は正しいと思うけど」
「ひでーな。でも、これはいけそうか。じゃあさ、メニューに載る前に何か名前つけ

てよ」

景太君は、常連のおじさんにも愛される笑顔をすっと戻してシェーカーに氷を入れ、慎重にリキュールを量る。私は、この場ではもう泣かないように、その様子を現実感が失われるまでじっと見つめた。

それからの毎日は、機械のように電話に出て、機械の一部みたいにパソコンに向かってキーを叩いた。最低八時間はそれで使い切れることは幸せだった。眠っているかは別にして、毎日十時間はベッドにいた。残り六時間の割り振りを決める気力もない日が一番つらい。私が今までともに話せそうなのは景太君だけなのに、あの店には、思い出すものが多すぎた。

ぱったり連絡をしなくなった私の家に、母は合鍵で勝手に上がりこんでいた。母は、一日外で過ごしてきた私の顔を見て、

「たまってたもん、全部洗濯しといたから」

それだけ言って、黙ってしまった。一昨日か昨日食べたカップヌードルの空容器が大きなゴミ袋に詰められているのが見える。

部屋の中に散らばっていたはずの紙きれが、折りたたみテーブルの上にまとまっていた。消化作業として彼の記憶をつづった紙きれに目を通した人には、もうすべてわかっているはずだった。

「あぁ、ありがとう」

多分、普段の私なら、なんで勝手に入ってるの、と少々怒り気味に言葉を始めるはずだった。母はそうなる前に、

「今日から三日、ここに泊まるから」

と言い切った。

ただ私は絶対に、なんでいるの、とは言えなかったと思う。今日は、その三日目だ。

ずるいよねぇ、と一言だけ呟いて、寝転んでみた。背中が汚れても、明日までは洗濯が趣味の母がいるから大丈夫だ。ようやくだけど、そんなことを考えつく余裕もできた。

寝転ぶと、建物も灯りも何も見えない。星も見えない。東京の空には何もない。

風が前髪をかき上げる。ずるいよね、置いてっちゃうなんて。でも、もう鼻唄歌っちゃうくらいには復活したし、もう一度、糸をどこかに伸ばしてみるよ。小指は立てづらいから、腕を伸ばして人差し指を一本、空に立てる。

ねえ、名前何がいい？　あなたは今、高知にいるの？　私は今も東京にいる。どこにいても空は一緒ってどこかで聞いたような話だけど、そういうことでいいのかな。あのカクテル、思ったより暗い色だったよ。暗いってドイツ語でなんて言うの？　空は？　東京の何もない空って名前は大げさかな。久しぶりに仕事関係ない人と話したからかな、わかんないけど涙が出るよ。

いいから、お母さんとこ戻れよ。と勝手な彼の声がした。

わかった。これから誰かのドラマにちょっとずつお邪魔するから、しばらく見てて。私のペースでやってみるから。

私は声に出さずに呟く。

ずっと泣きやまなかったら、また声が聞こえるかな。でも、お母さん起きちゃう前に戻らないと。

カラオケ
SHIDAX
KAMIYA BAR
神谷バー

川面を眺めて歩く。駒形橋を渡ったところで、
「浅草なんか、降りたことほとんどない」
彼はぽつっとつぶやいた。
「私もそんなにないよ」
私はなんとなく嘘をつく。
「結構いろんなとこ行ってそう」
そう返す彼に否定を重ねて笑う私は、彼より四つ年上だった。

「あの神谷バーっていうのは何なんだろう。さっき上がってきたときには見つけられなかったけど、なんか変」
「だって古いもん。隣のカラオケとはそりゃ違うよ」
「古いんだ。マジ、明治って書いてある。全然知らなかった」
「今日そこでごはんだよ。住所がいいよね」
「行きたいとこって、あれか！」
彼は、ドアを開けるなり現れる独特の雰囲気に気圧されていた。
「ガラスの中のサンプル見て食べたいもの言って」

軽く促すと、観光ガイドには絶対載っていないだろう、普通の居酒屋メニューばかり口にした。
「もっと栄養摂りなよ」
私はサラダを追加して、食券を買った。
席はほとんど埋まっていて、無法地帯に見えた。私たちは、その中にもかすかにあるのだろうこの店のルールもよくわかっていなかったから、店内をぐるっと一周した。
やっと、立ち上がった一人の客の後に滑り込み、一人ずつ見知らぬ同士が向かい合っている隣に腰かけた。テーブルに置かれた食券を、手品師のように素早く回収して厨房に運ぶウエイターをぼんやり見送りながら、私たちは不思議な空気の中でロクに感想を漏らす。
「なんだよここ。変」
「全然変じゃないよ。私たちは浮いてるかもしれないけど」
「一人で飯食って、酒飲んで煙草ふかしてさっさと帰るって感じだな」
「かっこいいね、そういう大人」
「じゃあ、俺も煙草吸っていい？」
「いいも何も、一周したらものすごい煙だったもん。どうぞ」

彼は、金はないけど煙草はもうやめられないんだと独りごちて、灰皿を引き寄せる。テーブル同士の隙間を人形のようにくるくる動き回るウエイターを見ていると、頼んだチーズサラダともつ煮込みが運ばれてくるのが、あっという間に感じられた。

左隣りの人は、マカロニグラタンを食べていた。斜め向かいの人は、ハンバーグステーキを食べていた。全く同じようにその傍らにはビールジョッキと電気プランの小さなグラスが一つずつ置いてある。彼らはビールをチェイサー代わりに飲み、やっぱり食後に煙草を吸った。

私は、彼らと同じように昔ながらの洋食を食べてみたかったけど、彼は魚を食べたがっていたからスズキのポワレを追加した。彼は、ポワレという単語を不思議そうに二回口に出して、

「あなたは物知りだな」

と言った。

「そんなことないって」

私は本当にどっちだっていいことなのに、きちんと否定する。

あの人は、外で美味しいものを食べてくると、それを家で再現するのが趣味だった。

狭い台所に入りきらず、テーブルの隅に並べられたスパイス瓶が増えていくのと同じスピードで、私は耳慣れない料理名を頭の中にたくさんストックしていったのだ。

彼はスズキをゆっくりと食べて、まだまだ文句を言っていた。私の仕事にもとことん文句をつけた。彼は、権力という権力が嫌いなのだった。私が権力を持つことはなさそうだけど、権力に迎合したとはっきり認識されたとき、友達でいてくれるだろうか。こんな風に、年上ぶっておごったりすることもなくなるのかもしれないな。それは少し、淋しいと思う。

彼は全くアルコールを受け付けなくて、私も母が帰って以来煙草を吸っていないから、この空間に長居するには要素がいくつか欠けていた。彼が、微妙に気を遣って真上に吐き出す煙を見ながら、私とごはんを食べることがなくなっても、彼が年を重ねて、俺はいつも何かしらにたてついていたなぁ、と思い出したり、二十歳の自分そっくりの若造を連れてきて好きなことを言わせながら、この場所で煙草をふかしたりしていればいいな。そんなことを思って、微笑んだ。……私は？　私も、あの頃はよかった、なんて話しだす年齢まで生きるのだろうか。死んだ人のことを遠い目をしながら、フィルター越しの美しい思い出として語りだす日が来るんだろうか。彼の死を、

向かい合う誰かとの関係を深めるための道具にしてしまう日が、いつか。

「そろそろ出よっか」

私は電気プランでカッとした喉から声を出し、立ち上がる友人の背中越しに広がる、ざわついた店内を呆然と見渡した。

外はすっかり暗くなっていて、どこかでお茶でもしよう。と歩き出したものの、気付くと今日四回目の交差点に戻ってしまい、仕方なく川沿いを歩いた。目の端に明るい色が飛び込んできて顔を向けると、対岸の小さな公園に、黄色とクリーム色で塗り分けられたワーゲンバスが止まっていた。橋を渡って近付くと、それは移動カフェだった。もう夜だから先客は一人で、スーツ姿のまま紙コップに入った何かを飲んでいた。

私たちがワゴンを覗き込むと、私よりも少し年上に見える店主が、品の良いにこやかな笑顔を向けた。コーヒーを中心としたたくさんのドリンクメニューの下に、手書きされた紙が貼り付けてある。それはアイスクリームのメニューで、夏は週替わりで二種類ずつ出しているみたいだった。

「食べたことないなら、このバナナストロベリーにしなよ。俺食べたのはチェーン店のだけど、昔、『こんなにおいしいものが世の中にあるのか』って感動したから」

彼ははしゃいで言った。たまには言うこと聞いてやるか。と苦笑しながら、彼にはもう一つの方を勧めた。私は、可愛らしいうさぎの絵が描かれたカプチーノに惹かれながらも、アイスの甘さを思いやってブラックコーヒーも頼んだ。

コーンじゃなくカップに入れてもらって、じっとりとした暑さが残る夜に溶けだそうとしているアイスを、その場で一口食べた。

「バナナうま！」

「だろ！」

彼は、うれしそうに笑う。

「このバスで都内うろうろ回ってるので、また、どこかでよろしくお願いします！そのスプーン持ってきてくれたら、サービスしますよ」

食べ終わったカップとスプーンを入れるためのビニール袋を渡してくれた店主はそう言って、店を閉めてワゴンを走らせた。残りは、川に向かい合うベンチに座って食べた。彼のカップに入ったメロンのアイスも、どんどんなくなっていく。

「ねー、交換しよ」

「え、俺あなたの彼氏に怒られちゃうよ」

頬を一瞬強張らせたのを、年下の彼に気付かれるのは、嫌だった。彼は、私の恋人

が死んでしまったことを知らない。初めて世間の目に触れた彼の記事が、神谷バーについて書かれたコラムだったことは、もちろん知らないはずだった。

「何それ、かわいい」

私は笑って彼の返事を待たずにカップを取り換え、メロンのアイスを食べた。さっぱりとした、懐かしい味がした。

「昔はクッキー&クリームなんかとんでもなくて、こういうシャーベットみたいなのが好きだったんだ。駅にあるお店で、たまにお父さんが卵のパックみたいなアイスの詰め合わせ買ってきてくれて」

ただ、無言の時間をこの場から消し去りたいがために、独り言のように話す私の右側で、彼は少しまごつきながら、昔感動したらしいバナナストロベリーを口に運ぶ。川を見ながらじっと味わっている彼の横顔が幼くて、やっぱりもう一度くらいごちそうする機会が、私のためにほしいと思った。その幼い表情のまま文句という形をとって話される、彼の哲学をもっと聴いてみたいと思ったのだ。

アイスを食べ終え、ビニールをきっちり結んでカップとスプーンをバッグにしまった。そのとき、鞄の内ポケットに差し込んだコラムのコピーに指先がそっと触れた。きっと、あなたの記事を見て電気プランを知った人がいたんだね。何十年ぶりかに懐

かしい洋食を食べに来た人がいたんだね。それってすごいことだね。横にいる友達に自慢したいけど、もし泣いちゃったら、かっこ悪いよね。

あの人の返事は、最近、聞こえなくなってきた。その代わりに、神谷バーのウエイターについて話す友達の声を、頷きながら噛みしめるように聴いた。

アバルトマン

百貨店の地下をうろうろした後、紅茶専門店の壁の隙間に立って電話をかけた。忘れられていたらどうしよう。傷だらけの携帯を握りしめる。お元気ですか？

「わー、久しぶりだね、元気？」

「元気です。お元気ですか？」

「まぁまぁ、ぼちぼちだね。どうしたの？」

「急なんですけど、明日、ご都合つけばお昼にお会いできませんか？」

「もちろんいいよ。予定なんか何にもないよ。中野の駅まで迎えに行くからね」

私は異様にはしゃいだ声を出していたようで、隙間を覗き込む人の顔は、一様に不思議そうだった。

＊＊＊

「普通さぁ、三越って言われたらこっちじゃない？　三越前って駅の名前にもなってるんだし」

「信じられない、銀座の方がメジャーだし。買い物なら、他のお店もたくさんある銀座でしょ」

三越で待ち合わせと言われたので日本橋の方にいたら、妹、菜緒から電話がかかってきた。待ちくたびれた！と怒る彼女とやっと落ち合ったのは、待ち合わせから大分経ってからだった。

菜緒は法学部出身らしく、何やら理詰めで私を怒るので、ミツワでケーキをごちそうしてやった。今日はウインドウショッピングだけではなく、パソコンを買いに来たのだ。機械ものに強い彼女の機嫌を損ねることは避けたかった。りんごを使った本日のデザートを食べた菜緒は、上機嫌で手早くアドバイスをし、ソフトも全部選んでくれた。

ソフトをインストールするのに時間がかかると言われたので、四丁目交差点のドトールの窓際に座った。紅茶を一口飲んで、交差点を流れる光を眺めながら、少し痩せた妹の話を聞いていた。

「もうダメなのかなぁって、最近ちょっとずつ受け入れようとしてる。まだ、好きだけど」

菜緒は、すとんと真っ直ぐな黒髪で横顔を隠して、頬杖をついていた。彼女は、大

学二年の冬に結婚した。菜緒よりも、私たちの父との方が歳の近い夫とあまり上手くいっていないことは、少し前から聞いていた。けど、アドバイスなんか今の私にできる気がしなかった。

「そっか……」

呟いて、何も言えなくなっていたら、アップルストアから電話が入った。

二人で交差点に降りたそのとき、午後九時を知らせる和光の時計台の鐘が鳴った。私たちは横断歩道を渡り終えて顔を見合わせ、なんとなく足を止めた。ねえ、だから東京ってやめられないんだよ、と私は思って、身体の奥を揺さぶるようなゆったりした響きを取り込んだ。菜緒のうれしそうに目を細める顔が、柔らかく白い光に照らされて、綺麗だと思った。

新しいおもちゃを買ってもらった子供のように、その日はつやつやのノートパソコンを手放せなくて、なかなか寝付けなかった。

で、寝坊した。終点に着いてやっと、お土産も買っていなかったことを思い出した。駅前の不二家でバウンドケーキを買って、ガード下に走った。

「よーく来てくれたねぇ。ほんとに」

懐かしい笑顔に私は涙が出そうにうれしくて、ワゴンに乗り込む前から相好を崩す。

「ずっとお会いしたかったんです。ほんとに」

学生時代住んでいたアパートの大家さんは私を見て、痩せたけど変わらない、元気そうだ、会社は楽しいか、貯金はちゃんとしてるか、ご両親は元気か、と思いつくままに質問をした。私はそれに答えながら、そうかいそうかい、と笑う横顔を見ているだけで充たされていく。

私のおじいちゃんくらいの年の大家さんは、私のことを「二年間私を助けてくれまして」と人に紹介する。私は顔を合わせる度に栄養ドリンクを一本もらっていただけで、あとは水道を直してもらった以外何もしていない。むしろお世話になった方だから、彼の言葉の持つ意味をずっと測りかねていた。

かに会席を囲んで、いろいろな話をした。話はいつの間にか枝を伸ばし、ある日大家さんの家庭が壊れたこと、会社勤めも商売もうまく行かずうつ病になったことを聞いた。私は、いじめに遭ったとき、両親は毎週末私を車でつれ回したこと、今思うとあれは愛情だったと思うこと、そんなことまで何も包み込まずに話した。

その話が私の、

「会社を辞めたいんです。何かもう、全部がどうでもよくなった」

という言葉にまでたどり着いたとき、彼は言った。

「私は、ラーメン屋に失敗した後タクシーの運転手もやってたんですけどね、一番厳しい会社で五番以内の成績をとった頃、狭い世界で競争することが精神的にきつくなって、業界で一番楽だと言われている会社に移って、ビリになろうと決めたんですね。ビリになるには五ヶ月くらいかかりました。その頃、お客さん乗せない時間を勉強に充てたんです。壊れた水道の直し方とか、簡単な家の補修とか改装の方法とかね」

私は煎茶を一口すする間も、彼から一度も目を離さなかった。

「トップはもちろんきついけど、正直ビリもきついですよ。『もう来月はやめてくれるかな。バックで走ったってもうちょっといけるよ』なんて言われて『今度はいい数字とってきますから』って言ってまたとってこない。でもね、勉強して会社が終われば、もうあとは自分の好きなように生きていける。人は簡単に死ねないだろ。……おじさんはこの先ずっと、誰とも競争したくなかった。自由になりたかった。そのために会社のビリを選んで、それから辞めてあのアパートを建てました。今でも自分でできるところは全部自分で手入れして補修して、皆さんから家賃をいただいてなんとか生きてる。あなたはまだ若いから、どういう風に生きていくか、どういう風に自由になるかはまだ自分で決められる。今のおじさんとは次元が違う。それでも、またこうして話してくれたら、絶対すぐに会社を辞めさせたりしないんだ」

「辞めさせない、って決まった結論ありきなら、相談なんてできませんよ」

私はそう言いながら、初めて大家さんの生きざまを垣間見て、泣いた。この深いしわが縁取る笑顔がどうやってつくられてきたのかがほんの少しわかった気がして、また何かあったら、必ず話を聴きに来ようと決めた。

帰りの車中で彼は、昨年の冬に再発したうつ病でしばらく入院していて、つい一昨日退院したのだと言った。

「だから電話がかかってきたとき、まだ助けてくれるのかと思ってね、涙が出たんですよ」

「私は最初から、大家さんに助けられてばっかりです」

「違うんだよ。人に頼られて助けようとすることで、自分が救われることもたくさんあるんだよ。普通いじめられてたこととか隠すだろ。おじさんにそれを話して何の得にもならないのに出してくるから、自分もいいのかなってさらけ出して楽になれることだってあるんだよ。でも、本当はすごくつらいことあったんだろ。いつもなら素直に頼ってくれるあなたが、ここまで来ても話せないくらいつらいこと。おじさんには

わかったよ。だから、今度はおじさんが助ける番だよ……ほら、もう泣かないの」

隙間

会社のそばの店でパンを買って、数席あるカウンターに座った。オーブンから出てきたものは、かすかに温まっただけのどうしようもない代物で、練りこまれたキャラメルの甘みを舌が感じたときにだけほんの少しほっとして、食べ終わる前から左手で小説の下巻を読みふけった。

すでに、登場人物の一人は床の上で死に続け、冷たくなってしまっていた。彼が死んでしまって数ページ進んだところから、もう一度読み始めた。

『俺はさ、おじさん、こう思うんだよ。これから何かちょっとしたことがある度に、ナカタさんならこういうときにどう言うだろう、ナカタさんならこういうときにどうするだろうって、俺はいちいち考えるんじゃねえかってさ。なんとなくそういう気がするんだね。で、そういうのはけっこう大きなことだと思うんだ』

私は、この言葉をかけられているナカタさんが好きだったのだが、この一言を私に授けた作者と、作者の思想を紙上でじっくり言葉にしたホシノくんが同じだけ好きになった。なぜかというと、安心させてくれたからだった。この不味いパンを食べさせ

たなら、もう声の聴けないあの人は方言まじりに文句を言いながらも全部食べきって、別の店でまた同じようなパンを買って帰るだろうと想像してしまっていたことが、別におかしなことではないと言ってもらった気がしたのだ。

『あなたさえ覚えていてくれたら、ほかのすべての人に忘れられてもかまわない』

私には、小説の中で佐伯さんという人が訴えたとおりのあなたがいた。覚えているということは、私の黒目や、首筋に沈む匂いや軽い声を思い出すだけではなく、ホシノくんが呟いたとおり、私という入れ物を通して何かを考える瞬間があるということだ。そうしてくれるだろう人が、私にはいた。

何度読んでも、この話を完璧に理解することはないだろうと感じながら読み終えた。ちょうど主人公が一筋だけ涙を流したときに、私も揃えてほんの少し泣いた。空っぽになったバスケットをカウンターに返し、いろいろと放り出してきた会社に戻った。

ここまで歩いて来られたのは、ずっと下を向いていたからだということに広場の真ん中で気付いた。改札前の広場は、顔を上げた私の目の前でただひたすら発光していた。私はその場に立ち尽くし、表情の読み取れない人たちにとって自分が障害物でしかないということも忘れていた。歩みをやめない人々の緩く結合された縦列の真ん中で、私は目を虚ろにする。これからどこへ行くのだろう。ここにいてはいけない。警

告音がいつのまにか言葉となって、頭の中で鳴っている。

たまらなく、私が消えても私のことを　覚えている人　に逢いたかった。おかしくなるとか、すがりたいとか、そういう単語が何度も頭をめぐる。白く反射する床にしゃがみこみそうな私を抱え、離さないでいてくれる人が広場に現れないこの世界は、嘘っぱちだった。

視点が定まらないまま、会社へ続く地下道を歩く。さっき食べたかすかすしたパンを、キャラメルも含めて全部吐き出したくなりながら。

今日は、どうしても真っ直ぐ一人の家に帰りたくない。彼の部屋が世界のどこからも失われた今となっては、そういう日のために、彼が用意してくれた場所だったのかもしれなかった。

日本橋で降りて、私と彼をつなぐただ一人の友人が働いているバーに立ち寄った。なのに今日に限って、景太君は大学の試験があって休まされていた。

「あいつ、来年卒業できなかったら、八年もいて退学なんだろ。何か事情があるとか、やりたいこと見つかって途中で辞めるならいいんだよ。そんだけ時間かけて、この先どうするかも決まってないのに卒業って資格すら得られないってきついだろ……。俺

は、大学行ってないから詳しいことはわかんないんだけど」
景太君はいつも通り出勤したがったのだが、彼の将来を心配するマスターがきつく言い含めて、来週末まで出勤停止にしたらしい。七年生にして、試験の日程が二週間にわたっている彼の危なっかしさに笑ってしまった。
久しぶりにマスターと話した気がした。マスターの振るシェーカーの音が聴きたくて、シェーカーを使うもので、色は青っぽいのとだけ伝えた。

「死にたそうな顔してる。大丈夫？」
二杯目を半分ほどにしたとき、右に二つ離れた席の人から声をかけられた。彼のことは何度か店の中で見かけたことがあった。マスターとの話しぶりからすると、年の割にかなり常連のようだった。
「え、そんなこと……でも、なんで……」
「何とも言えないけど、勘で。仕事の悩みとか色恋沙汰じゃない、もっとどうにもできないことが乗っかってる感じ」
「うん……たまにいなくなりたくはなってます。あの人がいなくなっても、私結構まともに生きてるなって思うと」

「あれ、色恋の方か。恋人に逃げられて死にたくなるもんかねぇ」
「色恋の相手が死んじゃったんです。前に」
彼は、眉をひそめて私を見つめた。正面に立っているマスターも私の顔を見たまま、次のオーダーも忘れてしまったように立っていた。私は二人に見つめられながら、母にしか伝えていないことをすんなり話している自分に少し戸惑っていた。
戸惑いながら、景太君が、あれだけ尊敬するマスターにさえずっと黙っていてくれたことをありがたく思った。これより前のタイミングで何かしら気遣われてしまったら、私はその場で取り乱したに違いない。
やっと自分の仕事を思いだしたマスターが、テーブル席の客につまみを運びに行ったタイミングで、右横の彼が突然口を開いた。
「殺してあげようか？」
真っ直ぐに私を見つめる彼の眼を、同じように見返した。
「ちゃんと、できますか？」
「多分。来てくれる？　一緒に」
マスターはカクテル二杯の代金を受け取ってくれなかった。
「今日はいいから。また、景太出て来たら顔見せてよ。おーい、どさくさに紛れて出

ようとしてるお前は来過ぎだからしばらく来なくていいぞ。三杯分、ちゃんと払え」
「俺、上客のつもりだったんだけどな」
「十年早いよ」
「まだ開店して七年のくせに！」
マスターは笑いながらドアを開け、道の上で手を振って見送ってくれた。そんなことは、もう何度となく来ていたけど初めてだった。

彼と入り込んだビルの隙間は真横に首都高が走り、すぐ近くに美しくて可哀相な橋が架かっていて、その下には運河が暗く流れている。
とん、と背中を押されたら誰にも気付かれないまま沈んでしまう、フェンスも何もないところにある隙間だった。彼の前、コンクリートの縁に立って、とろりとした運河の水面を覗き込む。
都会は動きを止めない。動きを止めた私の耳が拾うのは、車の音だけ。そんな時間は背後から破られた。
「やっぱり、押せないや。きみが意外にじたばたして上手くいかなかったら、全身びしょびしょの女性、もてあましちゃうよ」

「なんで？　ひどい。ちゃんとできるって言ったのに」
「今日まで話したことないし無責任で悪いんだけど、きみ生きてる方が、俺はうれしいよ。今日は、できない」
できない。どう探っても一つの意味しか持たない言葉に力が抜けた私は、トンと音を立てて縁から降りて、ほんの少し彼の肩に額をのせた。人に押されなくたって、飛び降りるくらい自分一人でできたはずの中途半端な私の胸に、見知らぬ人の肩に凭れて眠ってしまったときのような、奇妙な安心感がどっと額から流れ込んでくる。彼は私の肩を、ゆったりしたリズムで叩く。
「もし、また死にたくなったら、今度は絶対俺がやってあげるから最初に言って。約束してよ」
約束してよ。それだけでいいから。
私がかすかに頷くまで、何か質問する子供みたいに熱っぽく繰り返された言葉が、耳元に残る。

ブルーローズ

もう私と恋人は随分前から約束をしなくなっていて、久しぶりに会えるはずだった今晩の予定も、急な仕事という理由でなくなってしまった。大きなきっかけもなく損なわれていく関係は、初めてだった。

そんな日の通勤中、ある人からメールが来た。『東京来てんねんけど、今日会えへん？』

一回では変換されることのない方言をわざわざ使う彼と、私のここ数年の生き方は、きっとまるっきり違うのだろうと思った。

化粧直しをしようとしたら、道具を会社に忘れてしまったことに気付いて、仕方なく約束の改札横に行った。彼とは、高校で同じクラスになった一週間後から付き合いだして、卒業した日に別れた。私は東京での一人暮らしと、大学生活に付随して起こるはずの楽しい出来事を想像しては浮かれてばかりいた世間知らずだったし、彼は彼で故郷を離れないと決めた自分のことを、とても気に入っていた。嫌いになった訳ではなくて、生きていたい場面が決定的に違ったのだ。その後も、地元に帰ったとき偶然会ってお茶をしたことはあったけど、それを含めても三年ぶりだ。

「杏奈」

きょろきょろする私に呼びかける声は、懐かしく響いてきた。

「久しぶり。綺麗なったなぁ。どっち側行けばいい？　うのもり？」

「うのもり？　あぁ、鳥森か。うんうん、そっち側」

「からすもり？って言うんか。間違えてた」

「京都も烏丸って読むやん」

「ほんまやな。なぁ、ここってサラリーマンの街なんやろ？　ようテレビのインタビューで見るわ。確かに多い気もするなぁ」

私たちは、繁華街にあふれかえる背広姿を見ているだけで楽しめた。すると、その背広だらけの中から、こちらに向かってくる見知った人と目が合った。私の恋人であるはずの人が、私から目を離さなかったので、その横で手を軽く繋いで歩く女性も一瞬だけ私を見た。

私は損なわれていく関係の原因を発見したことに安堵したり、突然のモンスター出現に戸惑ったり、そういえばこれはいわゆる浮気現場かと腹が立ったり、どうにもな

らない感情を何一つ行動に結びつけられず、隣を歩く同級生の腕につかまって前を向き、自分の恋人と、シンプルで隙のない、美しい女性の横を通り過ぎた。

路地を曲がって、三年ぶりの彼は、何も言わずに私の腕を自分の腕からそっとほどき、

「こっちでええん？」

と笑った。私は、謝るタイミングを逸して、うなずくしかできなかった。恋人の横にいた美しい人が、いつか私のことを、あれが元カノだったのだと気付いたとしたら、嫌だな。人並みにつくり込んだ顔と、もっと高そうな格好を見せておきたかったな。そんなことしか、考えていなかった。

私は、本当に馬鹿な女だと思ったら、ちょっと笑ってしまった。彼は、そんな馬鹿で女っぽいところも知ってるよ、という感じで笑ってくれた。

背広だらけの居酒屋は満席で、シリアスな話が全然似合わなかった。それはとてもいいことだった。

「あかん、うるさすぎる。食べたら次静かなとこ行こ」

「えー別にええよ。楽しい」

この雰囲気の中だから、相談事も泣かずにできた。彼は私を、友人としてまだ好きでいてくれる。だけど公正だから、自分の悩みを語るのは怖い。悲劇のヒロインぶっていたら、すぐに見破る目を持っている。

最後に食べたそばめしは余計だった。というには美味しかったけど、苦しい苦しいと言いながら別の居酒屋にはしごしようと歩いた。でも、どこも混んでいた。

覗いた二軒目の隣にあった、小さなバーのドアを押し開けると、黒い空間に青いライトが光り、壁にはミュージックチャンネルが映る薄型テレビがかかっていた。

「こういうとこに来ると、多分これからもずーっと木屋町のバーを思い出すわ」

「そやなぁ、高校のとき行ったなぁ。杏奈、今より大分化粧濃くしてな」

彼は、もう何年も前のひとときを思い出したのか微笑して、ジントニックを頼んだ。バーテンの友達が「ジントニックを飲めばその店の実力が判る」と言っていたのを思い出したらしい。私はロングのオレンジブロッサムを頼んだ。

昔の恋人の話なんかを笑いながら聞いていたら、時間はほとんど0時に近くなっていた。あぁ、どうしようかな。今飲んだカクテルよりも、一軒目で飲んでいた焼酎が私に強烈な眠気を与えていて、たまに目を瞑らせた。

「杏奈、今日もうちょっと一緒にいよか」

「あー、うん」
「今の一言で眠気覚めた？」
「ううん、別に」
もう確実に山手線も終わった時間だろうな、とわかってから外に出た。手をつないで、まだ人の流れが途切れない新橋駅前を歩いた。彼は、泊まらせてもらう予定だった友達に電話をかけ、目の前のビジネスホテルに空きがあるか聞いた。渡された鍵で開いた部屋は、壁もシーツも、ガウン型のパジャマも真っ白だった。
「なんや健全な部屋やなぁ、たまにはこういうのもいいかもな」
「ははは」
私は眠たくて、一人でベッドに倒れこんだ。彼が隣にドサッと転がり、ベッドが揺れる。
「おいで」
彼の仕草は、ついさっきまで赤の他人だった人のそれと同じに見えた。高校生やったんや、当時は。私は、過去の彼をどこかに見つけられるかもしれないという期待をやめた。何にも知らない人と眠る夜は、どちら側に相手を置きたいのかとか、取るに足りないその人のルールを知って、今日限定の二人のルールを決めていく時間が一番

楽しい。
彼は、こっちがええんや、と誰に聞かせる言葉でもなく呟き、右側から私に左腕を伸ばした。彼の腕に首を沿わせて近付くと、ぐっと引き寄せられて、一瞬で彼の胸にいた。
顔の火照りが消えないままうとうとしていると、私の額にかかる髪をうっとうしそうにずらして、彼はそこに口づけた。互いのベッドになったように、私たちはじゃれあった。荒れているように見えた彼の唇は思ったより柔らかくて、私を何一つ傷つけない。私たちは、飽きずに子供らしいキスを続けた。たまに舌を噛んでみたりすると、くつくつと笑いがこみ上げる。
「うとうとしちゃって。……ほんまに眠たいんやなぁ。寝ていいで」
彼は完全に私をあやしていた。
「うーん、なんかもったいないけど」
「俺もそう思う。でもこれ以上はせーへん。これからゆっくりゆっくり先進みたい……あの男、彼氏？　女連れの」
「へ？　あ、うん。そう」
私は、ぼんやりした頭の中に、すれ違った二人の姿を浮かべた。

「俺、当てつけになれる？」
意味がよくわからない。何それ？と言おうとして、また、まぶたが落ちていった。
目を開けると、私はいつの間にか服を中途半端に脱がされていた。ゆっくりと言いながらも止められなくなっている彼の服も悔しいから脱がして、私たちは抱き合った。
「でも、この先はせーへん」
まだそんなことを言っている。もうそんなの信じない。
「それでもいいよ、全然」
私はくすくす笑いながら、ちょっとだけ余裕ぶった。彼は、
「そうしたくなったら勝手にする。寝ぼけて弱ったとこ見計らって」
と笑う。もうとっくに弱っている私も、最低、と笑う。
彼は笑うのをやめて、私の目をじっと見下ろした。私もじっと見返すと、彼は一瞬目を閉じて入ってきた。小さく声を上げてしがみつく。彼は背中にしっとり汗をかいていた。そして、手や真っ白なシーツで口をふさいで声を殺そうとする私に
「声出してよ」
彼は耳もとで言った。

「シャツがあらへん」
「嘘や、俺脱がしてへんよ」
「嘘つき！」
ベッドと壁の隙間にしなだれ落ちているストライプのシャツを見つけて、鏡の中でニヤニヤしている彼に投げつけた。
「顔すっきりしてんなぁ。化粧とれても変わらへん全然」
「そう？」
だって、久しぶりに人に遊ばれたから。確かに鏡に映る私の顔は、自分に似合う化粧の仕方を知らなかった幼い頃のように無防備だった。彼も私も、これから先恋人には戻らないと知っている。
「なぁ、いっつもこんなしゃべり方なん？」
「ううん。ちゃうよ。いつもはちゃんと標準語やで」
「ほんまに？　一回それでしゃべってみてや」
「ほんとだってば、いつもはちゃんと標準語でＯＬしてるんだよ！」
「気持ち悪！」
「やんなぁ」

毎日どこかで感じてきた違和感をあまりにもストレートに表現されて、泣きそうな顔のまま笑った。そういうことなのだ。今の私は、あんまり気持ちいい私じゃない。

「杏奈、東京ってなんでもあんねんな……俺にはちょっと手に余る。大きすぎるわ。そこでちゃんと生きてる杏奈はすごいと思う。でも、たまには自分の言葉しゃべりに戻って来いや。今、楽やろ？」

彼は鏡の中で、複雑な顔をする私に向かって話した。

「うん……たまには帰るわ」

高校生の私があんなにはしゃいでいたのはそのせいもあったと今は認められるけど、今でもあまり帰りたい家ではなかったから、私はシャツのボタンを留めながら曖昧に続ける。

「帰ったとき、今日みたいに甘やかしてくれるんなら」

「お安いご用や。姫のためなら、俺はびっくりするぐらい尽くしてやろう」

大げさな彼の言葉に、私は笑った。

「そしたら、今日も好きにしていい？　目閉じて？」

「いいで。はい」

「意外と睫毛長いねんな」

「何するんか知らんけど早よせーや、恥ずかしい」

「はいはい、ごめんごめん」

私は、彼の閉じられた瞼に口をつけた。かすかにしかめられた彼の顔は確かに、温かで懐かしい過去の居場所だった。目元から頬をそっと指でなぞり、時折思い出したように口づけた。

戻りたい。

彼のすべすべした頬や下唇を咬んで、目に見えない咬み痕をそっと撫でた。

戻れない。

私の気が済むまで、彼は全く動かなかった。頬を両手で包んでも、目を開けたりしなかった。

「当てつけとはちゃうねん」

「……なんや、起きてたんか、あのとき」

喉まで懐かしさが込み上げて、私は目を閉じたままの彼の前で泣いた。目を開けないまま、彼は私の頬に二本の指で触れた。指先を濡らして彼は、やっと目を開き、そのまま私の頬を手のひらで包んだ。頬に流れるはずの涙が、彼の指や甲を濡らす。

ホテルを出てファストフード店で雑談しながら、顔を見て思っていることがわかるっていいことなんだろうか、と考えていた。彼はスプーンを二回ほど使ったとき、このスープは思ったよりずっとおいしいと思っていた。私も、案外染みるなぁなんて思っていたのと同じ頃だった。

店を出て、手をつなぐことはしなかった。土曜日の朝の新橋はそれなりの人通りだったけど、夜に比べると、人の属性は分類するのが難しい感じだった。

「帰ってこいよ。また、絶対」

そう言って、彼は友達の家に向かった。

歩いて行くと、銀座線に近付く通路に小さな花屋があった。華やかな暖色が並ぶ中に、私は真っ青な花を見つけた。

忙しそうに、小さなスペースにもぐりこむ店員を呼んで、

「これは薔薇ですか」

と聞いた。

「そうですよ」

それを聞いて、私はその花を二本買った。白だったのに、青い色水を吸わされてできた青い薔薇の芽が、一番色濃く紫がかった青色をしていた。葉にも、病気みたいな

青い斑点ができていた。

かわいそうな青い薔薇は、家にあった無果汁のピンクレモネードの瓶に差し込まれ、ラベルのピンク色とよく合っていると私にだけ思われて、すぐに枯れた。色素をどこにも逃がすことができずに、黄みがかった色になって朽ちた。

生まれてしまったエゴをせめて消費してやりたいというのは、どうしようもなく自分勝手な理論で、私が買った二本を補充するために、また白い薔薇が色水に浸けられるのだったらどうしよう。今日の午後はそんなことばかり考えていた。

流れに逆らってはいけないんだ。私たちはそれを忘れたとき、友達ですらなくなってしまう。大きな東京の、砂粒みたいに小さな歯車としての役割にようやく慣れてきたところで戻ってしまったら、高校生の私を傷つけてしまう。なのに、私がまだ生まれた場所の言葉を何一つ忘れていないことが、気持ちを揺らす。

ガーベラ
200円

MIZUHO
MIZUHO
MIZUHO

丸ノ内線

エキストラ

高円寺がとても好きで、何が好きかと言うと、くまなく歩くと新宿や渋谷には置いていないアンティークや、古着が見つかるところが一番だったと思う。私は、そういう物がほしかった。

有名な純情商店街は、名前以上に惹かれるものがなくて（ただ、行きつく先のカフェのナジゴレンは最高だった）、私はいつもパル商店街からルック商店街を通り抜けて新高円寺駅まで歩き、折り返して高円寺駅に戻る間にいくつかある喫茶店の中から、どこに行くかをその日に選んで、コーヒーを一杯飲んで帰った。

学生も半分が過ぎたその日も、一人でそうしていた。課題に追われていたって学生身分は本当に気楽で、商店街も、休日の人込みなんか想像できないくらいがらんとしていた。高架下に並んだ本棚にぎっしり詰まった古本へ目をやるおじいさんと、私は並んで立ち止まる。その後、何軒かの古着屋と古本屋と雑貨屋に入り、大ぶりの青い

模造石のピアスを買った。私はその日、二つもピアスを買っていた。

商店街がちょっと曲がって伸びる幹だとすると、そこから伸ばした枝のような細い道が何本もあって、そのうちの一本が環七とぶつかる手前に小さな店があった。ドアの外にディスプレイされている古めかしいワンピースに惹かれ、ふらっとその店に入った。

店内にはモノトーンの服なんか全くない。ラックに隙間なくかけられている色とりどりの服に囲まれて、小柄な店員が一人いた。

小人みたいだと思った。私と同じようなアルマジロ色のブーツをはいて、何とも言えないからし色のワンピースを着て、前髪は眉のはるか上、ランダムに額にかかっている。私は小人に会釈をして、花のモチーフが規則正しく並ぶワンピースを手に取った。それは、一見古めかしいのに紫色のファーが今年っぽく襟元を覆っていて、値段を見ても、やっぱり新品だった。

「なんかこのお花、おばあちゃん家の台所にあったグラスの模様に似てるんだよね」

独り言のつもりだった。

「それいいですよね。私も買いたいんです」

小人の声を背中が聞いた。

「買いたいなら置いちゃダメです」
私は下手な売り文句に乗っかって笑った。
「でも売らないと上の人に怒られちゃうってとこで葛藤してるんですよ。私が買うと社割扱いになっちゃうから」
「え、ほんとに悩んでたんだ」
「ほんとです。だって、その色違いより断然そっちがいいもん。それ、一点ものなんです。もう入って来ないの」
「そうなんだ。うん、私もこっちの黄色っぽいのは、三千円でもいらない」
「だよね、とりあえず着てみて。似合ったら売る」
「店員さんはギリギリアウトだったとしても似合うって、普通言うもんだよ」
私は一度試着して、それが三千円の五倍もしたのでちょっと考えて、また来ます、と言い残して新高円寺駅に着くまで歩き、喫茶店に寄らずに戻ってきた。
「やっぱりあれ、ください」
「買っちゃうんだね……」
「ごめんね。その代わり写真撮っていいですか？　ブログに載せたいな。あなたかわいいから」

「代わりの意味わかんないけど、それ、私も見れる？」
「独り言ブログだから誰も見てないけど、見れるよ。撮るね」
ストロボを光らせる私のカメラにひょうきんなポーズで収まった小人は、私がその先持つ物の百倍はお洒落な、透けた紙に印刷された名刺をくれた。そこには、副店長という肩書が書いてあった。小人に役職はどうもしっくりこなかった。

数日後、高円寺を好きな理由にプラス、音楽家がいそうという理由で好きな街、下北沢に彼女と一緒に買い物に出かけた。
「美海ちゃん、これやばい。かわいすぎる」
彼女のアンテナにひっかかるものは私とよく似ていて、でもそのアンテナは、私のものよりずっと高いようだった。私たちは、マトリョーシカをかたどったブローチを買って帰るか熱心に悩み、夜になるまで歩き回って、彼女が東京一おいしいと教えてくれたピザを食べた。一枚を分け合うだけじゃおなかが満足しなかったから、ニースサラダをデザートに食べた。

その後連絡すると、彼女は具合を悪くしてあの店を辞め、田舎に帰ったということ

がわかった。連絡はそれきりになってしまった。田舎でも、店に並んでいたような変わった服を着ているのかな。童話の中の小人のような彼女は、あの店の中にいても、頭上まで取り囲む灰色に疲れてしまった。半分灰色に塗りつぶされていた私には眩しい光みたいに思えた彼女が、もう東京にいない。

それから何年か経って、あまり出歩かずに本ばかり読む大人になった私は、高円寺で買うものをずいぶん減らしてしまって、あの店からも街そのものからも離れてしまった。

独りの夜、杏奈が貸してくれたCDが気に入って、YouTubeをはしごしていたら、サカナクションというグループのプロモーションビデオに行きあたった。それを視ていると何故か彼女のことが思い出されて、次の土曜日、高円寺に行った。その曲は当時流れていたものでもなんでもなく、あの人がサカナクションを好きだと言っていたわけでもないのに、彼女のことが頭から離れなくなった。

駅を降りてからもその不思議な感覚を忘れないように、一曲だけ、繰り返し聞きながら歩いた。あの店は、小人がいなくなってもまだあった。でも、彼女がいないのはわかっていたから、やっぱり立ち寄らなかった。

ほんの一瞬で鮮やかな印象を残して去ったあの人に、会ってみたいけど、ともするとこれからも会わないでずっと自分の中に残していたいと思った。そういう気持ちは、私も誰かにそんな風に記憶されたいと願っていることときっと同じだった。

私たちはエキストラみたいだと思った。出番が来るまで長い間待たされて、俳優の横を並んで通行人になって、収録が終わって離れて、でもそれは必要なお互いだったんだ。私はエキストラの二番目の意味も知ってる。

いつかまた同じ現場に呼ばれたなら、すぐに見つけられる。鮮やかなあなたは、きっといくつになってもモノトーンの服なんて着ないはずだから。

ミルフィーユ

小市民の結婚式など、仕切って仕切って四組はできそうな大きなレセプション会場の端に、申し訳程度に椅子が並べられていた。ある賞の受賞式に引き続いて始まったレセプションも終盤に差し掛かり、気付くと、彼女はそこに座っていた。

「お疲れじゃないですか？　これ、よかったら」

「そんな、お気遣いいただかなくて結構ですよ。でも、いただきます」

受賞者の妻であるその人はごくごくと、手渡したウーロン茶をグラスの半分ほど飲んだ。

「ハイヒールなんてねぇ、普段履かないから足痛くなっちゃって」

足をさすりながら、素朴な訛りを含ませて笑う彼女は体を起こし、明々と照らされている会場を、隣町の空で何か美しいことが起こっているような目で見ていた。

「ハイヒールだけじゃなくて、こんな華やかなところ来たことないからいろいろと慣れないんだけどねぇ、感激ですよ」

「ここに招待されるのは本当に限られた方々なんですよ。立派なご主人だから」

「そうなんですかねぇ。平日は毎日遅いから、ごはんを家族全員で食べたことなんかないんですよ。休日はうだうだ寝てばっかりで、子供と遊んでやったこともないし」

「そうでしたか……会社では立派にお勤めされていたからこその、今日のレセプションなんですけどね」

私たちは女同士の話の早さでくすくす笑う。

「結婚して今まで、ほとんど会話もしてこなかった気がします。家買ってから、主人を毎朝駅まで車で送って行くんですけどね、そのたった五分が会話のすべて。しかも、前を向いたままね。運転中だから当たり前なんだけど」

それでも確かに夫婦は成立していて、彼女は今ここにいる。

「ここには大臣までいらっしゃって、さっきは初めてお会いした社長さんから労いまでいただいてしまって。今はきっと、あの人と結婚してよかったと思うべき時間なんでしょうね。この会社に感謝しないといけないんでしょうね。こんな華やかな場面なんて、結婚式以来ですよ。二人きりで人様に写真を撮っていただいたことすら、それ以来だと思います」

彼女は遠い目のまま、ひときわ背の高い夫の背中を見つめていた。私は彼女の横顔を、会場の隅、スポットライトの届かない場所で見つめていた。今日までの一年一年

を、彼女の速度で振り返っているような穏やかな笑みが、私によぎらせなかった。そのときふと、先月仕事中に受け取ったある手紙のことを思い出した。

私の属している課には、たまにOBからの返却物が届く。その所有者は先日亡くなっていて、同封されていたのは、彼の妻からの手紙だった。

他事ではありますが、○○病院に入院中は病室から本社のビルの真正面を……又△△病院の病室からは日が当たり金色に輝くビルの側面を毎日眺めておりました。幸せだったと思います。

私は、あんなにも情のこめられた三点リーダーを初めて見た。私は間違いなく、もうこの世にいない彼と、手紙の送り主である彼の妻と顔を合わせたことはない。そんな他人に独り言のように、でも文字にしてまで伝えたかったものは、人生の大部分を過ごした会社への感謝だろうか。時期は違えど同じ会社に属している人間なら、言葉を浪費することなく通じる感情がある気がしたのだろうか。

どういう意図があったのか、確かなことはわからないけど、私は亡くなった彼が働いていた会社の社員で、近しい人を亡くしたことがあったから浮かんできた。妻が「幸せだったと思う」と言い切った、夕暮れの一瞬、強く光を跳ね返すビルの側面を見つめている夫の表情が、ふいに。

私にはとても金色と思えない本社ビルは、最期の病室でも見えていたあのビルは、彼らにとってそんなにも美しいものだった。きっとそのときの彼は、今、すべてが華やいだ会場で談笑する夫を見やる彼女と同じ表情をしていたのだろうと思った。

サラリーマンでもフリーのライターでもなんでも、一歩ずつ年数を経る場があるというのは幸せなのだろうと思う。金色に光る本社ビルも、このレセプションも、その場が重ねられた証なのだった。

「どんな仕事してたのかも知らないんだけど、こんなところに呼んでもらえるってことは、多分頑張ってたんでしょうね。私も働いてるけど、こんなに盛大な場所で褒められることもないし、形に残らないもんね」

隣に私がいることを忘れたように、彼女は呟いた。

妻が知らないと言った夫の仕事は、主に鉄道の車両整備と設計だった。夫が整備し、設計した車両はいつかスクラップされる。妻が夫のためにつくり続けた夕食は日々消費され、勤め先の郵便局で処理していく誰かの手紙も、すぐに手元を離れる。

それでも、毎日誰かが普段通りの生活を送るために働けるということは素敵だと思った。何か形に残らなくても、自分が生きている間だけでも誰かの生活を支えられているなら、それは立派なことだ。

「頑張ってたんです。こんな華やかな場所が用意されるくらい。でも……昨日の夕ごはんも今日の朝ごはんも、奥様がおつくりになったんですよね？　朝、駅まで送ったのも。お帰りになるまでにあっちに山盛りのケーキ、たくさん食べちゃってください。あのケーキ、奥様へのご褒美なんじゃないかな……って思うんですよね」

彼女は、ありがとう、と小さく呟いて、

「でも、言ってもらう前に、ケーキたくさん食べてきちゃったわ」

とけらけら笑った。私も声を上げて笑った。

彼女の夫が、こちらに近付いてくる。私は席を立って笑顔で彼にすれ違い、まだケーキのたくさん残るパーティー会場へ戻る。二人は久しぶりに車中ではない場所で、ちょっぴりぎこちなく話しているだろう。オーケストラは、私の大好きな曲を演奏している。もう少し崩した方が好みのワルツ・フォー・デビィが、会場の隅から美しく中心へ広がっていく。

レセプションが終わり、関係者の退出を確認して外に出た。中で脱いだジャケットを手に持ったままだったから、ニットの中の肌に、風が巻き付くように触れて抜けていく。急に降り出した雨が冷たい。メールを打つ指先が、急速に熱を失っていく季節が近付いていた。一駅先の新宿駅南口で、ついさっき会おうと約束した人が待っている。

私が人波に一秒でもさらわれてしまったら、見知らぬ人の肩越しに見える彼は、後ろが見えるか見えないかのかすかな動きで私の不在を確かめている。やっと追いついてぐっと近くにいくと、少し驚きながらもその距離を保ってくれる。

サザンテラスの端まで歩き、こんな夜なのに、絶え間なくリング型の生地を油の中に落としているドーナツ店の短い列に並んだ。

並んでいる途中配られたものと、注文したもの合わせて四個のドーナツを載せたトレイを持って、どうしたものか。と思いながら二階へ上がると、正面のカウンターに彼の鞄が無造作に置いてあった。盗まれても全く抗議できないような状態の前に座り、彼のアイスティーにストローを挿す。

「お、ありがと」

「九州男児仕様ね」

「俺、九州じゃないよ」

吸い口に残された紙袋を抜き取って、アイスティーをすする彼は言う。
「マスターとは知りあって長いんですか？」
「景太が入店してすぐくらいだよ。職場の人が連れてってくれた。それまでバーとか行ったことなかったけど、そんな俺でも、マスターのシェーカーの音は特別に綺麗だってわかった。最初は一人であの音聴きに行っただけだったな。話なんかしなかった」
「それは長いですね。道理で口調に遠慮がないと思った。でも、シェーカーの話は、すごくわかります」
私はブラックのアイスコーヒーを、立ち疲れた体に流し込む。
「遠慮がないって。大体こんなだよいつも。それより敬語やめない？　上司じゃないんだし」
彼はドーナツを見まわすだけで、手には取らなかった。
「どうしよう。ドーナツ四つは無理ですよね。二つも配られると思わなかった……」
「無理だよ。俺、さっき小滝橋でうどん食ったもん」
「私もパーティー会場で結構食べちゃった。ローストビーフとケーキと」
「もう一品当ててあげる。生ハム」

「はずれ。おそばでした」
「締めね。随行さん、しっかり楽しんでるじゃん」
私たちは、配られたドーナツの一個を半分ずつ食べた。残りの三個は、彼に持って帰るよう押し付けた。
「大人になると全然なくなるけど、褒められるってやっぱりうれしいよね。でも、何十年に一回どーんとまとめられるより、たとえば一週間一回こまごまの方がいいなぁ」
「そんなに褒められてたらありがたみなくなるよ。いろいろ失敗もあったけど、何十年頭張ったねって労われる方が俺はいいかな」
「ふーん、そういうもんなのかな。まぁいずれにしても、誰かが見ててくれたっていうのは、怖いけどうれしいことだ」
それからの会話は途切れ途切れだった。少しずつ、おそるおそる侵していく距離がまだそこにある。なのに、乗換駅のホームを降りたところで、彼は真っ直ぐに手を差し出した。
握手ってなんだか久しぶりだから、下のホームへ降りて行く年上の彼を、二回、振り返ってしまった。

M&LH

感覚が冴える日というのはあるもので、たいていそれは気候が穏やかで、寒いとか暑いとかに気を取られない季節の一日だ。

野村ビルの地下には美味しいコーヒーを出す店があって、今日は新宿から歩いてここまで来た。エスプレッソに氷水を注いでつくられたアイスルンゴの香りは、喉を通ってしばらくしてから鼻腔に抜ける。私は中毒みたいに、少しずつ口に流れ込む苦い液体から立ち上る香りを休みなく吸い込み続けた。

一口もらったカプチーノは、フィレンツェの小さなバールで飲んだものと同じ葉っぱ模様が描かれていて、味もよく似ていた。違うのは、バールで飲んだ方に味の濃いザラメが乗っていたことくらいだ。カウンターで、ぐっと煽けたカップにミルクを注ぐ様子を見ていると、私はそういう職業に憧れがまだ残っているからちょっとそわそわしてしまう。

電車に乗って、商店街に新しくできたキャンディーショップに入った。薪のように太い固まりを機械に通していくと、それは細く縒られて長く長く延びていき、軽快な

音を立ててカットされていく。

「おひとつどうぞ」

と、手に乗せられたその一つは緑色で、キウイの絵がはっきりと浮かび上がっていた。まだほんのり温かくて、酸味を舌の横の方で感じる。誰かへプレゼントしようと思い、カラフルなキャンディージャーを買った。

セキュリティーも何もない二年間住んだアパートの階段を上り、四階の上にある屋上に立つ。大家さんは出かけているようだった。

そこから見える野球場に、人間はいたるところで活動しているのだと感じ、でも、その光景は当時と変わることなく現実感がない。洗濯物が一つも干されていない屋上には遮るものもなく、今日の素直すぎる風が、ラフなまとめ髪の後れ毛をそよがせる。

カメラを構える人の横顔は、素敵だ。そこにあなたがいるということだけを知っていて、別のことをしている今の私は限りなく贅沢だ。

ついさっきまで新宿のはずれで感じていた静謐な雨音が、頭の中を流れる。その音に聴き入って目を閉じると、壁に描かれたアネモネの大きな花がモノクロに見える部屋や、ところどころ折れ曲がった古いブラインドから、うっすらと光が差し込んでいるあの時間の中に戻りかかっていた。

連れ込み宿と言う方がまだふさわしいだろうか。赤い絨毯の敷かれた廊下に面した引き戸を開けると広がる畳。何もかもがちぐはぐな空間で抱き合った記憶が迫る。

思いつきのように突然目を覚まし、じっとりと汗ばんだ身体を動かそうとしても思うようにいかなかった。やっと起こした上半身は、薄暗い部屋のブラインドの間隔と同じように、白黒のボーダーに染め分けられていた。

耳の上の髪をくしゃっと掴んで、古めかしい振り子時計を見る。まだ午後一時だ。ここどこだっけ。軽く見回すと、隣で寝息も立てず、気を失ったように眠る人に気がついた。薄気のすっかり抜けた寝顔の頬に、そっと手のひらを押しあてた。全然起きないからそのままにして、雨音の聞こえる部屋の壁を見つめていた。そんなことまで、コマ送りのように思い出した。

写真を撮るのに飽きたのか、私が不思議な表情をしていたからか、彼が声をかける。

「どうかした？」

「ううん、さっきの時間を思い出してた」

「なんだろ。あれ？　ホテルの部屋の天井？」

「天井？　なんかあったっけ？」

「うん。田舎のばあちゃん家みたいな、木の格子だった」

「ずっと起き上がらなかったもんね」

「身体、起こせなかった。あの日、勘で『生きてほしい』って言った俺は、先見の明が……ごめん」

「今も、勘？」

「意地悪だね、結構」

彼は否定を示す笑みを浮かべ、またファインダーを覗き込む。

同じところにいたって、見えている物も感じていることも全然違う。考えていることも、ふと見ただけじゃわからない。それでも、その違いを面白いと思って、つながっていたい人に出会った気がした。

こぼれる

体温までいとしい。

私の口からこぼれた言葉は、自分の耳が拾う前まで私の中に存在しないものだった。自分が何を言ったのか理解して呆然、動けない。

いとしい、と名付けられた体温を私に与えながら、あなたは天井よりずっと遠くを見て、そんなことを言われたのは初めてだと、淡々と云う。

シーツの擦れる乾いた音以外は、何も聞こえない。横たわる彼の胸に耳をつけて、心臓の音を聞いた。とくとくと波打つ拍動は、私のよりもまだ速い。言葉はよく、嘘を吐く。

そうじゃなきゃ嫌だ。私も初めて言ったんだから。私も、目を合わせたりしないで遠くを見た。彼は、私の耳たぶから流れ出すようにつけられている金色のチェーンを指ですくって、私の頬ごと撫でさする。

真っ白な地図

ショートパンツにグレーのニットポンチョを合わせ、髪を高い位置でおだんごにして、駅を見下ろすカフェで苦いモカマタリをもう、ずっと前に冷まして話をしていた。していたというよりは、九割五分聞いていた。

ガラスに反射して見えるサラリーマンのレジメンタルタイが、結構好みだな。なんて思ったりして。スーツって魔法の服だよなぁ。にしても、女の文句と噂話ってなんでこんなつまんないんだろ。新人の化粧が濃いとか、誰と誰はくっついたとか別れたとか、そういうのどうでもいい。そんなに気になるんだったらあの子のアイライナーと同じの買って、あの子くらい極太にして、全然その和顔じゃ浮いちゃうよって見本見せてあげれば。社内の人物相関図つくりたいなら、私じゃなくて他に聞かなきゃ。

空腹と眠気も相まって、ますますぼーっとしてしまった。興味のなさがすぐ顔に出るから、それはいい大人のすべきことではないと思いながら、立て直す心も勉励していた。でもこの子がほしいのは、情報提供者でもなく、私みたいな、反論もせず話をさせる人間のはずだからまぁいっか、と思っていたら、気のない態度があまりにじ

み出ていてカチンときたのか、彼女は何の脈絡もなく言った。
「黙ってようかと思ったんだけどさ、菜緒、最近会社で嫌われてるよ」
「え、そうなの。知らなかった」
「言わないでどんどん状況悪化するよりも、早めに知っといた方がきっといいもんね。付き合い悪いし、何考えてるかわからないからだって。私はそんなことないって言ったんだけどね」
同僚のミカリン（このあだ名もそろそろキツイ）は、ちょっと得意げな顔をして、早速自己弁護付きの報告を始めたので、私は心底がっかりした。
私は、私のことを嫌っているという人の集団を思い浮かべた。自分を保つために、その中には私が好きだと思っている人を一人も入れなかった。それなら、大丈夫。
「あ、落ち込まないでね。そんなことってよくあるじゃない。周りに誤解されて、噂が独り歩きしやすい人って世の中にはいるしね」
落ち込んでいると彼女が誤解した私の空想時間は十秒ほど続き、空想の集団に元から入っていた彼女に、まぁ、ちょっとさみしいよね、と言った。
「淋しいって、それだけなの？　嫌われないようにどうしたらいいの？とか、私を嫌ってる人って誰なの？とか普通聞かない？」

「聞いてどうする」
「だって、嫌われたくないでしょ。人に」
「ミカリンはさ、嫌いな人いないの？」
「そりゃ……いるけど」
「なら、一緒だよ。私が、嫌われてるだけの人間ってわけでもないんだよ。私のことを気が狂うほど好きな人もいれば、私にも殺したいくらい嫌いな人もいる可能性はあるんだよ」
「そんなことわかってる」
「自分に嫌いな人がいる限り、自分も誰かに嫌われるのは受け入れなきゃいけないことだよ。小学校の時、先生言ってたもん。自分が好きになれば、相手も好きになってくれるって。その逆だよ」
「小学校って、菜緒あんたもういくつよ。いい年じゃん。嫌われたらなんでもやりづらいことくらいわかるでしょ。ちょっと我慢とかすれば上手く……」
「うん、わかってる。ごめん。でも、私のこと嫌いな人に説教されても、どうしていいかわかんない。ごめん」
私はカウンターの高い椅子から降りて、店を出た。ミカリンは、私と同じいい年の

大人だから大声を出したりしなかった。会計を先に済ませる店でよかった。と、まだ細かいところに頭が回る自分は、思ったより冷静だった。毎日うっすらと、同僚の視線から、冷たいものを感じていたからかもしれなかった。

ミカリンが来週から、口をきいてくれるかはわからなかった。スタスタと歩きながらも、一口目から濃かったモカマタリが胃に重たい。

いつもと違う電車に乗って、銀座に寄った。私の好きなバンドのシングルは特にキャンペーンも打たれず、ひっそり先行販売されていた。私はそれを買って帰り、パソコンに取り込みながらベッドに寝転んで聴いた。少しずつまとめ出した荷物が、いくつかの段ボールに詰められて壁沿いに積み上がっている。

何回かリピートして、だんだんとすごさがわかってきた。

この曲は聴く場所を選ぶ。

違う、

ふと聞こえてきたその場所を、選ばれたものに変える。

もうちょっと、

なんでもなかった場所を、いつまでも知り尽くせない、美しい場所に感じさせる。

説明が難しい。でも、今まで感じてきた美しいものが、メロディーを覚える頃には

喜びとなって浮かんでは消えた。音楽はときに、怖いくらい宗教じみた力を持つ。こういう音楽と、気が狂いそうなくらい好きな人を身体にはっきり取り込めるなら、私は幸せなのだった。

その曲をiPodに移して、用事もないのに銀座に戻った。イヤホンを差し込んだまま、数寄屋橋の交差点を歩く。小さい頃、こんな都会に来たことがないはずなのに、純色の空の下で不二家レストランの温かい光を懐かしく感じている。

にわか雨が降ってきた。小走りに不二家の店内に入ると、同期の達大が女性と一緒にケーキを選んでいた。同じ会社でもフロアが違うから、平日も全然顔を合わせないのに。今日は、見つからないうちに外に出たいかも。そう思って、何も買わずに入口へ向き直った。

自動ドア越しの空は凶暴な黒さで、雨足は、叩きつける季節外れの夕立のようだった。一瞬出るのをためらっていると、

「菜緒じゃん、一人？」

背後から、彼らしい明るい声が聞こえてしまった。

「え、あ、そうだよ」

「夕飯食べた？」

「ううん、食べてないけど」
「じゃあ一緒に食おうよ。今日母親ミュージカル観に行っちゃって、帰っても夕飯ないんだよな」
「何言ってんの、さっきの彼女……」
「え、彼女は今日家のはず……って、あぁ、さっき横にいたのは知らない人」
「仲よさそうだったのに？」
「うん、店の外でちょっとぶつかっちゃったとき、急に話しかけられたんだよ。『モンブランって、いくつも種類ありますか？』って」
「何それ、変なの」
「あの人、目が見えなかった。で、手引いてショーケースの前につれてったんだけど、秋だからかモンブランやたら充実してて。一個一個説明してたら久しぶりに俺も食べたくなって、二種類も買っちゃった」
「そうだったんだ……」
「上、行かない？　グラタン食べたい」
「えー、私もグラタンがいい」
「いいじゃん別に。同じの食えば」

達大は不思議そうに笑って、レストランへ続く階段を上っていく。
私たちは、マカロニグラタンを皿のふちの一番おいしいところまで余さず食べきって、さっき達大が買った高級な方のモンブランをこそこそ出して、マカロニを突き刺していた大きなフォークで切り分けた。
窓を流れていく雨粒にテールランプが映りこむ。赤く反射する雨粒越しの銀座の街は、すっかり洗われたみたいで美しい。
「達大、くるりって聴いたことある？」
「あるよ。ばらの花、って曲くらいだけど。前ドラマの中で流れてたから。これ旨いなぁ」
「今日新曲発売してて、すごくよかったんだよね。うん、しつこくない。美味しい」
「へー、今持ってるなら聞かせて」
「あるある。いいよ」
イヤホンをそっと両耳に挿し入れて、達大は目を閉じた。私は彼の少し日に焼けた顔を見ていたり、窓の外を見つめたりして五分を過ごした。イヤホンを取るなり、達大は私をじっと見て口を開いた。
「菜緒、歌詞がいいと思った？」

「うーん、どっちかって言うとメロディーの運び方かな」
「そっか、ならいいんだ」
「なんで？」
「この歌詞に共感したんだとしたら、最近いろいろ周りが変化したかなと思って。明るい曲なのに、最後繰り返しのフレーズがちょっとひっかかったから。何にもないなら……」
「離婚、したんだ。一昨日。それと今日、会社の同僚に薦まれてるって話も直に聞いた」
「……何それ、いつの間にそんなツッコミどころだらけの人間になってたんだよ。不二家で話せるか？　嫌なら、場所変えるよ」
「や……かも。ここ、好きな場所だから」
「わかった。嫌になってもいい場所探そう」
大真面目に宣言するような内容じゃないのに、達大は真剣な顔で頷いた。
「嫌になっていいってなんだろ、明日には潰れそうなお店？」
私はちょっとおかしくなって、今日初めて声を出して笑った。

二匹のヒトデ

前から疑問に思っていたことがあって、それは星占いの一部について。
一つ目が、朝の某民放の最下位救済措置。
十二星座中最下位の場合、
「でも大丈夫、冷やし中華を食べれば頭がすっきりしますよ」
といった感じで救済措置が提示される。マリオカートでビリだと九割方出現するスターみたいな。
もし、その日冷やし中華を食べたら、どれくらい順位が上がるのだろうか。控えめに見ても十一位は超えられそうなので、浮上機会も与えられない上に相対的にかなり悪い十一位になったとき、よりがっかりすべきなのかもしれない。
運勢とか運命って、もしかしたらほんとにわかっちゃう人がいるのかもしれない。こんなに人間いればたまにそういう人がいてもいいと思う。なので、「ラッキーカラー」まではまぁいい。双子座の今日……とか考えたらもうとにかく黄色しか見えないとか、そういう回路を頭にお持ちなのかもしれないし。

二つ目は、ラッキーアイテム。

この前ある番組の占いで見たラッキーアイテムは「自転車置場」で、いや、何を根拠にこの人はそんなこと言うのだ、と考えていたら〈多分、自分の星座が最下位で、なおかつ自転車置場と無縁な生活を送っていたのだろう〉、冷やし中華はもっと不思議に感じてきた。

昨日、駅に置かれていたフリーペーパーの一つには『メトロ星占い』が載っていて、これなんか「ラッキー駅」が書かれている。このアイラ先生という御方は淡路町で降りたことあるのだろうか。そもそも日本人なのか。多分そうなんだけど。

そんなこと思いながらも、今月中に淡路町で降りてみようと決めて用事を探す双子座の私。あれだ、淡路町には確か世界の山ちゃんがあった。中学時代からの親友、美海を誘ってみよう。で、この話聞いてもらおう。フリーペーパー持って。

〈行けるんでないでしょか〉
牡牛座→本郷三丁目
獅子座→大手町
天秤座→東銀座

蠍座→新橋
〈理由つくれば……〉
双子座→淡路町
乙女座→月島
射手座→外苑前
〈やや厳しいか〉
牡羊座→落合
蟹座→入谷
山羊座→目黒
水瓶座→新高円寺
魚座→氷川台

「あたし氷川台に友達いるから行けるんだけど、理由これじゃ怒られちゃうよね。しかも多分『ここまで来てもらうの悪いし池袋まで出るよー』とか言われるのがオチだよね。そこで『いや、今月は氷川台がいいの』とか言い張るのもおかしいし。『何それ今月って』みたいなね」

「だねぇ。じゃあ美海はもう冷やし中華的何かに頼るしかないよね」
「山ちゃんにないじゃん」
「今月は私しか救われなかった。運勢上がった後のどて煮、最高だね」
「別に冷やし中華食べたくないけど、なんかそれずるい」

私たちは、その後もくだらない話ばかりしながら手羽先の骨を次々に容器に放り込み、大手町駅までのんびりと歩き出した。
「遅くなっちゃったけど、美海の旦那さん……って言っていいんだよね。大丈夫？」
「うん、今日は泊まりこみで仕事だって」
「すごいよねぇ、美海働く必要ないもんね。それだけ稼いでくれれば」
美海は、私の顔を大きなとび色の瞳で見つめてから、足元を向いて微笑んだ。
「私、一生あの人のお世話になって生きていくのかなって思うと、怖いんだ。捨てられたら生きていけないとかいうのじゃなくて、私もう一回、たとえば十歳くらいに戻ったとき、今の生き方選んだかな、望んだかなって思うと答え出てるってことが怖いんだと思う。そもそも、あの人のお世話は全然できてないしね。家にいないんだもん」

私たちは黙りこんで、入り組んだ路地を歩いていく。大した距離はないはずなのに、長い時間がかかった気がした。同じ制服を着て、持ち物さえほとんど同じだった中学生の頃なら、いくらでも言えたことが、お互いに言えなくなっていた。
「もうすぐ駅だよね」
美海は、「いい天気ですね」とか「今日は寒いですね」と言うのと同じくらい意味のないことを口にした。
「大通りに出るまで」
私は、何の返事にもなっていないことを口走って、華奢な美海の右手をとった。別に何も話さなくてもよかったのだ。大丈夫、全部、上手くいくよ。そう、手のひらで伝えたかった。
少し驚いた顔の美海は、
「……私が部活辞めた日の帰り道も、こうしてくれた」
そう言って、右手に少し力を込めた。
「怖いの。なるようになるんだって言い聞かせても」
私たちは黙ったまま、結局、人通りの少ない駅構内まで手をつないでいた。二人とも獅子座じゃなかったけど、大手町駅のホームで見た美海の笑顔は、淡路町でも、

きっと氷川台でも見られないくらい優しくて素敵だった。

日比谷線

サヨナラ

閉館の一ヶ月前くらいから、職場では結構話題になっていた。僕は中途入社組で、電車が好きでこの会社を受けたクチではなかった。けど、明日で閉館という日に季節外れの風邪をひいてだらだら寝転んでいると、なんとなく気になってきてしまった。昔から、読んだこともない雑誌でも廃刊のニュースを聞くと、なんとなく哀しくなって立ち読みしちゃったり、ちょっと貧乏性なのだ。

ただ誰か誘う気力もなかったから、一人で地下鉄を乗り継いで交通博物館に辿り着いた。午前中には着いていたのに、先着八〇〇名への記念入場券はもうなくなっていた。

人で溢れかえる館内を所在なく左に進むと、パノラマ模型運転場というところに着いた。時計と掲示板を見比べると、もうすぐ運転開始時刻だ。既に、ディズニーランドのパレードが始まるときみたいに、幾重にも列をなしてガラスを取り巻く人たちがそこにいた。ガラスの中には、一人の視線も逃がさないジオラマの中心でマイクを手に立っている人が見えた。

「いつもは機械の自動放送が流れるだけなんだけど、最後だからあの人が説明してくれるんだって」

背後から、子供に説明するお父さんの声がする。僕はここに一度も来たことがないのに、いつもと違うらしい特別な光景に、少しせつない気持ちになった。

くいいるように、走り出す電車を見つめる子供たち、子供に負けない真っ直ぐな視線を注ぐ大人たち、カメラを構えるのも忘れて引き込まれる大人たち。溢れ来る思い出を、ガラスに映り込む子供の顔に重ねる父親たち。

みんなが心待ちにしている、新幹線や夜行列車が悠然と動き出す。誰も目を逸らせない。なのに、僕だけは、ガラスの中を見ていなかった。今を逃したら、もう見られない。そんな迫るような視線を撮り残しておきたかった。人垣に向けてシャッターを切っていく。誰も周りを気にする余裕はないし、遠慮なく。

日は落ちて暗くなり、ジオラマの中で一日が終わった。僕は、よたよたと一人で歩く小さな子の肩を持ち、人波にさらわれない場所まで進ませてその場を離れた。いい映画に出会って、エンドロールが終わってもしばらく立ち上がれないときのような穏

やかな顔の群れが、ウインドウにぼんやり映る。

なぞる思い出がないはずの場所でこんなにも感傷的になっていることに驚きながら、殺風景な休憩室に入り、来る前向かいで買ってきたハンバーグサンドを食べた。万世と言えばかつサンドだけど、僕はハンバーグサンドの方が好みだ。

きっと、ノスタルジーを覚えた父親に連れて来られたのだろう子供たちが、ちょっと飽きたのか休憩室の中を走り回っていた。あまり食欲がなかったので、サンドイッチを一個残してペットボトルのほうじ茶をすすっていると、見覚えのある顔が近付いてきた。

「朝生、お前も来てたん？」

「亮さん。お久しぶりです。いや、最後だって散々食堂で聞かされてたから、気になっちゃって」

「俺もそう。親父に連れてきてもらったことも一回しかないし、あんまり記憶にもないんだけどさ。あのジオラマなんか、俺の頭の高さがちょうど線路くらいって感じだったもんな。見え方は全然違うよなぁ」

「隣……」

「彼女。千夏。前話したことあったけど、こいつは駅での元同僚の朝生。今は車掌の

見習いやってて、結構苦労してるらしいよ」

「永倉です。亮さん、そこまでじゃないですよ。試験も一回で通ったし」

「ドア挟まれそうだし、まだお前が乗務してる電車には乗りたくないなぁ。彼女、今勤めてる旅行会社の支店がこの近所なんだ。なんだっけ、マンセイのそばだっけ？」

「マンソウだよ。いい加減、間違えるのやめてよね」

「それって、フルーツの」

「そうです、ご存じなんですか？」

「はい。僕、そこのホットケーキ好きで……有名ですよね」

「相変わらずそういう女っぽいもの好きだよなぁ、お前も」

「この人、いつも口悪いでしょ。ごめんなさい。許してあげてね。私、柏木千夏っていいます。近いうち、お昼にホットケーキ食べに行きませんか？　この人、お昼にわざわざ待ち合わせても、そういうのあんまり好きじゃないなって、いつもラーメン屋さんになっちゃうから」

「なんだよ、俺だけ仲間はずれみたいな」

「でもね、朝生君、この後は御茶ノ水の喫茶店にシナモントースト食べに行くの。分厚いトーストに生クリームたっぷり塗って食べると、その辺のケーキなんか目じゃな

時に、私が帰宅して最初にすることと言えば玄関に脱ぎ捨てた健康サンダルに足をつっこむことで、それはもうあの突起を愛してやまないのだけれど、

「片足じゃどうしようもないですよね……駅事務所のサンダルお貸しします」

「本当にすみません」

これはアスファルトを歩くようにはできていないから、足裏への刺激は想像以上。あたたた。ついでに、ハーフパンツから伸びた足先にはまるのが健康サンダルだという事実を物語る、道行く人の視線は強烈だ。あたたた。

哀しくなったからサンダルを返し、私は靴でなく単なる持ち主なので不本意ながら茅場町で降りる。もう会社に着いた。靴はベージュから黒に変わった。それだけだ。今日はまた過ぎていく。

「中島さんって人から電話。麻布駅？って」

「あ、ありがとうございます。もしもし」

「おつかれ。聞いたよ、靴片っぽなくしたんだって？」

「誰から聞いたの？」

「俺の情報網なめんなよ。路線違うくらい、なんてことない」

「はいはい、亮くんね、そんなことわざわざ内線で連絡して来ないでよ」

「あの駅、総出で探したらしいぜ」

「マジで？　菓子折りだね……」

「でも、どこいっちゃったんだろうな」

「さっき電話したら、中野まで行っちゃったらしい。私が行きたかったんだよー」

「何言ってんの？　あ、お客様見えたから切るわ」

ガチャン、という激しい音に一瞬で受話器を耳から離して、そっと置いた。あ、今日よろしくねって言うの忘れちゃった。

マジで、とか言っていたから、同僚が私の顔を不思議そうに見ていた。

「あ、麻布の駅で働いてる同期からでした」

同僚の納得した表情を見届けて、データ入力に戻る。パンプスは私の代理のように望み通りの中野まで辿りついたけど、持ち主は来月、近くでいいから旅をしようと決めた。

＊＊＊

始発を見送って、インフォメーションカウンターに立っていると、外国人観光客が築地市場への行き方を訊ねてきた。朝飯が築地なのかもなぁ。と、他人の幸福そうな未知をうれしがったりするのも、年甲斐もなく今日が誕生日だからかもしれなかった。

事務所に戻って、眠気をこらえながら朝食をとる。食パンを焼きながら食堂をうろうろすると、先輩がつくってくれたオニオンスープが鍋の中に残っていた。褐色の生温かい液体が、乾いた喉に温度を伝えながら滑り落ちる。食べ終えれば、次は事務所待機だ。

「なかじまぁ！　ソファに毛布持ってきてくれ」

同期と電話をしていると、先輩の声がする方向から車いすに乗せられた女子高生が運ばれてきた。ホームのベンチでぐったりしていたらしい。

「私、精神科に、通っていて、たまにこうなってしまうんです、すみません」

ソファに横たえるなり、過呼吸寸前まで息を上げながら謝る女の子を目の前に、僕はいくつもあるだろうかける言葉をなくした。けどすぐに、そんな普通のことで他人を遠ざけられると思うなよ、と意地になっている自分に気付いた。それがなぜかよくわかっていた。僕の幼なじみの美海は、この子と同じ高校生のとき、好きだったテニスをしなくなってから病院に通い出したけど、ずっと変わらずいい奴だった。精神

科がなんだよ。胃腸科と一緒だよ。

「傍にいていいですか」

こんな聞き方じゃ嫌って言いにくいな、と思いながらも許可されたから、ソファの横に膝をついて、毛布越しの右肩をゆっくりと叩いた。

ひたすら謝る彼女に、好きな音楽と麻布十番商店街のパン屋の話をじっくりした。しきりに繰り返された、すみませんという単語が消えていく隙間に、椎名林檎は素晴らしく、通学路にあるから知ってると思うけどモンタボーの牛乳パンは美味しく、楽器は何かできるといい。僕はチェロしか弾けないけど、ベースとドラムが今でもやってみたい。そんな話をねじ込んだ。

「今まだ、ドラムがいないんですよ」

彼女がバンドを組もうとしていると教えてくれたことが、一番うれしかった。当時の美海も、ピアノを弾いているときが一番生き生きしていたんだ。僕の弾くチェロの音を「なんか落ち着く」と言って笑った美海を見て、のめり込むように練習したことを思い出した。ゆきずりの駅員が望むことじゃないかもしれないけど、彼女も好きな音楽に癒されたらいいのにと思う。

歩けるようになった彼女を見送って、またカウンターに立っていると、見習いのときお世話になった先輩が通った。おつかれさまです。彼のやたらでかいヘッドホン越しに声は聞こえていないはずだけど、顔を見たらちゃんとわかってくれていた。

食堂に戻ると、父親くらいの年の先輩がケーキを買ってくれていた。千夏に連れて行かれる有名店では見たことのない、クリームたっぷりのショートケーキだった。子供の頃、誕生日とクリスマスにしか買ってもらえなかった、スペシャルいちごというケーキによく似ていた。食べきってから、マジックで書かれたおめでとうの文字が、白い箱の側面を埋めるように書かれているのに気付いた。四方にメッセージを書いてくれている先輩たちの姿を思い浮かべてしまうと、じんとした。

じんとしたのは正直そのせいかもしれないけど、急に熱が出てきた。長袖ブレザーでも寒い。今月は、風邪をひくことも忘れる慌ただしい月だった。もうちょっと忘れていてもよかったのに。喉が痛いのでとりあえず冷蔵庫に買ってあった甘いアイスを食べたら、もっと寒くなった。

今日はこの後、さっき電話をかけた会社の同期が女の子集めて誕生日会をしてくれることになっているし、根性で乗り切らねば。でも、恵比寿に行くまでに、あと八時間もある。一度、家に帰ろう。千夏は海外添乗に出ていて、今はロンドンにいる。

家に帰ると、ドアポケットに再配達伝票が入っていた。差出人は千夏だった。ドライバーの携帯に電話して、できるだけ早く持ってきてもらうことにした。そうじゃないと寝てしまう。

一時間後、掃除も洗濯も済んでしまった頃にやっと持ってきてくれた。封筒を破くと、ディスクが一枚と、真四角の包みが入っていた。ディスクをパソコンに差し込むと、写真がたくさん入っていた。今まで二人で行った場所で撮りためたものだった。僕も同じ場所にいたのに全然気付かなかったものや、僕が知らない表情をした僕がたくさんいた。

厳重に包まれたもう一つには、チェロの弦とバースデーカード。

「お誕生日おめでとう。当日いられなくてごめんなさい。チェロを弾く亮君をもう一度見てみたかったから、今年は弦にしました。帰るまでに練習してね」

押しボタンのついたカードには、声が吹き込まれていた。最近はこんなのもあるのか。と思ったのと、もうしばらく、千夏の声を聞いていない気がした。月の半分以上海外添乗ということもざらだった。これ以上離れていたら、僕の方が持たない気がした。

三時間眠って、久しぶりに弦を張り替えて公園に出かけた。バッハの、一番有名な

曲を聴かせたいと思った。お互いがまだ学生だった頃聴かせると、これが一番好きだと言っていたのを思い出したのだ。

千夏が帰ったら、外国どころかほんとはどこにもいかないで、ずっと傍にいてほしいってことを、弾き終えてすぐに伝えようと決めた。

ビタースイート

春に、写真を見て一目惚れした。こんなにも美味しそうなものが世の中にあるのか。私は、それを決して三時のおやつではなく、優雅な朝食として食べることを夢見た。バニラアイスのような半球型をしたホイップバターが乗り、その周りを粘つくことなく滑り落ちる褐色のメープルシロップ。薄めに焼かれたパンケーキ。それにナイフを器用に使って少しずつバターを回し溶かし、三つを口の中で一体にした瞬間を想像するだけでニヤニヤしてしまう。そんな食べ物のことを、引っ越し先も正式に決まって一息ついたとき、ふと思い出したのだ。

いつ来ても、人々がのんびりベンチに座っている日比谷公園をぐるりと回り、クリスマスが通り過ぎてすっかり静かになった仲通りを一往復した。午後二時を過ぎたのを確かめて、帝国ホテルのロビーまでのんびり歩いた。

ジーパン姿に何となく落ち着かないまま、フロントに立つ。

「もう一人はあとから来ます」

「ルームキーは二枚ございますが、どうされますか？」
「両方いただけますか？」
「かしこまりました。本日はお部屋が空いておりましたので、アップグレードさせていただいております。ごゆっくり手前どものホテルをご堪能いただければと思います」
当日のアップグレードは経験上結構あることだ。ただ、誰かに似ているのだけど思い出せない、感じのいいフロントマンに渡されたカードキーには、結構あるアップには見えない部屋番号が書かれていた。廊下には、エレベーターが開くと出てきて挨拶をする着物姿の仲居さんがいた。世の中、知らない職業がありすぎる。
ポーターに案内されたのは、角部屋のスイートだった。
「いかがでございますか」
「うーん、すごすぎます。私には分不相応です。ありがとうございます」
一応お客なのに深々と頭を下げてしまう。
「いえ、そんなことはございません。目一杯お楽しみください。不足している物があればすぐにフロントにご連絡ください」
予定のない休日を過ごす空間として、不足なんてあるはずがない。すべての要素が私に似つかわしくない部屋には、シックに光沢を放つ木製の机が置かれ、その正面には巨大な液晶テレビがあった。その向こう側には、ベッドルームと広い浴室が見える。
すぐにポーターを追い出し、私はしばし探検してトイレを二つも発見した。ソファにやっと落ち着いて、すでに湯が沸いているポットのロックを外し、スープ春雨をすすったり、水を飲んだりした。
どうやってもフロントを呼べはしないけど、一つだけ不足があるとしたなら、「あとから来る人」なんて本当はいないことだ。私は、広すぎる部屋の窓辺に向いた。

さっきまで歩いていた日比谷公園の奥に、松本楼が見える。角の窓からは汐留が見える。高層ビルの狭間には、薄暗い色の小さなビルが、いくつも立っていた。
テレビの有料放送も無料で見放題だと言うので、私は一本の映画を選んで、社長室にあるような背もたれの高い椅子に腰かけた。
この部屋の対価としては、ロビーに預けた額があまりに少なくて申し訳なくなり、冷蔵庫から帝国ホテルという紙を巻かれたチョコレートを取り出した。マーブル模様のチョコレートを一粒口に含んでゆっくりと溶かしながら、美しい長方形の窓に収まる日比谷公園を、箱庭を愛でる老人のように眺めていた。重厚な机に置かれている、IMPERIAL HOTELと書かれたメモパッドを指でなぞる。

映画をBGMに、手元を照らす灯りだけつけて、別れた夫に手紙を書いた。部屋には見知らぬ俳優の声が響いていて、広いから孤独なのに、iPodのイヤホンには手を伸ばさなかった。私はただこの部屋で、この手紙を書き上げたいとだけ思った。わずかに残った事務的な連絡と、今まで負担をかけてしまったことへの謝罪で、便箋は少しずつ埋められていく。

映画の中でヒトラーの暗殺は失敗に終わり、エンドロールになったところでテレビも消した。

私は銀座の方に歩いて、ソーキそばを食べようと約束していた年上の友人と沖縄料理店に入った。島豚の炒め物は不思議なくらい美味しかった。けど、ゴーヤの天ぷらは重すぎて、紙に油染みが広がるのを見ているだけで満腹になった。その人はオリオンビールを美味しそうに飲むので、一口もらった。お酒を飲まない私にも、飲みやすい素直な味だと思った。

ゴーヤの天ぷらを挟んでスイートルームの話をしたら

「その社長みたいな椅子に座ってみたいな……それって可能？」

彼は私の目を見て静かに言った。

「別にいいけど……」

曖昧に返事をすると、彼は携帯を手に持って席を外した。すぐに戻ってくると、ビールを一口飲み、

「社長なんて、夢のまた夢だよな。現実は」

と、少しだけ淋しそうに笑った。彼の勤める会社は最近買収されて、確か彼より若い人が社長だ。私はまだ、最近他人になってしまった夫のことを考えていて、励まそうとしても上手く返事ができなかった。

夜の銀座は、明るい。横断歩道を歩きながら、同じ物をたっぷり食べた友人の背中を見つめ、彼がさっき妻にどんな言い訳をしたのかは、考えないようにしようと思った。ビールの飲みすぎで暑くなったのか、彼は歩道の上でコートをめんどくさそうに脱ぐ。彼が好んで身につける、ランバン オン ブルーのスーツは、美しいシルエットをしていた。

日比谷と銀座のはざまには、不思議なほど寂れた通りがあった。夜の海辺に佇む、小さな倉庫街のようだった。何を投げてもすべてが吸い込まれてしまいそうな寂しい風景に、私は、昨日ようやく引き払った家の鍵と、それを滑り落としたドアポケット

が立てる冷たい音を投げ込みたくなった。あの音を、二度と思い返したくはなかった。

結局彼は、ホテルのバーで飲み直すと完全に酔っぱらい、私が肩を貸して歩かせなければならないほどふらふらになって、スイートルームのベッドにごろりと横になった。社長の椅子にも、もはや反応しなかった。

なんだろこれ、と思いながら、私はガラス張りの浴室の鏡に向き合う。引越疲れか、目元が落ち窪んでいた。バスタブにお湯をなみなみと張って、バスソルトを入れた。うっすらと汗をかきながら、彼の言い訳が外泊にまで及んでいないせいで、彼の携帯が鳴ったりしないことを祈った。

朝はいつもより早く起きた。パンケーキはルームサービスでも注文できるらしい。でも、こんな部屋に泊まることはもうないはずだから、これからもパンケーキの思い出だけは確実になぞれるように、一階に下りた。

パークサイドダイナーは、こんなに早い時間でも混み合っていた。私はメニューを真剣に吟味し、パンケーキと付け合わせにはベーコンと、紅茶を頼んだ。

実はほぼ球体のホイップバターは、別の小皿に盛られていた。ウエイターが去ってすぐに、バターを真ん丸のパンケーキの真ん中にそっと置いて、その周りにたらりとメープルシロップをかけた。

「菜緒ちゃん、いつもと違って今日、すげー幼く見えるよ」

あまりのはしゃぎっぷりに、昨日酔っぱらって眠ってしまった彼は困ったようにやさしく笑っていた。こんなに朝早く起こされるとは思ってもいなかったんだろう。

一目惚れした写真のままの姿をじっと見てから、丸いバターをくるくると滑らせ、三枚いっぺんにナイフを入れて、四等分にした。昔バイトしていたファミレスで教わった食べ方だった。四分の一をもう半分にして、じわっとバターとシロップが染み込んだパンケーキを口に入れた。表情が溶けていくのが自分でもわかる。今が幸福な時間であることもよくわかるし、彼はそんな私を見てげらげら笑っていたけど、一口食べると同じように、旨いなこれは、すごいな、と呟いている。

すごいものを食べた私たちはおかしなくらいハイになって、部屋に戻って正方形のキングサイズベッドにもぐりこむ。真横に体を横たえ、母がいつか、

「読み切れんほどの本と、それを読む時間があって、一年に一回海外旅行に行けたらあとのことはもうなんでもいいわ」

と言っていたのを思い出した。私は、こうして完璧な食べ物を知っていて、私の場面、場面にともにあってほしい人をきちんと思いつくことができれば、海外旅行がで

きなくてもいいのだった。昨日はちゃんと思いついた。幸せじゃないか。幸せで、左目から一筋だけ涙を流した。

部屋を出る前に、彼の上品なベージュのトレンチコートの肌触りにほっと自分を委ねて、少し涙をこぼした。コートの襟元に色濃い染みができていく。彼が元の夫に見えてきて、その染みが、いつまでも消えなければいいと思った。それくらい許される気がした。それくらい好きだった。

彼は勘違いをして、ごめんな、と言う。勘違い過ぎて笑っちゃうけど、私の身体だけをほしがった後にそうやって予防線を引く男なんか大嫌いだ。言い訳なんかいらないのに。あなたの家庭をどうにかしようなんて気は、かけらもない。心配しなくても、襟元の染みは乾くのだ。

そのとき、何が胸を詰まらす引き金になるかもわからず、ふいにそれが引かれてしまう日々がしばらく続くんだと知った。ありふれたベージュのトレンチコート姿のサラリーマンを見ても、寒い日に決まりみたいに買って、手に持たせてくれた紅茶の缶がポイ捨てされるのを見ても、夫の前でしかふらなかった香りをまとう女性にすれ違っても、涙をこらえたり、こらえるのも諦めて泣いてしまったりするのだろう。

チェックアウトを済ませ、すぐそばに開いている地下鉄出口を降りていく。正午になった。

「またね。酔っぱらっちゃってごめん」

二日酔いとは思えないその紳士的な声に、パンケーキの甘さは舌の上にありありとよみがえり、元の夫でない彼は、先に来た4番線の地下鉄に乗っていなくなった。誰かと寝て愉しいと思える日は来るのかな。ちょっと疲れてしまって、ホームに並ぶ椅子に座り込んだ。私の方がよっぽど酔っぱらいみたいに、バッグに顔をうずめて。

ラストデイ

ハチの周りには思ったほど人がいなくて、しかもハチさんお飾りをつけられているから、私みたいな暇人になでられる。

「なおごめん！」

五分遅刻の姉は、ブーツなのにダッシュでハチ、もとい私に近付いてくる。

代官山に生まれて初めて降りた。ずっと行ってみたかったけど、昨日ほとんど調べなかったからお散歩……くらいの気軽な気持ちで本当によかった。お洒落なその街は、大晦日くらい外に出なさんな、と大人っぽい余裕を振りかざしていて、帽子屋くらいしか開いていなかった。姉は、昔のハリウッド映画に出てきそうなつばの広いのや、チュールのついたトーク帽なんかを、とっかえひっかえ自分の頭にかぶせて遊んでいる。どうせ買わないのに。いや、買って今かぶるとか言われても全力で反対するけど。

三十分後には恵比寿に移動して、無印で新しい家に置くベッドを買った。あと、しずく型のビーズでできたシンプルなピアスを一つ買った。

「お姉ちゃん、あたしね、毎年やりたいことがあって……お風呂入った後に、元旦迎えたら何から何まで新しいもの身につけたいの」

「全部？」

「そうそう、コートから靴から下着まで全部だから、大変なのだ」

大変なのだ、じゃない。敷金礼金でボーナスは飛んでいたからそんなお金は当然なくて、今年はピアスだけを新調した。恵比寿もそれだけで終わってしまった。六本木へ。

「今日、一、二駅ずつしか移動してないよ」

六本木ヒルズに着いて、ノーカラーのコートがお気に入りの姉は笑う。アフターヌーンティーの紅茶はおいしくて、落ち着きすぎて二人とも黙ってしまう。知らないうちに、ポットの中身を全部飲みきっていた。

けやき坂をほんの少し上ると、室温の変化を最小限にするべくドアマンが立っている店がある。ドアを開けてもらい、人間様よりチョコが偉いショコラトリーに入る。列に並んでから入るように促された部屋には重厚なショーケースが据え付けられていて、小さなチョコレートが整然と並んでいる。隣の奥様は、贈答用なのか一万円分も買っていた。結局、私たちは四粒のチョコレートを選んで、小さな袋にいれてもらった。これで野口さん一人を簡単に手放すことになるのです。

ちょっとしたセレブごっこを終えて、何度目かの展望台に行ってみた。ちょうど日の入りから夜景まで欲張れる時間だ。

今日は、東京タワーが見える場所へ陣取った。

「おばあちゃんになったら、やっぱりタワーが見えるとこに住みたいなぁ」

私はそう言って、空の下ですっと伸び上がるタワーを撮り続ける。あるとき空が、紅色になった。緑色の空を初めて見た。思わず声が出て、カメラを何度も構える。

夢中になりすぎて、横で老夫婦が眼下を覗き込んでいるのに気がつかなかった。慌ててその場を譲って通路に戻ると、いつも人がいない西南側に人がいた。合間を見透かすと、日の入りだった。人垣の後ろで背伸びする姉と並んで、今年最後の太陽を厚い雲の中に見送る。普段、こんなに長い時間太陽だけを見ていることもないから、そのシルエットは目に焼き付いて、まばたきする度に何度も美しい残像を起こす。

また東京タワー側に戻って、タワーと、別物のように変わる背景を撮り続けた。気付いたときには同じ場所で百枚も撮っていた。姉も七十枚近く撮ったらしい。今さらだけど、姉は今まで使っていたフィルムカメラと違う、小さなデジカメを持っていた。

「あれ、前からこれだっけ？」

「ううん、借りたの。友達に」

完全に日が暮れた。エレベーターで急降下した先の店で、私は現代建築のカタログと、五枚のポストカードを買った。

けやき坂には、そこが歩道じゃないみたいにたくさんの人が立ち止まる。私も真似して警備員の横に立ち止まる。立ち止まった人々の視線の先には、青い光に包まれた真っ赤な東京タワーが立っていた。

ひと気のないテレビ局の裏口から、青く光る森タワーを見上げた。

「今日しあわせ」

私は大きな声で言った。向こうから歩いてくる外国人の男性は、私を大きく避けることもなく通り過ぎてくれた。姉はたしなめるような目を、一瞬でいたずらっ子の目に変えて、

「私も！」

と叫んだ。先に声を上げたのは私なのに、カメラを三脚ごと肩に背負って歩くさっきの男性を思わず振り返った。彼は悠然として、歩みを止めない。

「ちょっと、声でかすぎ！」

私は姉に向き直った。ごめん許して、と声を出さずに訴える姉の目にちょっとドキドキした。しばらく流行っていた小悪魔なんかとは比べ物にならない、蠱惑的な目

だった。姉がこんなにくるくると表情を変えるのを、私は長い間見ていなかった気がした。多分、青いイルミネーションの光が映り込んだせいじゃない。私はたしなめ役をすぐ降りて、まぁいっか、と駅の方向に向かう。

姉の家に戻って、六本木の24時間スーパーになぜか売っていたにしんの甘露煮で、にしんそばをつくった。関西人の両親にとってこれは定番だったようで、毎年食べていたそばは、私がつくっても懐かしい味がした。

買ってきたブレンドティーをマグカップに淹れて、チョコレートを食べる。四粒すべてが、一瞬その名前通りの香りを立ててロの中で溶けていく。これを誰にあげようか考えるのは、楽しい空想になりそうだった。

「相変わらず甘いもの好きだね」

姉のくすくす笑いを片耳で聞きながら、甘くなったロを紅茶でリセットして、私は顔を完全にとろかして、それを笑われてまた笑う。私はお酒が飲めないけど、シャンパンを使ったのが一番よかった。大掃除もしなくてテレビもほとんど見なくて、それでもこうして二人でお正月を迎えられることが、ありがたかった。

姉の撮った写真のうち、十枚には、私がカメラを構える横顔が映っていた。照れてしまうけど、自分がこんな真面目な顔をする瞬間があることを初めて知って、ちょっとうれしかった。

「写真、ありがとう」

そう言おうとして顔を上げると、姉はライブDVDの中のマイケル・ジャクソンに夢中になっているから、とりあえずやめた。

「自分の好きなものを、偏狭に、理屈抜きに愛せない人間なんて、話しても楽しくない」

と公言している彼女にとって、そうやって愛していい存在が、取り巻くダンサーの誰よりも魅力的に踊っていた。

私は姿見の前まで行って青い石のピアスを外し、新しい、しずく型のピアスをつけた。

ピアスキス

1番出口の階段を上りきると、もうみんな待っていた。菜緒と、知らない男の子と、亮だ。

「こんばんは！　菜緒さんの同期の営業2課、安藤達大です」

私が口を開く前に、スポーツマン風の男の子が挨拶をする。

「ごめんお姉ちゃん、同期の女の子来られなくなっちゃって」

「私は全然。亮ちゃんごめんね」

「いやいや、菜緒ちゃんみたいな綺麗な子、一人で充分。全然オッケー」

「調子いいね、いつもだけど」

「頼むから、初対面の人とテーブルつくまでにイメージ落とすのやめてくれるかな。その速さ、挽回難しいから」

今日は、旅行会社に勤める彼女が海外添乗に出てしまい、一人で誕生日を迎える亮の誕生日会をするために恵比寿に集合した。全員女性で囲んであげようと思っていたんだけど、

「実は一人で……」

と亮から聞いたのが昨日だったから、妹とその友達しか確保できなかった。しかも菜緒の友達は男になっている。四人で、サーモンピンクの壁に大きなトンボが描かれているカフェまで歩いた。

「シャンパン飲もうよ」

「今日の主役に遠慮っていう概念はなさそう。菜緒どうする？」

「ん、最初、乾杯の一口だけもらうよ」

「今日はいいじゃん、みんな俺のためにありがとう」

「彼女、いいねぇロンドン」

「お前さ、哀しいことを思い出させるなよ。最近結構こたえてんだから」

細いグラスに小さな泡をらせん状に立ち上らせるシャンパンは、あっという間になくなった。ワインのボトルを頼んで、のんびりと飲み始める。菜緒はお酒をほとんど飲めないので、亮の目の前にシャンパングラスをずずっと押し出して、別に頼んだサラトガ・クーラーを飲んでいる。円い小さなテーブルの上に、色とりどりのアンティパストが並ぶ。

「亮さんは、彼女さんと付き合って長いんですか？」
達大君が、間をつなぐようにそつなく質問をする。
「長いね。学生のときからだから、もう五年くらいか」
「すごいっすね。俺、そんなに続いたことなくて」
なぜか男二人が真面目な恋愛トークに突入し、私たち姉妹は向かい合ったまま笑ってしまった。意外とワインが早く回ったのか、二人は熱心に、私たちのことも全く見ないで話している。
「菜緒、このペンネ美味しい！」
「ほんとだ。ブルーチーズの味が最後残るね。家でもつくってみたいと一瞬は思うんだけど、絶対やんないよね」
「そだね……」
「お姉ちゃん、早く帰りたいんでしょ」
「あ、ばれた？」
「ばればれだよ。いつものお姉ちゃんだったら、そだね……の後に変な持論展開するのに上の空だし。携帯ばっかり気にしてるし」
「ごめんごめん。うん、そろそろ帰ろっかな」

「今度その人紹介してくれるなら、二人には適当に話しとくよ。年末、カメラ貸してくれたのってその人でしょ。大丈夫、トイレ行くふりしてそのまま帰っちゃえ」
「ありがと。いつもの私なら『自分より上手くできる人がいるなら対価払って任せるのが賢い』って言ってたと思うよ」
「なのに、人任せじゃなくやってあげたくなるのが恋。その人にペンネつくりたいお姉ちゃん」
「頭悪くなる恋、食材を生かしきれず無駄にするだろう私……って、そこまでいってるのかわかんないんだけど」
「そんなもんだ。大人になっても」
笑い合って手渡した五千円札を、菜緒は球場の売り子のように器用に畳み、指に挟んだまま手を振る。私は、静かにカフェの階段を下りて行った。
彼は近くまで車で来ているようだった。『ウェスティンホテルの前で』と短いメールが返ってきたときには、ちょうどそこまで歩いていた。助手席の窓から覗き込むようにすると、その速さに驚いた風もなくドアが開かれる。
「このワリカン時代にアッシーなんて、俺も時代遅れになりました」
「私、古風な男の人大好き」

「それ、喜んでいいの？　絶対酔ってるしな……」
彼はどっちつかずに笑って、買ったばかりの車のオーディオをいじる。信号だらけの道になってから放置された画面を、勝手に私がスクロールする。
「レディオヘッドがいいな」
「古いのしかまだ入れてないよ。いい？」
「私も新しいの、あんまり知らないから」
私は、このアルバムのどの曲についても歌詞の意味がわかっていないけど、厭世的な雰囲気が一曲ごとに深まる三曲目までをじっと聴きながら、目を閉じたまま時折、ロずさんだ。
「煙草、吸ってもいい？」
「どうぞ」
箱から一本抜き取り、口にくわえられた煙草にライターを近づけた。
「きみも古風な女だねぇ、その流れるようなタイミング。もう吸ってないのに綺麗なライター持ってるとこも」
「その代わり、じっくり見せてもらうんだ」
「何を？」

「息吐く横顔。車の中で、スマートに吸う人の横顔見てるのが好き。古風でしょ」
「古風というか、意外とベタなこと好きなだけじゃないの？　吸いづらくなったなぁ。消していい？」
「とりあえず一本はどうぞ」
最初から倒れ気味だったシートに深く沈み込み、斜め後ろから見ることに決めた。と体で示した私を一瞥し、彼はもう一度口を付けた。ふーっと息をつき、灰を落とす動作を三回繰り返した。
「うん、素敵」
「いろんな意味で、きみの夫になる人は早死にしそう」
「そうかも」
「俺、こう見えても将来孫にお小遣いばっかりあげて、好かれるおじいちゃんになりたいんだけど」
一瞬固まった私の顔を見て、
「あぁ、ごめん、なんか変だな。煙草は身体にあんま良くないってこと、一般論」
彼は一息で言い切ると、黙ってしまった。無言の時間が遠くの赤信号まで続いた。
停まった車の中、私は彼を目で呼んで、傾いてきた彼の横顔にくっつく耳に口をつ

ける。首もとに残る落ち着いたミドルノートが私をそこに引き止めた。信号が青に替わってやっと解放された彼は、まだ混乱したような顔をして黙っていた。いつもの冷静さとか人を見透かすような彼の性質は、この車内にもう、かけらも残っていなかった。

ドライブスルーで買ったコーヒーを飲み干す頃には、家に着いてしまった。シャワーを浴びて、携帯を手に持って横になる。

「今日はアッシー君に徹するから」

最後まで落ち着かない口調で前を向いたまま話す彼の横にいたのは、たったの数十分だった。それじゃ足りないよ。と言いたくて、最近やっと見慣れてきた名前を探し出し、電話をかける。

夜はことさら穏やかな彼の声を私の右耳に届けていた携帯が、ツーツーと切断音を立てたのを確認してボタンを押した。

布団を抱き枕のように抱え、携帯を離した耳にイヤホンを挿し入れてレディオヘッドを聴いた。この作業はなんだろう。今日買ってきた小説をさっと目で追いながら、

考えていた。

多分、彼の声が揺らす感情と、昨日欲してやまなかった存在の感触を覚えていたかったんだ。胸が詰まって言葉にならなかった気持ちを、パッキングしたみたいに、いつ取り出しても真新しいままにしたかったんだ。この曲がテレビから聞こえてきたり、ウォークマンの気まぐれで突然再生されたとき、また胸が詰まって、彼以外のすべてのことを考えられない自分でいたいんだ。

納得して今はただ、逢いに行こうとしないように眠る。腕がここにあればいいのにと思うくらいで済むように。

おやすみなさい。呟いて、この声は届いている気がした。

モノトーン

一週間のうち二度寝ない夜があると、人は突然抗えないほどの睡魔に襲われることを知った。今日はとにかく眠くて、何をしていても、ふっと意識を失う。

そうやって小刻みに寝ていると、夜の六時が来るまで本当に長かった。ストールをだらっと巻いて、フェルトのハットをかぶってとぼとぼ大学に行くと、もうレポートの課題が掲示板に貼られていた。

必死でメモをとる人垣を見て、この集団に潜り込まなくていいならどんなにいいだろうと思った。見えないと文句を言い合いながら押し合っている人、身を乗り出して覗き込む姿勢、ケータイを打つ音、すべてが気持ちのいいものじゃなかった。

けど、卒業くらいしか、今の僕にできることはないんだ。別に卒業できなくても死にはしない。でも、できることもしないのは、周囲から忘れられたような寂しい場所での途中下車だ（ちなみに、これはマスターの受け売りだ）。自分でそこから道をつくっていかない限り。

その道のつくり方も延ばすべき方向も、うっすらとわかりながら見て見ぬふりをする僕は、身を乗り出さず文句を言わず、ケータイを打たずに手帳にペンを走らせた。読めないくらい汚い字を、澄んだ水色で。

電気を付けっぱなしで布団にもぐりこんで携帯のテトリスをしていたら、突然目の奥が痛くなって、携帯を閉じた後の記憶がなくなった。

目を開けて、床に転がっている時計をたぐり寄せると、二時間半眠っていたようだった。喉がからからで、僕は高校のとき買った色褪せたジーンズのままアパートの階段を下りて、自販機でポカリスエットを買った。一気にラベルの下まで飲み干して、白み始めたばかりのひんやりした空気を感じながら橋の欄干にもたれた。野外フェスで飲むポカリは正直どんなカクテルも勝てないくらい美味いけど、ここで飲むのはいたって普通だ。

春に、白に近いような薄い色の花をちりばめていた桜の木は、ごっそりと葉を落として、水の上に大きく黒く広がっていた。朝の四時半、世界は白黒だった。

この少し先には有名なチーズケーキ屋があるし、どこで着るんだよ、って突っ込みたくなるポンチョにびっくりするような値札をつけて平然としているセレクトショップも、オールタイム使い勝手のいいカフェも軒を連ねているから、日中はそれなりに

人通りがある。けど今は、さすがに誰もいなかった。親からも仕送りをとっくに止められている七年生を責める人も笑う人も、誰もいないのだった。

昨日は、残り二十単位の内たったの二単位にしかならない生物学基礎の授業に出て、バーに行った。

ホールのアルバイトとして入って、もう六年目だ。マスターのシェーカーが立てる音は僕のそれとは全然違って、話しこんでいたカウンターの客が会話を自然と止めてしまうほど、美しくて軽やかだ。

僕は、ホールからカウンターに移った五年前の四月以来ずっと弟子入りした気でいるけど、マスターは、諭すように何度も言う。

「随分回り道してるけど、いい大学いるんだからでかい会社に就職しろよ。こういう水商売は、お前には向かない。景太、親御さんにこれ以上心配かけるなよ」

「そんなの、もう無理ですよ」

昨日もそんな話になった。いつも通りかわして家に帰ると、大学六年生の彼女から電話がかかってきた。就職が決まったらしい。こんな時期外れに採用やってるなんてどんな会社だよ。と思ったら、僕がいつも読んでいる音楽雑誌の出版社だった。

給料も安くて、入稿前なんか家に全然帰れない業界だって聞いたことがあったから

反対したかった。けど、じゃあいつ就職するの？　結婚なんて全然考えてないんでしょ、とか言われると答えが見つかっていないから、電話越しで黙ってしまった。こういう変化をどこかで予期していたのか、彼女の誕生日にかこつけて柄にもなくペアの指輪なんか買ってしまっていたけど、それすら言えなかった。

あいつはそういうこと言わないとは思っているけど、女の子は、少なくとも僕みたいなのに関わってくれた女の子は、僕がバーカウンターでビルドに熱中してたり、友達とギター弾きまくってたり、ＤＪの真似ごとしてるうちにすっかり現実と向き合う大人になっていて、将来が見えないとか、頼りないってセリフを僕にくっつけて、別の場所に踏み出していった。ついていけないって言われたこともあったけど、きっとあの子は、僕より先を歩いていきたくなったんだろうな。

アパートまで歩きながらペットボトルの中の液体の動きを感じ、足の踏み場のない部屋を今日こそ片付けようと思う。カレンダーまた替えてないや、それも。

今、笑いたいような泣きたいような気分なのは、人間は仲間が必要で、何かしら理由をつけて集まらないと淋しくてたまらない生き物なのだと知ったから。

その理由が音楽だったり会社だったり、スポーツだったりなんでもいい。そこかしこで共通項をダシにしたひとときが持たれているこの世界を橋の上から俯瞰すると、

僕もそうだったんだ。と泣きたくなった。
ずっと一緒に学生やってる気がしてた彼女が急に社会人になることがうらやましくて、でも逃げ道に走ってるようで一言言いたいような、そんなぐちゃぐちゃな感情をぶつける対象になるなんて思ってもみなかった。僕らは共通項を、少しずつ穏やかになっていく恋だけに減らしても、やっていけるんだろうか。

東西線

白線の外側

家事をする必要もない、しかも友達も少ない有閑マダム状態を脱したくて、でも普通の会社員になれる気もまだしなくて、昔から好きだった英語と社会の家庭教師の登録をした。メールで紹介された案件は偶然電車で十分ほどの近所で、早速申し込むとあっさり採用された。私は二軒のお宅に週一回ずつ通うことになった。

小学生と中学生の英語教師という話だったのだけど、テスト前は英語だけじゃなく他の教科も見てほしいと言われた。さすがの私も中学生の数学くらいはなんとかなった気がしたので、まぁいっか、と了承した。

今日は小学校五年生の授業だった。初回の授業で

「美海ちゃん？　みゅーちゃんでいい？」

とあっさり教師にあだ名をつけた女の子はいつも明るくて、完全に私のことを友達だと思っている。仲介会社の担当が体験談として話していた、手の付けられないワガ

ママ生徒とかじゃなくて本当によかった。友達扱いの方がずっとありがたい。

家に着くと、彼女の部屋ではなくリビングに招かれた。テーブルには大きな箱が置いてある。若々しいお母様がはしゃいだ声で箱を開くと、メロンがでんこもりのケーキが現れた。グラマシーニューヨークなのがまたお洒落だ。私が子供の頃、こんなケーキは話題にすらあがらなかったし、今でも私は実家近くの店のケーキを食べ慣れているせいもあって、そこのスペシャルいちごが一番美味しい気がする。

今日は女の子の誕生日だった。前々から言われていたので、プレゼントは用意してあったけど、そんな日のカテキョが休みにならないのが個人的に不思議だった。

せーの、の掛け声でお母様と私がハッピーバースデーを歌う。

「みゅーちゃんも」

とお言葉を賜り、一緒にロウソクを吹き消した。ケーキ二切れ＋おせんべいを平らげた彼女は、大満足で自室に引き上げていく。私も慌ててついていく。

「みゅーちゃん、私が解いてる間、もしかして暇？」

分数の計算問題をやってもらっていると、そんなことを聞かれたので、そうでもないよ、と言ったのに

「じゃあさ、これ切っといてくれない？　変なこと頼んでごめん」

手渡されたのは、彼女とその友達が変顔しているプリクラのシートだった。しばらく、黙々とプリクラを切り分けていく。カテキョ来てケーキ食べて、プレゼントあげてプリクラカット。最後は、毎週来る度に増えている着うたの新作を聞いて終了。こんな友達ごっこに対価を与えられる余裕があるって、すごいことだと思った。

翌朝。クーラーを消さずに眠ってしまったせいか、声が出にくくなった。今日は中学一年生の授業だ。今日は英語と社会のテスト対策の予定だった。ワークを解いてもらう間、私はこれ幸いと喉を休ませる。ただ、その時間が長く続くことはなかった。

「先生、『マトン』ってどう書くんですか？」

「マトン？　そんな英作文あるの？　ちょっと見せてもらっていい？」

『牧場には羊がたくさんいました』

「いや、マトンって羊のお肉だよ。まだこれ牧場でちゃんと生きてるからｓｈｅｅｐ（単複同型）！」

「そっかぁ、羊のお肉好きだから勘違いしちゃった」

「そもそも学校でマトンのつづりは習ってないはずだけど、マトンもラムも美味しいよね。私も大好き」

採点中。

「ｓｔｕｄｅｎｔ？　何これ？」

「あ、間違った！　何かｎとｔの間ってこうしたくなっちゃうんですよ」

「don't みたいな？　私、あんたの生徒じゃないし、みたいな感じ？」

「そうですね。反抗期」

「学級崩壊まっしぐら」

もう一カ所で同じことをしていた。これでアイドルみたいにカワイイ顔してるから、かわいい子に甘い私は全然怒ることができずに一緒に楽しんじゃって、世の中ちゃんとバランスとれてるんだなぁなんて思う。

ほんとはいけないんだけど、この子の家は仲介会社を通さずに個人契約にしてくれたから、私はその日に先月分のお給料をいただいた。私がしたことに対してお金が支払われたのは、生まれて初めてだった。

中野ブロードウェイを散歩して、何か自分に買おうかと思ったけど、結局、サンモールのそばのスーパーでこまごまと食材を買い込んだ。今日は、カルボナーラでも作ろう。

徳用パックのベーコンを手にとったとき、ふいに、私はもう誰のことも待たなくていいのかもしれないと思った。冷えたカルボナーラなんて、脂が白く凝結して食べられたもんじゃない。一度手にしたベーコンを戻して、少量しか入っていないパンツェッタをかごの中に放り込んで、レジに歩いた。

お年玉でおもちゃを買いに来た子供みたいに、ポチ袋からお札を抜いて支払いをした。食材を袋に詰めて、改札をくぐる。一歩ずつ階段を上り、始発が待っているホームの真ん中に立った。

もう、待つのはやめた。

私は人気のないホームの上で呟いた。もうやめた。誰に宣言したいのか全然わからなかった。誰かに「もうやめろよ」って止めてもらうのは、誰かに容認されてから動くのは本当に楽だった。そんな誰かをいつも待っている自分をやめたかったんだ。

立ったまま電車を何本か見送って、私は今の自分が一分後に一番していたいことを確かめた。家に帰るのもやめて、スーパーの袋を持ったまま、グランドピアノのあるスタジオに向かった。

浸透圧

映画音楽の中にはいくつも素晴らしいと思うものがあって、サントラを買ったことすら何度かあるけど、映画自体を見たこと、まして映画館に行ったことはほとんどなかった。心から付き合いでアムロちゃん主演の映画を見たり（彼女がそれ以降映画に出ているという話は聞いたことがない）、音楽担当のバンドが好きだというだけで観に行った映画は、何を言いたいのか最後まで全くわからずエンドロールで呆然としたり、映画館にはそんな思い出しかなかった。この世からひとつ残らず消えてしまっても、時間を過ごしたい場所なら他にいくらでもある。

ただ、私はその日の午前中辞表を出した。いつもと違う私がいたのなら、きっとそれが原因だ。

勤務先は、教科書や参考書をつくっている会社の下請けで、神楽坂の路地を入った場所に立つ小さなビルの二階にあった。ゼミの先生の知り合いが社長だったというだけで、完全に腰かけ派遣みたいな気持で入社した。

三年、正確には二年と十一ヶ月の間、後輩は一人もできなかった。お茶くみからこ

まごました作業はすべて私の手から離れてくれることはなく、一番早く出社するために、ちょっと無理して会社から歩いて五分のアパートを借りた。毎朝ベッドでビターの板チョコを一かけ食べて、なんとなくエネルギーを得た気になって歩き出す。

私の仕事は、原稿の校正だった。本当にそれしかやってこなかったのだ。原稿はメールかバイク便で送られてきて、赤を入れてバイク便で返す。それを毎日続けて、ついさっき社長に辞表を出した。向かいのお局の視線をやり過ごせる広いフロアも、異動できる部署も、新人を採用する余裕も何一つ持ち合わせていない会社で働くのは限界だったのだ。

「一応受け取るけど、明日話をしよう。午後は早退していいから、もう一度考えておいで」

社長は立ち上がり、家に帰るよう促した。バックを肩にかけて出ていく私に、誰から声がかけられることはなかった。

そうやってできた午後の時間、家に帰るのもなんだなぁと歩いていると、ギンレイホールの前まで来た。名画座ってなんだろう、と毎朝通る度に思っていた。今日はテルミンと、聞いたことのない映画の二本立てらしい。私は初めてその小さな映画館に入った。携帯はかなり頻繁に鳴る方なので、サイレントモードにした。

中に入ると、五、六人が座っていた。映画はやっぱりそんなに興味深いものではなかったけれど、映写機が照らすほこりっぽい空気の青白さは、えんじ色のシートによく似合っていた。こぢんまりした室内には、知っている人なんか誰もいない始発の下り電車のような不思議な静けさが漂っていて、私はテルミンの途中でいつの間にか眠っていた。

家に帰ってバッグから携帯を取り出すと、五通のメールと二件の留守電が残っていた。先に留守電を聞いた。もう終わりが見えていた恋人からと、社長からのメッセージが一つずつだった。一つ目は、どちらかが言わなくてはいけなかった明確な別れの言葉で、二つ目は、『落ち着きましたか？　明日は、新橋駅の銀座口で十二時に待ち合わせましょう』と吹き込まれていた。

「新橋駅…か」

新橋の明るい道で恋人と美人にすれ違って以来、連絡はお互いとらなくなった。多分、お互いに何かを決める気力がなくなっていたんだと思う。どちらかが幕引きするのを、待っていた。

「あいつに、そんな器用なことできないもんねぇ」

彼と私は誕生日が二日しか違わなくて、先に来る私の方は、あと一週間後だ。イベ

ントは、いつでも何かに区切りをつける。必要にかられて切り出さずにいられなくなったのが、彼の方だっただけだ。また、別の相手と初めての誕生日を迎えるために。

とはいえ、随分なタイミングだった。彼は最後まで間の悪い人だったなぁ。そんなことを思いながら、蛇口をギュッとひねって熱いお湯をジャバジャバとバスタブに注ぎ込み、アナスイの入浴剤をたらりと落とした。強烈に甘いバラの香りが、狭い風呂場に濃霧となって満ちていく。

汗をじわりとかきながら、元恋人の声をボタン一つで消し、明日の社長との時間について考えた。どんな話になるんだろう。そもそも、なんで私はお局のイジメって要素にあんなにも捉われていたんだろう。

いや、もっと他に理由あったんと違うの？　出会いもないし、暗いし、どうせならお人形みたいなモデルがいっぱい出てくるファッション誌の校正やりたいし。

私、ほんまは何をしたかったんやろう。教科書の校正と比べたらファッション誌がいいけど、もっと別にあったんとちゃうんかな。頭の中がぐるぐるする。

「この歳になってまた同じこと繰り返すなんて、面倒じゃないのかねぇ……全然面倒じゃない人に遇っちゃったら、それは仕方ないって言うしかないのかな」

もう随分前に、頬から水滴を拭き取る機会さえ与えられたなら、感情から何から痕

を残さずに泣くことができるようになった。私は、徐々に薄らいでいた恋人が私の生活から全く姿を消したことに対して一筋涙を流し、自分のわからなさに、もう少し多く涙を流した。

「あいつより面倒なことしようとしてんのは、うちの方か…」

汗みたいにさらっと涙を落としたらすぐに泣きやむはずだったのに、突然、しゃくりあげるのを止められなくなった。殺していた声までが漏れだしてきたとき、携帯が洗面台で震えた。クラブで知り合ったフランス人からの電話だった。

何度か目元をぬぐい、浴槽で電話をとった。

「アンヌゲンキ？」

「アンヌじゃなくてアンナだよ。全然、元気じゃないよ」

「ゲンキジャナイノ？　Ｗｈｙ？」

「恋人と別れて、仕事も辞めるし、この先どうしたらいいの？　なぁ、私どうしたらいい？　もう全然わからへん」

彼はきっと、来週のイベントに来るかどうか確かめたかっただけなのだ。なのに震えた方言混じりの日本語でまくしたてられて、戸惑っているはずだった。二人の間から言葉がすっかり失われた。呼吸が落ち着いてようやく我に返り、謝ろうとしたとき

受話器から声がした。

「アンヌハ、アンヌガイチバンダイジニスル」

私の中に、これほど言葉がゆっくりと入ってきたことはなかった。自分の耳が捉えた音声を頭が完璧に追いかけて、同じ調子でもう一度だけ私に反復を許した。そういう感じだった。言葉に感触があるとしたら今だ。

私が一番好きな小説に出てくるフランス人の老パティシエは、

「人間は、自分の命が一番大切よ」

と言って、家族もいない、もはや何のよるべもないパリへの帰国だけを望んで神戸を去り、パリで死んだ。彼は、老パティシエと同じようなことを現実の世界で私に言った。

私は驚いて、一瞬で泣くのをやめた。というより涙が勝手に止まった。しゃくりあげるのも、左腕できつく抱きしめていた体の震えも止まった。私は、今日空になった白いシャンプーボトルの傾き方も、石鹸の減り方も、今目にしている光景を何もかも写真に撮ったみたいに覚えているだろう。

「だから、アンナやってば」

もう一度理屈じゃなく惹かれるものを探しながら、自分を一番大事にする日々を、

今日から始めようと思った。そしたらアンヌと呼ぶ彼にも、明日、仕事を放り出して私に時間を割いてくれる社長にも、心の底からありがとうを言える。

浴室のドアを開け放つ。バラの香りを小さな部屋にも逃がして、私は自分の身体を丁寧にほぐす。わからないなりに、自分のことをもう一回逃げずに見よう。私は、今やっと、面倒を繰り返す覚悟を決めた。

いっしょに帰ろう

「美海、俺さ、結婚することになったんだわ」
「え、あぁ……そっか。多分今日そう言われると思ってたけど、ショックだわ」
「お前は先に幸せになっといて、俺は幸せになっちゃいけないみたいな言い方だな。おめでとうとかないの？」
「……そうだね、ごめん。おめでとう」
本当はそこでもう一度混ぜっ返して「ないない。あたしはいいけどあんたはいけない」みたいなことを言わなくちゃいけなかった。素直に謝ってしまってから、私たちはグラスの中の氷が溶けてできた不味い水まで飲み干して、しばらく黙ってしまった。そもそも、こんな時間まで幼なじみの男と飲んでいる私を幸せだと思っていることが不思議だった。あんなに長く一緒にいたのに。

今や、中間世代がぽっかり抜けたニュータウンで生まれ育った私と亮は、計画された町に備えられた幼稚園から高校まで迷うこともなく通っていた幼なじみだった。どちらの親ものんびりした性格だったから、家同士の仲もよかった。だけど私たち二人は、中学を卒業するくらいから少しずつ遊ぶこともなくなってきた。

ぶっきらぼうなしゃべり方をするようになった高校生の亮は、突然チェロに夢中になった。何度か聴く機会があったけど、もともと楽器が合っていたのか、回数を重ねることに、目を閉じて没頭することができるくらい上手くなっていった。指定校推薦とやらで早々に進学を決めてからは、輪をかけてチェロばかり弾いているとおばちゃんは嘆いていた。

私はピアノを続けるか随分悩んでから、服飾系の専門学校へ行くことにした。自分の不安定さを許容するように響くピアノに、本格的に関わって嫌いになりたくなかった。いつまでも、友達のような存在でいてほしかった。

亮のことなんか考える暇もなく課題をこなす毎日が続き、街中で見かければ、凝視してから目をそらしてしまうような奇抜な服を着ている友達に囲まれ、暇を見つけては飲み歩き、たまに日暮里に行って布地を探したりした。

ボタンが縦に八個も並ぶアンティークグリーンのコートができ上がった日、運良く

座れた帰りの電車でうとうとしていると、目の前から声がした。
「美海じゃん！　久しぶり」
「わー亮だ！　大学慣れた？　楽しい？」
「微妙。でも旨い味噌ラーメン屋があった。今度昼食べ行くか？」
「そんな暇ないよ。課題きついし」
「そっか。今まで学校か。腹減ってない？」
「うん……だいぶ」
「ちょっと飲んでく？」
「うん」
私たちは昔から一緒にいたから、間に挟む単語が少なくて済む。そのわずかの言葉は、終電間際のざわめく車内で、とても心地良く響いた。
団地行きのバスが出る駅前にはチェーンの居酒屋しかないと思っていたら、一軒小洒落たカフェバーが裏通りにできたのだと亮は言った。私たちが卒業した高校の先輩が、脱サラして始めたらしい。
「たまには『とりあえずビール』やめたいよな。えーっと、レッドアイください。おまえは？」

「アマレットミルク、アマレット少なめで」
顔はさすがにわからないけど、私たちの先輩は微笑してカウンターに戻る。
「アマレット少なめってそれ、ミルクだよ。お前絶対酒飲めるだろ」
「そっちこそ、ビールやめるって言ったのに、それビールのカクテルじゃん」
先輩がカウンターキッチンに戻ると、すぐにお互いを揶揄しながら、お通しのちょっといびつなトリュフチョコレートを食べる。トリュフに刺さるピンの透き通った色がキレイで、私はそれを指で弄いながらほっと息をついた。
その店はフードメニューも充実していた。学食で軽く食べてきた亮と向かい合い、ホロホロ鳥のパスタを食べた。
「俺、チーズ食べたくなってきた。ゴルゴンゾーラのピザください」
「あと、ペリエください」
「あと、タンカレーでシンガポールスリング」
「なんで、シンガポール……なんだっけ？」
「スリングな。カクテルってさ、名前が面白いの多いじゃん。先週初めてここ来たときに、いろんなカクテルの名前の由来とか、どこでつくられたのかとか、あの先輩に

教えてもらったんだ」
「で、シンガポールスリングというやつは由来面白かったの？」
「うん。ラッフルズホテルって知ってる？」
「サマセット・モーム」
「よくそういう単語出てくるな、お前」
私は、ミルクティー色の短い髪に指を差し込み、くしゃっとつかむ。
「スタンダードなカクテルって、生まれた場所とか経緯がわからないものも多いんだけど、このカクテルは、ラッフルズホテルのバーで最初につくられたってことがちゃんとわかってるんだ。もう特許みたいなもの。時間って、どんなに金積んでも買えないもんな。これが百年近く前に生まれたっていうことは、最近コンクールで優勝したどんなに旨いカクテルも担えない事実なんだ」
薄いピザ生地にたっぷり乗ったゴルゴンゾーラの風味が際立つように、はちみつを細く垂らして円を描き、亮はそれをあっという間に食べた。
私たちはそれ以来、たまにこのカフェバーで夕食をとるようになった。高田馬場と市ヶ谷なんてそんなに離れてもいないのに、毎日全然違うことをしているから、近況報告だけで面白かった。

そのうちに亮は彼女ができて不便になったからか、ニュータウンに飽きたからか、大学のそばで一人暮らしを始めた。私は、卒業してすぐに、浅い色をした髪と眼をほめてくれた男と出会って、目標を失ってふらふらしていたせいか、大きな部屋に半ば保護されるような形で暮らし始めた。
彼は金融関係の仕事をしていた。海外出張も多くて、ちっとも家に帰ってこなかった。なのに、私がいくら渡されても使いきれないくらいのお金を稼いでくる人だったから、その使い道の一つとして家を買うことにしたらしい。場所は不便じゃなきゃどこでもいい。美海のセンスで探して。と言われていたから、ターミナルだし、飯田橋にした。
そんなことすら私に決定権を与えながら、彼は結婚という制度自体に反対していて、いわゆる事実婚という形をとろうと言った。付き合って二年経った頃だった。実家の両親は、私が一人暮らしを始めたいと言った当時、全部自分でやってみなさい、と言って住所もろくに確かめなかったし、私が誰と付き合っているのかも知らなかった。私が頻繁に実家に帰っているせいで、この家に来る気配もない。
亮は近くに住んでいるはずだった。でもなんとなく気恥ずかしくて、偶然道で出会ったり、入ったカフェで見つけたり、そんな出会い方じゃないと上手く話せない気

がした。専門を卒業した私が日中入り浸っているカフェは、ニュータウンの駅前にあったカフェバーと雰囲気がよく似ていた。

亮と飯田橋で会ったのは予想以上に遅かったけど、一年半後、私の望み通り偶然が似合う駅の改札でだった。真横でICカードをタッチしている亮と私は、ほとんど同時に顔を上げた。

「美海、セレブの仲間入りしてたって聞いたぞ。俺でも知ってるよ、その会社。外資系ってやつだろ。にしても連絡遅い」

「は、誰から？」

「会社の友達。美海の中学からの友達いるじゃん。俺はクラス違ったから、会社入るまで話したことなかったけど」

「あぁ、あの子か。わかった」

「来週どっか空いてる？　お祝いどこでがいい？」

「お祝い？　なんで？　わかんないけど、お茶するならハイブカフェがいいな」

「あぁ、あのパンがいっぱいあるとこか。そんな近所でいいの？　もっと景色いいとことか、高級なとこでも」

「いいの」

私とは対照的に、亮はしばらく会わないうちに、明るい感じの口調と笑顔を身に着けていた。

亮は、案の定早合点して、肝心なことを聞いていなかった。私たちがただ一緒に暮らしているだけで正式な夫婦でないことを。伝えるタイミングも、完全に逸した。

頼んだカジキマグロのグリルが思ったよりずっと大ぶりで、もう料理はいらないし、亮はちゃんと選択肢をくれたのに、困ったときに眺める夜景なんか裏路地のカフェにはない。まいったなぁ。私は何か頼むこともせずに、少しずつ溶けだす氷水を飲んでいる。

「外堀からどんどん埋められた感じなんだよなぁ」

亮は困ったように笑いながら、結婚式で企画しているサプライズについてうれしそうに話をしている。

黙ったままでもよかったんだ。結婚式の話なんか、一つも聞きたくなかった。私が、親にも言えない結婚の話なんか聞いてほしくなかった。しかも外堀からなんて大嘘だ。

亮の頑固さは、私がよく知っている。周りが何を言ったって、納得しなきゃ絶対言うこと聞かないくせに。よく、知ってる。多分、誰よりも……。

曖昧に流しながら、今から一時間ぶらついて帰っても、誰もいない家の暗さをはっきりと思い出した。でも、六年前のカフェバーで話したカクテルの名前はなかなか思い出せずにいた。

ダイヤのピアスを片手で弄んで上の空の私に

「そろそろ行くか」

と声がかけられて、数秒後には伝票が来た。

「今日は祝い事だから」

亮は、メニューにはないのにつくってもらった、私のアマレットミルクもまとめて払ってくれた。

「今日、実家に帰ろっかな」

「え、今から間に合う？　そうなら早く言えよ」

「今決めたんだから、しょうがないでしょ」

亮の婚約者には、私も二回くらい会ったことがある。私たちより二歳年上だ。でも、黒目がちな目とえくぼのせいか、私よりも幼く見える。現に、私は彼女のことを千夏

ちゃんと呼び、千夏ちゃんも私のことを美海ちゃんと呼ぶ。大学のサークルでの縁が続いて、二人は結婚を決めた。

店を出て、あっという間に着いた駅の改札の前で、私は尋ねた。

「私って、カクテルに例えると何？」

「なんだよ突然。俺、バーテンじゃねーよ」

「ただのカクテル好きのしがない会社員に聞いてるの」

「しがないまで言わんでも。お前は……シンガポールスリングかな」

私は、店の中で思い出せなかった名前を与えられて、その意味をじっと考えてみた。私たちは、時間に関してたいていの人よりも長い重なりがあって、それはこれからも関係に変化がなければ、一生誰かにとって代わられる立場ではない。そういうことなんだろうか。

「ねえ、千夏ちゃんは？」

私は、自分の口が動きを止める前から既に後悔し始めた。どんな返事が返ってきても惑ってしまいそうで、目を合わせることもできずに道の排水口の辺りを見ていた。

「あいつは、マティーニかな。ドライの」

千夏ちゃんの可愛いらしい雰囲気だと、もっとカラフルで甘いカクテルが合いそう

だと思っていた私は、あまりのスタンダードっぷりに驚いて、納得した。
「マティーニって、すごいこと言うね」
「そう？　俺にとっても、やっぱり一番普通だから」
「歴史、これから誰よりも長くなるもんね」
「あぁ、そのはず、だよな。……そいえばさ、俺ら今のところ、一番歴史ある同士だよな」
「そうだね、ラッフルズだから」
「俺、明日休みなんだよね。一緒に帰ろうかな、団地」
「やだ、一人で帰ってゆっくりしたいのに」
「やだとか言うなよ。帰ろうよ」
亮はいたずらっぽく笑いながら、私の手を引っ張って歩く。
「勝手に手引っぱんないでよ」
私はなすがままホームまで引きずられて、偶然空いていた端の席にどさっと座りこんだ。亮は、早速目を閉じる私の横で体を小さく揺らして笑っていた。
「美海はこういうとこ、全然変わらねーのな」
独り言を言う亮にほんの少しもたれて、とりあえず新宿まで。明日亮に予定がなければ、最近つくった曲があるから聞いてもらおう。その後、あのカフェバーで月と6ペンスを読みながら、一人でシンガポールスリングを飲んでみよう。それだけ決めて、眠りに落ちた。

優しい雨

仕事を終えて駅に着く頃には、交差点に面したケーキ店は半分シャッターが閉まっている。ごほうびって言葉は客観的に見ると恥ずかしいけど、私は疲れが気力を奪わないくらいでおさまっていたら、長い横断歩道を渡って、しっかり焼けたプリンを買って帰る。

何か区切りがついたとか、いいことがある度に一本買って帰ったばらの花が、最寄駅が変わってそうなったのか、会社員として単純に糖分の塊やしを求めているのかはちょっとわからない。

今年になってから、一度もプリンは買えていない。ショッキングピンクと数え切れない色が交差したマフラーを、温かさに飢えた私は無理やり二重に巻いて口許まで覆う。陽気に酔っぱらった集団とすれ違うと、この中にも、私よりずっとこの仕事に向いている人がいるんだろうなと思ったりする。いや、全員かも。

耳の下に朝、薄くつけたブルガリブルーが、つけ立ての濃密な香りしか知らない私にはなじみのないラストノートに辿り着いて、それはマフラーにまで染みついていた。

冷たい空気ごとそっと吸いこんで、私は今日を確かめる。

日付が変わる直前に、運河にかかる太鼓橋を渡る。いつもするように西を向くと、渇いた海に吸い込まれるように濃く重く流れる運河の先、東京タワーだけが白けぶりの先でぼんやりと光っている。

火事かな。温かな光の塔を白ませる何かにそんな感想を覚えて他人事のように歩きだすと、まだ空と言えないような低い位置で、千切れ雲の集まりがうなるように北に向かっているのだと気がついた。空がこんなにも近い。思わず足が止まったのは、その雲の一つは私だからだった。

たくさんの社会人と同じ方向を向き、週末が来ることを毎日望んでいるくせに、希望をあっさり超えた速さで日々は過ぎる。一番近くの雲が流れ去っていかないうちに、掴んで西南西に投げてみたら、週末なんて概念もなくなるかな。高知はもっと南寄りだっけ。今日は、なぜかどうしても、あなたに会いたいのに。

そんなことを思っていたら雲はあっという間に流れて行って、身動きのとれない私は逆方向にある家に走る。まだ今日は終わっていない、それを知る道具になった東京タワーを背に、太鼓橋を渡り切る。

すると、バッシングする車がマンションの前に止まっていた。走るのをやめて近付

くと、窓が開き、
「おーい、ちょっと乗りませんか？」
と、彼が顔を出した。この前と違う車だったから、全く気がつかなかった。何も言わず、とりあえず助手席に乗りこむ。
「車、恵比寿に来てもらったときのと違う」
「そうそう、もうぶつけちゃった。修理中です」
「……降りていい？」
「大丈夫だって、しばらく都心には行かないよ。都心で免許取った人々を俺は心から尊敬するよ」
彼は確かに都心には向かわず、郊外のコンビニの広い駐車場に代車を停めた。
「何か買ってくるよ。何がいい？　まずプリンだよな」
「焼きプリン」
「焼き、ね。あー俺よくわかんないから好みじゃないの買ってきそう。夜中に怒らせたくないから一緒に行こう」
私たちは間違いなく焼きプリンと、コーヒーを買って後部座席に戻る。
「なんで、今日うちの前にいたの？」

「八時頃のメール、暗かったから。『プリン食べたい』って一行が、いなくなりたいに見えた」
「ちゃんと絵文字つけたのに」
「泣いてるパンダでごまかせないくらい、暗かったんだよ。つらくなったら、じゃないか、死にたくなったら最初に俺に言って。って約束覚えてんのかなって思って。勘違いだったらそれが最高だけど」
「エスパーだ！」
「俺、自分のこと守ろうとしたんだ。今、いなくなられたら俺がまいるから。あの人のこと、ずっと覚えてても別にいいんだ。他に一生忘れられない人がいたっていいけど、今ここに来られたのは、俺だけだよ」
私の茶化した返事にかぶせられたのは、鈍い重みを持った言葉だった。
「……エスパーだ、ほんとに」
私は、もう人に重みをかけて寄りかかったりしないと決めていた。依存対象が消えてしまった瞬間から始まる、重心を取り戻すための息苦しい時間は、もうこりごりだった。でも、彼は軽い私の言葉に、調子を合わせてくれなかった。
「やっぱ、正直に話す。俺の前だけでも忘れてて。そばにいて、一瞬でも俺が見えて

ない顔する女なんか、いらない。一番必要だって思ってほしいのに、俺のこと使えない女なんか、どんなに魅力あっても必要ない。一回壊れちゃえばいい。だから……」

私は、その言葉を彼の身体とシートの狭間で息をひそめて聴いていた。

彼は、黙って続きを待っている私を認めて、はっきりと取り乱した。

「ごめん、とか言うなよ。壊れてもいいって、なんでまだ思ってんだよ」

私は、手近にあった言葉を奪われて何も言えないで、彼の背中にすがりつこうとして、その手は宙で固まった。

夜明け前に戻った一人の部屋で、私は買ってもらったプリンに手をつけず、ぼんやり床に座る。鞄の中で携帯が、こんな時間に三回も鳴った。

「そんなこと言うなら、いなくならないって約束してよ。絶対破らないって、万一もないって言ってよ」

伸ばされた腕につかまりたくて、でも怖くて飲み込んだ言葉が、小さな部屋の中にこぼれだす。

出窓のカーテンを閉めなかったのが悪いんだ。そんな理由をつけて納得していたけど、一昨日から、朝四時台に起きるようになった。まだ外は暗い。電気をつけても暗い。今日は確か土曜日だ。このまま起きていても、あと五時間眠ってもどちらでも構わないことに、心からほっとする。

今日は起きる方を選び、何しよう。と、塩気のきいたブレッツェルを齧って考えて、私の好きなバンドの曲を聴いてみたいと言っていた友達にCDをつくることにした。ディスクに入りきるだけの曲をやっと絞り込んで、書き込んでいる時間になんとなく、一曲目の歌詞をワードで起こし始めた。

特に凝った表現があるわけでもなんでもないのに、目元に熱がこもった。キーボードをたたく指の動きが、その時間の中でさらに速くなるのを感じながら、十曲分の歌詞を打った。全部空で書き残せるくらいのそれらは、私の中に深く染み込んで感情を揺らす。

私が文章を何万字書いたところで、この数行が表現する世界には追いつけない。私が、声を枯らすまでしゃべったところで、この一節に黙らされる。四年間の猶予を享受しながら、さらにそこから数年経って気付いたのはそんなこと。

でも、音にだけ感動していた私が、彼の書く日本語を泣くほど好きだと思って写経みたいに写しとっているのは、多分その猶予があったからだ。きっとこの時間は私の

ものに、いつかなる。

プリンターは特に高度な作業を求められなかったから、規則正しく紙を吐き出す。そこに並ぶ文字は私の気持ちと同質化して、ただ旅に出たくなったり、特定の人にぽつっと昔話をしたくなったりさせた。

今日はめずらしく昼から外出をして、夕方になるまでに帰ってきた。久々にバイト仲間に会えたから、ふわふわと実感のなかったひと月が一日で取り戻せた。そんな日に出会った鏡のような紫色の運河を、私は橋の欄干に凭れて撮る。

隣に携帯のカメラを構える女性がいた。そうなりますよねぇ、と話しかけたい気持ちを抑えて一枚撮っている間に、彼女は太鼓橋を降りていった。

学生時代、パン屋のアルバイトで仲良くなった杏奈は、仕事を辞めるべきか前から迷っていた。それは私も先輩も知っていた。辞表を出した後も、何度か慰留されてまだ辞めてはいないらしい。辞める辞めないの話し合いになるに決まっている今日の昼食に、私は何ができるだろう、と考えようとして、仕事を言い訳に結局何もせずに今日を迎えてしまった。銀座の気軽に入れるイタリアンレストランへ続く階段を下りていく。濃いニンニクの香りが入れ替わるように上ってくる。

雨は誰にでも同じように降り注ぐ。

先輩が用意していたのは、聖書の言葉だった。実直な筆圧で書きつけられた字が並ぶ手帳をテーブルに置いて、静かに話しだす先輩の声を思い出す。

「つらいのは自分だけじゃない、つらさも幸せも感じるか感じないかは自由だけど、誰にも平たく注がれるって書いてあるんだ。そういうことなんだと思うよ、仕事も。ほんとに嫌になって、逃げ出したくなることもあるんだけどさ。俺みたいな歳になっても」

毎日、今日と同じくらい幸せは降ってきているのに、それが肩に触れても地面に落ちても気付かなくて、いつの間にか解けてなくなっている。

先輩の言葉は、私への言葉になっていた。私は、そのとき地下にいたからか、降ってきたものを普段より一階分多く拾えた。それは思ったよりも多くて、肺のあたりがいっぱいになった。手帳越しに話す二人を見ていたら、なぜか私だけが泣いてしまいそうだった。

日曜日の夕方、近所を走りに出かけた。やっと辿り着いた川の真ん中には首都高が

走っている。私は対岸に沈む夕日を見て帰ることにした。

首都高の真下には人影なんて全くない。目をつぶっても走れるくらい平坦で、去年の冬に出張した大阪の川沿いに似ていた。同じように地下鉄が地上を走り、私は鉄橋を目標にひたすら走る。冷気に弱められた西日が、左頬を淡く照らす。

鉄橋の下に近づくと、聴いていたスガシカオに雑音が混じった。左側が壊れて聞こえなくなったヘッドホンを外して耳を傾けると、管楽器の音がした。

走るのをやめて歩いていくと、橋脚のたもとで譜面を見ながら、ホルンを吹いているおじいさんがいた。楽器を鳴らすって、中州ですることとして素敵だと思ったから、楽器を持たない私は、少し離れた場所でサヨナラという歌を歌った。

太陽は重なるマンションの角で、真四角に欠けていく。

昨日会った先輩は、なんとなく高校生になり、打ち込むことも特になくなんとなく就職した。当時の空虚を今になって埋めようとして、ジョギングやジム通いを始めたのだという。

私もなんとなく高校生になり、死にものぐるいで勉強することもなく大学に入り、物書きに憧れたのに、何一つ学ぼうとしなかった。何一つ形にしようとしなかった。何もしなかった理由が、自分の限界を知るのが怖いという心からどうしようもないものだったことに、今でもふと苦しくなる。

あのとき一回知っちゃえばよかったのに。年とっちゃって知るのは余計惨めだし痛いし、痛いのわかってるから知ろうともしなくなってしまいそう。

本当は、何をしたって新しく枝を伸ばすことはできても、過去を埋めたり取り戻したりなんてできないって気付きながら走り続けるのは苦しい。できないのに、できないからこそ、いつまでたってもやめられないから。

いつか、ぽっかり空いた穴から吹き込む隙間風も、気にならなくなる日が来るだろうか。

ホルンの音が途切れ途切れに聞こえる中、マンションの侵食から逃れた太陽の落ちる方角に向き直った。目の前には細い雲がたなびいていて、温かい色の空が広がる。橋脚に背をもたれかけて、先輩と私が抱えて走る虚について思った。

太陽は川面を垂直にオレンジに染め、その延長線上に私の影をつくる。濃く長い影と一緒に、私はまた走り出す。

多分、隙間風を冷たく感じなくなるのは、何に熱中することもなく生きていた時間の中で出会った人や光景に、今の自分は強烈に影響を受けていることを実感してから

だ。そう思うとそういう機会は多かったから、もう少しで、過去の弱かった自分のことも許せる気がした。

彼が溢れさせた感情にも、きちんと向き合える気がした。

千代田線

夜明けの歌

ある部署へ研修に行って、夜間作業の見学をした。仮眠時間にさっぱり眠れず、二時間くらいの寝ぼけ頭にヘルメットをかぶせ、軍手をはめて、夜の駅へと車は走る。現場に着いて、午前一時を回る終電を見送ってから、もう朝まで押しつぶされることのないバラストの上を歩く。作業をちゃんと見ないといけないのに、ふと懐中電灯で照らしたレールは不安定に美しく曲がっていて、片足で乗っかってみた。計算された湾曲具合が、足に神経を集中させる。

椎名林檎のある曲中に「線路上に寝転んでみたりしないで大丈夫」という、過去にそうやって死んでしまった少女に宛てた歌詞がある。

こんなにひんやりしたバラストの上に寝転んで空を見上げ、死を待つ間はどんな気持ちなんだろう。私は死なないことがわかっているからこそ起こる寝転びたい衝動を抑えて、代わりに小さな声で歌った。

線路の上で、大丈夫だから死んだりしないで、と訴える必要のある人が周りにいない現実をありがたいことに思う。でも、もしいたなら、耳慣れない言葉だけど、私はいつでも味方だよって、相手が気恥ずかしくなるくらいの真面目さで言おうと決めた。

気付くと作業は終わっていた。ちょっと申し訳ない気分で引き上げるホーム上、駅名が並ぶプレートに落書きを見つけた。

「天王台　ふきん」

さっきの感傷なんかどこかへ飛んでしまって、私は、南国出身者らしくしっかりと整った顔をした年下の技術者に、台布巾について報告した。彼は端正な顔をあまり崩すことなく、夜明けに似合うようにくすくす笑う。

帰ったら、事務所にうどんが待っている。

「大分は、うどんのだしに干し椎茸使うんですよ」

彼は、おなか空いたな。と呟く私に教える。

「それ、すっごく美味しそう」

うどんの具を楽しみにする私は、夜明けの歌という曲が聴きたかった。

あと一時間で、始発が出る。誰かにつながる線路を走る。

エタニティー

「キスしていい？」
「そういうの、今更聞く？」
彼は、最近癖の照れ笑いを浮かべながら口づけた。

夜明け前、マンションの前で別れてから、随分長い時間が経った。忙しいというのは、こういうとき便利なのか、ただ何かを失い続けていることに気付けないだけなのかわからない。けど、帰り道や、コンビニのレジに並んでいる宙ぶらりんな瞬間、自分がこの空白を、失われているものなんてない、ただの多忙と名付けたがっていることに気付いていた。

小さな液晶画面で選ぶ彼のアドレスは、他人行儀で私をひるませる。意味の見つからない英字の羅列を選択してから眠るまでの間に、私たちは久しぶりに会う約束をした。

内線が鳴って三十分延長したカラオケボックスの中で、私たちは手をつなぎながら話をしていた。何が好きで、何が嫌いだとか、そういう話ばかりで、中学生のデートみたいだった。少しずつ、二人の間では大人をやめていこうとしていた。

やっと外に出ると、卒業シーズンらしく、和装用の派手なまとめ髪のままドレスに着替えた女の子たちが、楽しそうに謝恩会後の余韻を味わっていた。

美しい花が次々と消費されていく歌舞伎町を横切って、西新宿まで散歩をした。人気のないオフィス街を抜けて西新宿駅に着いた。駅にも人はまばらで、彼はずっと、私を背中から抱いていた。

帰って薄手のコートを脱ぐと、彼の香水の匂いが移っていた。彼にも逆のことが起きていたみたいで『ちょっともったいなくて、まだ風呂に入れない』とメールが来て笑った。今日の彼の香水はこの前のブルガリと同じくらいの定番だから、一瞬で覚えられる。

随分余っていたから、休暇を取って旅をしようと思った。遠出じゃなくて、東京の詳しく知らない街を歩こうと決めた。私は、今まで好きなものに忠実だったはずで、

時間がないとか疲れているとか、そういう言い訳をしない日を始めるのだ。私は、一生旅ができる人間になりたかった。

九品仏に、歩き疲れた両親と立ち寄った店があったのを思い出して、小さな駅の改札を出た。

両親は、たまに思いつきで私を連れ出すことがあった。去年の秋は、

「田園調布駅は街のランドマークだ」

と父が言って、駅舎を目的地に渋谷で待ち合わせた。田園調布なんか、名前からして当然田園都市線に決まっている。誰ひとり異論を唱えることもなく、路線図さえ見ずに電車に乗った。

乗り込んだ電車の行き先に田園調布はなく、乗り換えることもできなかった。駒沢公園で下車し、オリンピック公園から住宅街をさまよった。責められるべきは、間違いなく今も二十三区に住んでいる私だ。

「ベンツベンツＢＭＢＭ……アルファロメオ、ベンツＢＭジャガーＢＭワーゲン。ワーゲン乗ってる家が庶民派のめっちゃいい人に思ってしまう」

きょろきょろしながらそう言う父は、環八にぶつかる直前、ベンツの横に停められている国産車を見つけて喜んでいた。あれはベンツを買ってなおの余剰分だと思うけど、黙っておいた。

今日は環八に面したその店で、新しいヘッドホンを買った。アシダ音響というメーカーのもので、聴診器みたいな形が気に入った。

一階のダイニングで簡単に昼食をとろうと思ったけど、たいして食欲もなかった。ライムミントスカッシュと、パンプディングを頼んだ。ライムもミントも、入り過ぎだった。

一人だと、プリンなんかどんなにゆっくり食べても時間がかからないから、すぐに店を出て向かいの公園に行った。ぽかぽか公園と名付けられた空間には、世田谷に降り注ぐ日差しを短く切って挿し集めたような、明るい色味の枯れ芝が広がっていた。

子供たちがその上で遊んでいた。私は不審に思われないようにカメラをそっと構え、慣れたフィルムカメラで光と子供を切り取った。温かな日差しを当たり前のように受けとめて遊ぶ子供たちを見ていると、会いたい人が思い浮かんだ。メールを送ると、午後五時までなら抜けられるかもしれない。と返事がきた。

商店街を抜け、個人商店で野菜ジュースを買ってホームにたたずむ。人参の味しか

しないジュースをちびちび飲んでいると、菜緒のことを思い出した。家にいるかもわからないのに、何線も乗り継いで代々木公園駅に降りた。

同僚に聞いてからずっと行きたかったベーグル店は、どこにでもあるような商店街の中にあって、小さな列をつくっていた。菜緒の引越先はこのあたりだと聞いていた。私は列に並んで、いろいろなフレーバーのベーグルを見ながら、菜緒に電話をかけた。

「菜緒、近く来たんだけど会えない？　家どの辺り？」

「え、商店街のそば。今家汚いよ」

「あと一分でブルーベリーベーグル、焼き上がりでーす」

カウンターの奥から、高い声が聞こえた。レジの店員がそれを受けて言葉をつなぐ。

「あと一分だそうですが、いかがなさいますか？」

「えっと、そしたらプレーン一個をブルーベリーに替えてください。あ、菜緒？　わかんないから駅に来て。ベーグル買ったから」

「いいよ、ブルーベリーあるんだよね？　聞こえた。お金渡すからもう一個買って。公園側の出口ね」

店を出て、すでに湯気でしわしわになった紙袋に手を入れ、火傷しそうに熱いベーグルを割った。それを大きくちぎり、公園横に停められたワーゲンバスの前を横切りながら食べた。小麦の味が口の中に広がり、ずっしりと重い生地の反発を感じる。人一人をこんなに幸せにできるものをつくれるって、いいな。私は羨望もそこに押し込めて、やっとのことで袋を閉じた。

ワーゲンバスからは、深く煎った珈琲の匂いがした。幼稚園の制服を着た子供が母親に抱えられて、じっとバスの中を見ている。近付くと、それは浅草の川沿いでアイスを食べた移動カフェだった。

子供の視線の先に、デザインカプチーノを仕上げている店主を見つけた。私も今日はこれにしよう。さっきまで親子が覗き込んでいた窓際へ寄り、カプチーノを頼んだ。店主は、エスプレッソの抽出を始めた。

「今日見つけられると思わなかったから、夏にもらったアイスのスプーン、忘れちゃいました」

彼は、真剣にうさぎの輪郭をつくっていた顔を、思わずといった感じで持ち上げて

「また……来ていただけたんですね」

そう言って、丸くした目をくの字に細めて笑った。

「っとやばい、途中だった」

耳がちょっと短くなったうさぎのカプチーノをつくり直そうとする店主を止めて、

紙コップを受け取った。
「スプーンの話してくれたお客様、初めてだからサービスしますよ。試作品なんですけど」
彼は、ずっしりと重いパンを紙袋に入れて差し出した。その場で一口ちぎって食べると、生地はほのかにシナモンの味がして、ところどころにホワイトチョコチップと、食べたことのないローストナッツが混ぜ込まれていた。
「美味しい！　今買って来たベーグルよりも。すごいすごい！」
「よかった。これで来週から出せそうな気がする。うちのパンにしては結構甘いから心配で」
「お店の名前、何ていうんですか？」
彼は、深い色味の瞳を一瞬強く私に向けて、うつむいた。
「僕、転校ばっかりしてきたんですよ。どこにも居座ることがなくて、いつの間にかそれが自分の中で当たり前になってて。友達になったと思ってもすぐに離れてしまう。子供だから、あっという間に物理的な距離に負けちゃうんですよね。今みたいにメールとか、なかったから。あの頃僕と仲良くしてくれて、今でも覚えていてくれる人がもしいたら会いたいんだけど、なかなか手がかりもない。だから、僕は最後に辿り着

いた二度目の東京の中で、得意の流浪をやりながら、誰かとつながって、誰かをつなげられるような仕事がしたかった。そしたらそのつながりが、もしかしたら、普通の人の何分の一も残ってない、うすぼんやりした過去の僕の世界も手繰り寄せてくれるかもしれないって。その世界を共有した人に気付いてもらえる日も来るかもしれないって思ったんです」
「そうでしたか……私がその人知ってれば、すぐ教えてあげるのになぁ」
「このつながりが磁石になるかもって、期待しときます。初恋は東京なんです。というか、僕しゃべりすぎだ。しかも、店名答えてないんですよね。すみません。wanderinkって言います」
「ワンダリンク？」
「さすらって繋いで行くんです。リンクってほんとはrじゃなくてlなんだけど、僕の生き方そのまま。でもそういえば、店名聞いてくれたのもお客様が初めてですよ。僕も『パン屋さん』とかカブチーノの絵のせいか『うさぎ屋さん』とか呼ばれるのに慣れてるから、忘れかけてました」
彼は照れくさそうに笑う。
「いっそ『うさぎ屋さん』でもいいのかも」

「うん、こうしてたまに思い出すくらいでいいんだ。お客様には、僕の根無し草っぷりは関係ない。たまにふらっと現れる黄色いバスを覗いたら、一個くらいは好みのパンがあって、ちゃんと耳の長いうさぎを描いてもらえればそれでいいんだから」

「短いのも、かわいいですよ」

ありがとう。と笑った彼と別れ、ようやく菜緒との待ち合わせ場所に急いだ。

「いい大人が何買い食いしてんの。しっかり飲み物まで持ってるし」

待ち合わせ場所に着いても、まだもぐもぐ口を動かす私を笑ってから、菜緒は段ボール箱が一つも残っていない部屋に入れてくれた。

「だっておいしいんだもん。このナッツなんだろう。菜緒わかる？」

「うーん。食べてもわかんないなぁ」

菜緒も、せわしなく動きながら、ナッツの種類を当てる気がなくなってからもちょくちょく千切ってはもぐもぐして、いつの間にかベーグルより先に、そのパンがなくなった。

菜緒がココアをつくってくれる間に何通かメールをして、彼とは千駄木で待ち合わせることになった。ココアは、いい感じにぬるくて甘ったるい。

「菜緒、なんかできることない？」

「大丈夫だよ。あぁ、たまにこうやって世話させて」

「世話ってひどくない？」

「『お姉ちゃんいっつも座ってるだけじゃん！』って言いながら、めちゃくちゃ凝った料理とかしたい。スパイスの調合からつくり始めるカレーとか」

台所でまだ何やら作業中の菜緒の部屋にかかっている曲は、私のウォークマンにもたくさん入っている。スネオヘアーは菜緒に教えてもらったから当然だったけど、未だに二人とも、山下達郎を聴いているとは知らなかった。実家の車には、ビートルズと山下達郎と、ユーミンしか流れていなかったと言ってもいい。私たちはやっぱり姉妹だ。私は立ち上がり、目の当たらない台所へ歩いた。

「なお、」

「何？　もうちょっと待ってね」

私は言うことを聞かなかった。さっき買ったベーグルに生クリームを塗り終わって、スライスした苺を挟もうとしていた菜緒を無理やりこちらに向けて、8センチも背の高い彼女を抱きしめた。

「ねぇ、家族は、菜緒の味方なんだよ」

「……なんで先にお姉ちゃんが泣くの。そんなこと、知ってるよ」
菜緒は、私が離れようとしないから、手に持っていた苺をまな板の上に置いた。
「吹っ切れてるつもりなんだよ。だけど、突然真っ白な時間ができちゃったら連絡とったりしちゃいそうな自分がまだいて、怖くて……」
言い終わると菜緒は、離れた糸を無理矢理手繰ったりしないためにつくったベーグルサンドを私の前に出して、
「お姉ちゃんそこまでクリーム好きじゃないの知ってるけど、今日は誕生日ケーキの気分で。来週からちゃんと会社行くから」
と笑った。私も、菜緒と同じように微笑んで、ん？
「あれ、今日平日だっけ？」
「はい？　金曜だよ」
「なんで家いるの！」
「お姉ちゃんこそなんでこんなとこいるの！」
「私は休暇だよ」
「私も休暇だよ」
先に笑いだしたのは、菜緒だった。私たちは、泣いたり笑ったり、せわしない。

乗り込んだ電車は、永遠に着かないかと思うくらい長い時間をかけて千駄木に滑り込んだ。今日は一人で歩き回るはずだったのに、そろそろ一人の時間の方が少なくなりそうだった。
ついさっきまで、今日は平日だと言うことも忘れていたから、
『こんなに晴れた日に散歩しないなんて嘘だよ』
とかなんとか言って取り付けた約束だった。私は、快晴の休日に部屋で音楽だけかけてごろごろする快楽もよく知っているのに、我ながらとってつけたような理由だなぁとちょっと笑った後に菜緒と話して、ようやく今日が金曜日だということを思い出したのだった。
とにかく顔が見たかった。そう言ってもいいかもしれない。かもじゃなくて、そうなのだ。
彼はスーツ姿で券売機の前に立っていた。私は軽く手を振って、並んで歩き出す。もう引き上げてもらう段差も人ごみも、酔っぱらったふりもいらない。手をつないで階段を上る。
「ごめんね。今日平日だってしばらく気付かなかった。仕事平気？」

「五時まで外出にしてきた。あんまりやってると怪しまれるけど、今までそうやって出たことないから大丈夫なはず」

「そっか、ありがと。一緒に食べようと思ってベーグル買ってきたんだけどね、焼きたでおいしそうで妹と半分ずつして食べちゃった。妹がサンドつくってくれたから、よかったら食べてみて」

「ありがと。湯気ですごいことになってるね、袋」

枠しか残されていないブランコや、使用禁止と札の貼られた奇妙な遊具を見ながら、谷中銀座へ向かうゆるやかな坂道を上る。車が窮屈そうに通る路地の途中に、世田谷の公園と同じように枯れ芝が覆う公園を見つけた。私たちは守備がたった一人の草野球を見ながら、公園の小さな丘の上に登って腰を下ろした。

そこには、都会の子供たちの平和があった。さっきよけてきた三人草野球はみんな下手だった。自転車で延々コースを周回している子も、補助輪の音を響かせて走る子も、補助輪を外して転んでふてくされている子も、それぞれの存在に無関心な感じで遊んでいた。

丘には、ホルンを吹く青年がいた。青年の周りを半分くらいの背丈の子供たちが数人で取り囲み、楽器について質問したり、知っている曲が鳴らされると喜んだり、庭

きでどこかへ走って行ったりした。

私たちは、柔らかな光が降り注ぐ音楽の場面を見つめながら、少し前に行ったカラオケと同じように手をつないで座っていた。甘いベーグルサンドを交互につまみながら、どこまでもそれるボールを追いかけて、芝と泥だらけで転がる野球少年たちを見て、平和だねぇとどちらともなく呟いた。

なかなか立ち上がることができなかった。谷中銀座なんてどうでも良くなっていた。

「高山ほどじゃないけど、観光地化してるよね」

「新井薬師とか中野はいいよ。ちゃんと生活できるから」

一言交わしただけで、彼も別に興味がないことがわかったから、私たちは西日暮里まで最短距離で歩いた。

「まだ少し時間があるから」

そう言う彼が前から気になっていたという喫茶店に入ることにした。

階段の踊り場で突然彼は立ち止まり、私の肩に頭を乗せてぐったりと力を抜いた。

「逢いたかった」

耳許で欲望をかきたてるように呟くのとは全然違う。意図も、わかりやすいテク

ニックも何もない。頭の後ろから染み込むそんな声に、私の力もふっと抜けて、しなる体を元に戻すのが酷く億劫に思えた。ドアの上に付けられたベルがチリンと鳴って、誰かが降りてくる。私たちはゆっくり体を離して、交代するようにドアをくぐった。

アイスカフェラテのような、複雑な名前の飲み物を頼んだ。

「それ、甘く切ない味って書いてあるよ。メニューの説明書きに」

「あ、底の方、今甘い。上の方、せつない」

彼は、エスプレッソとミルクの美しい分離を崩さないようにストローを使う私を見て、笑った。

「それで、さっき言ってた、私のこと好きになったきっかけの言葉って何？」

「いきなり聞く？」

「上の方飲んで、せつなくて聞きたくなった」

「いいけど……たいしたことじゃないよ」

「私はいつ、なんて言ったんだろう」

「……そうだな。二、三回目に会ったときかな、青山のカフェでごはん食べてるときプライベートの悩みとか話してくれたでしょ。その途中に『でも私は頭がいいから大丈夫』って言ったんだよ」

「……それで好きになる？」

「うん。俺も、自分は頭がいいって思ってたんだけど、あっさり口に出した人初めて見たから」

「ほぼ初対面でよくそんなこと言ったな……ただのムカつく女だよね、普通。いやそれにしてもそこなんだ」

「ね」

「どこで好かれるかってわかんないもんだね」

甘く切ないラテの、最も甘い側のクリームをほんのちょっと口にしていると、俺は？と聞かれた。

「そうそう。千代田線長いから手帳に書き出してみたの」

「そんなことしてたの……変な人」

「お互い様。えっとね、確実に好きだと思ったのは『自分が幸せにできる他人って、一人しかいないんだってことに気付いた』って言葉だったかな」

「俺、言ったねそんなこと。確かあの日は酒も飲んでないのに」

帰社予定の十分前に、ホームの一番端に着いた。トンネルの先を見ている彼の背中

に顔を埋める。振り向こうとする彼の胸の前に腕を回し、締め付けた。
「あのさ、頼むからそんなことしないでよ。この世のすべてが面倒になる……特に、あと一分もしないうちに電車に乗ろうとして、ホームを二歩歩くこと」
彼は少し視線を落とした姿勢を変えず、本当にだらだらと私の腕を一本ずつ身体から外して向き直り、最小限の動きで口づけた。私の背後から起こる列車風が、髪をかき上げて、首元を吹き抜ける。彼は、カフェの階段で私がそうだったように、なかなか姿勢を戻そうとしなかった。触れたまま、時間と風が過ぎていく。気持ちが静かに流れ込む。怠惰な愛情が、私の中に。

サイレント

自分のヒール音しかしなかった。都心ど真ん中の駅なのに、休日はこんなにも人の気配がない。少し先の人工河川は西日にキラキラと黒く光り、首都高は頭上で音を立てている。そこに待っているはずの人は、私がたった今上がってきた出口から現れた。普段見向きもしない、ちょっといいお弁当を買おうということになり、辿り着いた大丸はそれなりに混んでいた。揚げ物が一つもないあっさりした、ただとても色鮮やかなお弁当を二つ買い、いつものエレベーターに乗った。
暗いオフィスのドアに差し込まれ、ガチャリと音を立てて回る鍵を見ていると、突然わくわくしてきた。秘密基地を教えてもらって、今日から世界でも類のない大きさの秘密を共有できたと信じている、子供の頃の喜びそのものだった。
達大とは同じ会社なのだけど、フロアが違うと見えるものも全然違って不思議な感じがする。ぼーっと達大のデスクに座っていると、真っ暗な会議室から
「あ、菜緒、始まってるよ」
と声がした。

「早く言ってよ！」

ごめんごめんと笑う達大の声を聞きながらお弁当とジャワティを持って会議室に入ると、高層ビルの左側に真っ赤な花火が上がっていた。会議室に並ぶ椅子に座り、偏光ガラス越しの花火を見つめた。いただきます、と大げさに手を合わせて食べ始めた〝こむすび〟はだしで炊かれていて、じんわりと染みる。

私たちは窓枠で仕切られた大きなスクリーンで、無声映画を見ているようだった。空がパーッと明るくなった。真下で見ていたら、瓦礫がガラスに降り落ちたみたいな音がしているかな。と私は思う。その音をそれぞれ好き勝手に思い描いて、火事場の上空のように明るい空を見ていた。煙が、無風の夏空に白く残って動かない。達大が色のない空を見ながら呟いた。

「花火がせつないっていうのがわかんないんだよな」

「ふーん、私なんか毎回思う。せつないって、終わっちゃうことが怖い、終わってほしくないってそこにいる全員が思ってるそのときに、浮いてきて行き場のない気持ちじゃないの」

「そっか……俺、あんまり怖かった経験ないだけだ。最近思うんだけど、それって多分つまんないことなんだろうな」

私たちは話すのをやめて、花が開いた後に色がふわふわと遊び回る花火をぼんやり見ていた。

「あ、ケーキ買ってきたんだ。取ってくる」

沈黙が縮めていく距離感に戸惑って、さっき冷蔵庫に入れたケーキを取りに行った。一口もらえればいいやと思って一つしか買わなかった。

達大は、机の中からコンビニでもらうプラスチックフォークを出してきて、小さなケーキに差し入れた。私に食べるように促す彼を制して、食べてもらう。

「旨い」

その一言でたっぷり満足して、ケーキのことなんかすっかり忘れて窓の外をずっと見ていた。

「食べな」

左から声がして、薄暗い中からケーキの乗ったフォークが口許に近づいてきた。ピスタチオムースの甘さがだらりと広がり、サクサクとした何かが舌に触れる。こんな味だっけ。暗いからいっぺんに食べちゃった。

「うん、美味しい」

一人に聞こえるだけの声でぽつりと言った。
「旨いよな」
彼は肯定し、ほんの一瞬間を置いて、
「今日、ありがとう」
と、同じくらいのトーンで言った。

花火が終わる時間を知らないまでも、矢継ぎ早に打ち上げられる花火で空が騒がしくなってきたから、もうすぐだということはわかった。ガラス越しの花火がこんなにもキラキラと眩しいことを、初めて知った。
「菜緒、今俺わかったかも。花火のせつない、が」
「うん、今せつないね。この光が消えたら、終わってしまうんだね」
「うん、終わってほしくない。こんなに祈ってる俺らも、あの真下にいる観客九〇万人って動員数にカウントしてほしいよな」
でも、私たちの祈りは、ビルを間に挟みすぎて届かなかったようだった。
「まだだって、あと一回はある」
窓にむかって声をかける彼の眼の先で、パッと看板の灯りが点いた。会場付近の企業が、花火の光だけを際立ったものにするために、電飾を消していたらしい。粋な配慮に温かな気持ちになりながらも、それはもう、花火が上がらない証明でもあった。
「ダメか……」
まだ窓を見ながら呟く彼と私はしばらく動けずに、パイプ椅子に座っていた。おもむろに立ち上がり、窓に顔を近づけて、そばのビルにはどんな企業が入っているのかについて話した。その会話に意味はなかった。二人ともそれぞれに気だるさを抱えていて、できる話は限られていた。

もう一回、見たかったね。最初から見ない方が淋しくもないし、出遇わない方が、つらいこともないかもしれないけど、このせつないって気持ちは、大切なものをちゃんと刊るために必要なものだから。

ふと黙り込む時間にそんなことを言いそうになったけど、それもちょっと重たい気がした。次に言うことを探していたから、高級ホテルの窓から漏れる温かな明かりを見ながら、適切だったかどうかもわからない相槌を打った。

別の小さな部屋からは、首都高と線路が交差しているのが見えた。美しかった。こんな立体を一からつくり上げる人がいて、その上に何かを走らせる人がいる。その何かに乗って、もう誰も起きていない家に帰ったり、喧嘩した彼女の家まで車を飛ばしたり、締切を過ぎた原稿を運んだりして、いろんな人が線上を動いている。

もう一つの会議室からは、何本も並ぶ線路と行き交う電車と、青白く光りながらホームへ吸い込まれていく新幹線が見えた。

窓辺の通風孔から、風は出ない。じっとりとした空気を、彼の団扇がかすかに動かす。窓辺に座り、この先乗ることがなくなるはずの見慣れた電車が、真っ直ぐ北に向かうのをぼんやり眺めた。あの電車もこの電車も、この部屋の空気みたいに静かに止まってしまえばいい。そう思っていたら、少し離れたところから声がした。

「俺さ、この部屋でぼーっと外見てると、あぁ俺なんて別にいなくてもいいや。って思うのね」

「その言葉、そのまま意味で聞くと、いつもの熱さに似合わない暗さだよ。でも違うんだね」

「うん。いなくても、こんなに世界は上手く回ってる。ほんとに平和に見える。だから、そんなに無理して頑張らなくてもいいんじゃないって気がするんだよなぁ。誰もいなくなった残業中、ここ来ると楽になれる」

力を抜いた生き方をすとんと落ちるように納得させてくれたのは、二人目だった。そういう場所が彼の近くにあって、彼が誰にも教わらずにそれを見つけることができて、よかった。

その場所を、私にも見せてくれてありがとう。そう言おうとしたら、頭に違大の大きな手のひらが置かれた。

「スプレーしてるから、固いでしょ」

「うん。菜緒、黒髪ストレートもかなりよかったけど、意外とパーマも似合うよ」

「なんだ。かなり、なら変えなきゃよかったな。そうだ、報告遅れちゃったけど、引っ越したよ。代々木公園駅徒歩七分」

「そっか、よかったな」

「うん、商店街に美味しいパン屋さんがあって、静かだし、ちょっと高かったけど決めちゃった。代々木公園も近いよ。そんな広くないけど、2課の子たち連れて遊びにおいでよ」

「そうだな。近いうち行くよ。引越祝い何がいい？」

「ソファ！　置いてきちゃったから」

「そんな高いものを同期の俺に買わせますか、あなたは」
「これもワガママの一種か。しかも実害有り」
私のくすくす笑いが響くこの空間にもう忍び込むことがないとしても、私はこっそり心の中に、この部屋へつながる通路をつくっておこうと思った。地下で起きたことも、ここからは見えない。
時計なんかなければきっと、この下を走る電車が車庫に入ってしまう時間が来ても、この場所でひそひそ話をしていたとお互いわかりながら帰り支度をすることになったから、支度を終えて窓辺に座る達大と逆を向いて座って、ちょっとだけ背中で触れあった。
世界は、私たちを巻き込むことなく、こんなにも上手く回っている。だから、今日くらいどこにも行かず、秘密基地に隠れていたい気がした。

夜来香

ワガママを叶えてくれる人は私を愛していて、叶えてくれないのは愛情が薄いから。たとえばこうやってボードに書いて、その辺歩いている女性に見せて聞けば「そうは思わない」に八割を超える票が入るだろう。
でも、現実は違うのだ。俺は「会いたいから今すぐ来て」と夜中に電話してくる女を何人も知っているし（現に昨日の彼女がそうだった）、明日の会議のことを考えつつもしぶしぶ行けば「大好き」と言われ、今日は行けないと言えば「私のこと好きじゃないんだ」と言われる（現に昨日の……）。もう、そういう試されているようなのは、嫌になったのだ。
「若い子は、それが愛情の指標だと思っても仕方ないよ。実際、歳とればとるほどワガママ通る場面なんかないし、彼氏だけでしょ。思い通りにしても世の中に許されるのって。恋人なら仕方ないよね。みたいな感じで」
「菜緒はどうだったんだよ。やっぱりわがまま言ったわけ？」

「そりゃ言ったよ。しかも、私も相手のわがまま聞くの大好きだった。京王線の終電が何分とか、当時はちゃんとわかってたし。お互いのために無理できるのが愛情だって思ってた頃は、結構ボロボロ」

「意外だな。今は？」

「会えない理由説明されて『納得してよ』って諭されるのは好きじゃないけどね。呼び出してしぶしぶ来てもらっても、どっちもつまんない思いするし。それより達大、そのカフスお洒落だね。ノットは上品だよね」

「エリザベスなんちゃらだったかな。前、真奈未と行ったレストランの総支配人がしてて、同じの探しちゃった」

「マナミさんって、彼女？」

「うぅん。姉貴」

同期の菜緒は、どんなにメンツが良くても二次会には絶対に来ない。理由を前に聞いたら、素面の女がいるだけで失われる会話があると思っていて、その芽を自分の存在が摘むことになるのは嫌だからと言っていた。菜緒がいるから生まれる話もあるんじゃないの？と思ったけど、あの日も論破されかかったから黙って誘うことにした。

今日の同期飲みでもポリシーを曲げず、店の前からすっと路地に入っていこうとする菜緒を追いかけた。すでにイヤホンをして歩く彼女の肩を叩く。

「どうしたの？」

外したイヤホンから単調なリズムが漏れてくる。ビルの二階にあるスターバックスを指す俺の指先を見て、菜緒は、いいよ、と笑った。店に入ると、迷わずゼンという名の緑茶を頼んでいた。スタバにそんなメニューがあることを、俺は今まで知らなかった。

「話それかかったけど、お前はできたやつだなぁ」

「でも、彼女のこと好きなら、しばらくワガママ聞いてあげたよ。年下って、いくつ下なの？　は、六つ？　達大ロリコンだっけ。うーん、そんな子に『明日は大事な会議があるから今日は行ってやれないけど、それはお前のことが嫌いだからじゃない』とか説明するのだるいでしょ」

「まぁね。まず一応ロリコンでもマザコンでもないよって否定しときたいんだけど、興味なさそうだからまぁいいや。菜緒はワガママ聞いてあげるの、今でも好きなの？」

「基本的には。ほしがられてる私、好きだから。あとはそうだな、自分が会いたいっ

て思える人だったら、結構先のことは考えないで動いちゃう」
「……あのさ、俺と、この後ちょっと、散歩しませんか」
「なぜ敬語！　いいよ。今日の飲み、仕事の愚痴ばっかでつまんなかったし」
「俺、ワガママ言ってる？」
「私もしたいから平気だよ。ほしがってくれてるんでしょ？　今の私との時間」
俺は、昨日喧嘩した自分の彼女の前で、ずっと兄貴役やってたみたいで、菜緒と話していると、どんどん力が抜けていくのがわかった。
「菜緒さ、弟とかいない？」
「いないよ。お姉ちゃんだけ。前に恵比寿で会ったの覚えてるかな。ふわふわパーマの小柄な」
「あー覚えてるよ。明るい感じの人な。そっか、いると思ったんだよな、なんとなく。ちなみに、俺も姉貴だけ。結構息子も大きくなって、生意気になってきたんだよ」
「へー、そうなんだ。達大って子供になつかれそう。でもさ、一人っ子とか、兄弟いるとかがその人の性質に関係するって、ほんとかな？」
菜緒は口角を綺麗に上げて笑った。彼女は、育った環境とか普通は大きなはずの要素を無視できる強さを、ある時期にすっかり身につけてしまったんだと思った。俺とは全然違うんだ。

皇居の周りでは、朝のニュースで流行が伝えられても三ヶ月は経つのに、カラフルなウェアを着た男女がぐるぐるとジョギングをしていた。俺と菜緒は特に話もせずに、タクシーの行き交う大通りを歩いた。国道1号沿いの、とても新鮮とは言えない空気を腹いっぱいに吸い込んで、ふーっと吐き出す。菜緒は、派手にライティングされた外資系ホテルの外壁を眩しそうに見ながら、ゆったりした調子で歩く。
「こないだなんてさ、姉貴が秦介、って姉貴の息子ね、夜に突然実家に連れてきて『なんでもいいから、この子の誕生日祝ってくれない？』って言うんだよ。最近の子供って何に喜ぶんだろうな。ウルトラマンごっことか、今でも正解だった気がしないんだけどさ」
「なんとかレンジャー系って今何なんだろね。ポケモンってまだやってんの？」
「うーん、多分」
「ゲームは？」
「ある！　そうだよ、ＰＳ３あるのになんで俺ウルトラマンに走っちゃったんだろ」
「でかいお兄ちゃんといきなりウルトラマンごっこさせられたそーすけに同情！」

菜緒は、真っ暗な皇居に背を向けて笑い、パンツスーツを着たOL風の女性とすれ違った瞬間、真っ直ぐ前を向いた。彼女の様子がおかしいことに、数歩進む間全く気付けなかった。菜緒は、声を上げず、表情を失ってはらはら泣いていた。

「離婚したんだ」

そう報告を受けたのは数寄屋橋の不二家レストランでだった。元旦那がどんな奴かはよく知らない。一回り以上、ずいぶん年上だったということと、

「一目見ただけで、自分と同じ孤独を知っているのがわかった」

という、俺にはいささか後ろ向きに思える理由で籍だけ入れたのは、菜緒が十九歳のときだったらしい。

孤独を共有できる存在がいなくなってからのふとした瞬間の目の伏せ方や、何を見ているのかわからないぼんやりとした視線が、ずっと痛々しかった。歩道の真ん中で、またいつの間にか一歩先を歩く菜緒の腕をとり、そのまま引き寄せた。

「なになに、どしたの？　酔っぱらっちゃった？」

俺の肩に菜緒の声がこもる。

「なんで、突然泣いてるの」

「あれ、私のこうす……なんでもない」

「香水？」

「……」

「急に泣く人がなんでもない訳ないよな。あのさ、吐き出す場所がないなら私でいいよとか俺に言う前に、自分のワガママちゃんと聞いてもらってる？　誰でもいいけど」

「……だって、これ以上、誰にも嫌われたくない」

「嫌いにならない」

「彼女……」

「話逸らすな」

「……さっきね、すごい大人ぶったこと言っちゃったけど、私、達大の彼女よりずっと激しく、最後まで彼のこと試しちゃった。疲れさせたって気付いたときには出て行っちゃってた。淋しい者同士、寄り添ってるだけでよかったのに。会社でも人間関係上手くつくれなくて、あまりに淋しくて頼りすぎて、私のために動いてくれる人が他には一人もいなくていい、あの人一人がそうであってほしいって思っちゃった」

「あのさ、もうちょっと周り見てみ。菜緒のために動ける人って、今この十時何分だ……二十三分現在でも五人はいる気がするよ、俺には。携帯の電話帳見て片っ端から

集合かけてみない？　今ここで」
「何それ。しょうもないこといちいち真面目な顔で言わないでよ」
菜緒は一瞬笑顔に戻ったけど、きちんとワガママが言えていた子供の頃みたいに、肩を揺らして泣いた。人もほとんど通らない皇居の脇に、二人で黙って立っていた。
「少なくとも、俺は動けるよ」
「六つも下の子に振り回される男に、それは無理」
「そんな生意気な奴は嫌われる、かもしれないけど俺は結構好きだよ」
肩の上下がぴたっとやんだ。
「俺は、菜緒みたいなつらい思いしたことないし、希望が叶わなかったことも、苦しんだこともほとんどない。今も実家でなんだかんだ楽しみながら会社員やってる。だから、わかってあげられないことも多いかもしれない。菜緒からしたら、中身ない人間かもしれない。けど、その分、スペースだけは余ってるから」
菜緒は、一気に伝えきった俺の胸を両手で押して、涙の筋が残る笑顔をつくり直してから、何事もなかったようにまた歩き出す。閉ざされた地下鉄の出入口を通り過ぎ、東京タワーに近付くように黙って歩いた。
「私のこと、嫌いにならないで」

身体が離れる前に、菜緒は確かにそう言った。頷く俺の胸に吸い込まれた小さな声を、多分もう、忘れられないんだと思う。
電車に乗るまで手をつないでほしいと言ったのは、今日初めての菜緒のワガママ。なんとなくそれにしただけの、ピーチティーを自販機で買って渡すと、
「ありがとう。これ好きなんだ。私のパリの味」
と笑う。
「何、パリの味って」
「パリにいた間の貧しい食生活の中で、これが一番美味しかったの。毎日地下鉄の駅で買って帰って、ホテルで飲んでた。暑い時期だったから、甘すぎるくらいのが美味しくて」
「ペットボトルの紅茶が一番なの？　パリって、もっと旨いものあるだろ」
「そのはずだったんだけど……また今度話すよ。今日、ごめんね」
一度離した手をもう一度つないで、電車が来るまでそうしていた。

モノローグ

ビルの前で、今日限りの仲間たちが「おつかれっしたー」と気のない挨拶を交わして、それぞれ一人で家路に着く。

僕は、毎日持ち歩いているCrossのボールペンを置き忘れたことに気付いて、ビルの管理人が常駐する部屋に向かった。

「あぁ、今日はまだ開いてますよ。そのままどうぞ。あ、名前だけ書いてって」

「どうも。誰かまだいるんですか？」

「いるよ、一人だけね。僕はファンだから、何時間でもいいよって言ってあるんだ」

彼の言葉の意味が僕にはよくわからなかった。ただ、すでにテレビに向き直った彼に聞き返すのも無粋だと思ったから、曖昧に笑って地下のステージ横に走った。

クリームがかった白色のボールペンは、事務所のロッカーに置きっぱなしだった。ごめんな、と女々しくもペンに話しかけ、メッセンジャーバッグのポケットにしまう。

ほっとして、事務所のパイプ椅子に座りこむ。がらんとした小部屋を見渡していると、管理人の言葉が少し気になって、帰りがけにカフェの入口で立ち止まった。ライブのできるレストランカフェは真っ暗にライトダウンされ、フットライトでうっすら浮かび上がるステージには、さっきまでライブで使われていた大型楽器が残されていた。そうだ、明日も同じアーティストが使うんだった。僕は、急用で行けなくなった友達の代打だから、明日は来ないんだけど。

すると、パチッとスイッチを入れる音がした。ステージにだけ灯りがついて、黒いワンピースに細身のジーンズを履いた女性が入ってきた。覗き込んでいた僕には気付かなかったようだった。

蓋を開けたグランドピアノの前に彼女は立ち、鍵盤をそっと指で押した。澄んだソの音が消えるか消えないかの間に彼女は椅子に座り、何の前触れもなく弾き始めた。

僕の中では、女性のピアニストって長い髪を揺らして激しく鍵盤を叩いているイメージだった。だけど、彼女の髪は顎までしかなくて、小さな頭に沿わせるように整えられていた。鋭い音が、誰もいないホールに響く。熱気がまだ抜けきっていないステージの上で、伴奏ではない何かの曲が鳴らされていた。

だんだんと彼女の体は揺れ始め、自分とピアノだけの世界ができ上がる。僕はただの日雇いの代わりで、さっき歌っていたアーティストに興味があった訳でもないから、その後にこうしてピアノを鳴らす彼女の存在なんて予期できるはずがなかった。

僕は入口から一番近い席にそろっと座り、彼女を見ていた。ただ、横顔を見つめすぎて彼女が演奏をやめたりしないように、そっと視線を外した。ピアノってあんなに大きかったっけ。実家にある妹が弾いてたやつは、アップライトだったもんな。

ジャンルとしてはジャズなんだろうか。彼女の指は、譜面があってもなくても関係ないみたいに自由に動き回っていた。

演奏は突然終わった。ように僕は思った。彼女は息を整えて、ゆっくりと鍵盤から指を離した。僕は、かすかなライトの下で浮かび上がる彼女の白く細長い手指に魅せられた。彼女は、ゆっくりと時間をかけて客席に向き、僕の目をしっかりと見据えて、

「どうでした？」

と言った。

僕は、こうなるかもしれないときちんと予期できていたのに、あまりに真剣な目付きに何も言葉が出なかった。ただ大袈裟に空気を含ませて、胸の前で手を叩くことしかできなかった。

「ありがとう」

彼女は続けて、急にごめんね。と笑った。

「僕は……その曲が何て名前かも知らないんだけど、終わり方がかっこよかったよ。

潔くて。途中で弾くのやめた訳じゃないんでしょ？」

「ちゃんと最後まで弾いたよ。曲名はストロボ。あの最後は、ストロボが光った瞬間、のつもり」

この人にとって曲づくりは、詩を書くのと同じなのだと思った。僕が彼女について知っていることは容姿と声だけ、それもたった今知ったばかりのはずなのに、それは理解できた。

「ごめん、やっぱり知らなかった。でも、すごいね。自分で曲書いて弾けるんだ！僕、昔作曲家になりたくて、だけど全然ダメだったんだよ」

「今は、何やってるの？」

「車掌の見習い」

「電車動かしてるんだ。すごいね」

「別に、何もすごいことないよ」

語気が思ったよりずっと強くて、彼女の笑顔がさっと消えた。どうしたら元に戻せるかと感っていたら、彼女はもう一度微笑みを浮かべ、鍵盤を撫でながら言った。

「すごいよ。私をここまで乗っけてきてくれたこと、あるかも」

哉も、わからなかった。僕より年下のように見えたから、初対面なのにうっかり敬

語を使わなかった。でも、ふとした一瞬見え隠れする影のある笑顔は、随分大人っぽくも見えた。細身なジーンズの似合い方も、ジーンズとパンプスの間に覗く素肌にチラチラ光っているチェーンなんかも、完全に大人だった。

「なんで、ここにいるの？」

「管理人さんに甘えてね」

「練習？」

「そう。家にピアノないから。ピアノ使うライブの予定日を、あのおじいちゃん、教えてくれるんだよね。その度に近所でペコちゃん焼き買って差し入れて、夜中使わせてもらうの。いつもはサークルが借りてるとこで練習してるんだけど、誰もいなくても、ステージって気分いいじゃない」

「そっか」

僕は呟いて、彼女のことをなんでもいいから知りたくて仕方なくなった。あっさりした化粧の下に隠されている彼女を全然知らない今がもどかしくて、でも質問も思いつかなかった。下を向いて黙っていると、遠いステージから声がした。

「もう一曲、聴いてもらえませんか？　ここに人が来ることなんか初めてだからドキドキしてるけど、一曲だけ」

「どの席で聴けばいい？」

「さっきの席がいいな。近いと、ライト明るいから恥ずかしいし」

僕は言われた通りの席に座ろうとして、急に嫌になった。

「目の前じゃ、迷惑かな？」

「うーん……終わるまで、目、閉じてくれたらいいよ」

「わかった」

ステージの目の前の席に落ち着いて、目を閉じた。演奏は、僕が瞼を下ろしたのを確かめるような間をおいて始まった。これもきっと彼女がつくったものだろうと思う。スローなバラードだった。真っ暗闇で聴くその曲は、ゆるやかに頭の中を流れていく。

誰かに肩を叩かれるまで、僕は一度も目を開けなかった。彼女の顔がすぐ目の前にあった。

「寝てたでしょ？」

「寝てないよ」

「ふーん、まぁいいや」

「これはなんて曲なの？」

「寝てた人には教えない」
からかうような笑みを浮かべた彼女は、人差し指を一本立てて口許に運び、僕を見下ろしながらステージに舞い戻る。僕は、その仕草を一目見ただけで、彼女のことが好きになった。左手の小指にはめられた、糸のように細いリングが光る。
「寝てないから、名前教えてください。お願いします」
「え、そんな真面目に言わなくても教えるよ。いや、ほんとは決めてなかっただけなんだけど。……車窓……かな。あなたもいつも見てるんでしょ？」
「僕は……地下鉄のだからさ、ずっとトンネルだよ。合間に駅のホームだけ」
「そっか……じゃあ、トワイライト。そんな電車あったよね……また地下鉄じゃないけど、響きがなんかいい」
「そうだね。いや、そうじゃなくて、名前、教えてほしい、あなたの」
「私の？　えっと、それもそんな真剣に言わなくてもいいよ、大したことないから」
僕にとっては、すごく大したことだった。彼女は自分の名前を、人に好物を教えるみたいにうれしそうに口にした。
管理人にライブスケジュールを確認して、鍵を返した。
「いつも、これありがとねー」

湯のみの横で既にいくつか食べられて歯抜けになっているペコちゃん焼きの箱を指さし、帽子から白髪が覗く管理人は笑った。
「私、今日こっちだから」
彼女は、銀座線ホームへつながるエスカレーターをスタスタと上っていく。ブルーグレーのハットが、浅い髪の色によく似合う。あっという間に視界から消えた彼女の後ろ姿を、もう一度思い出したい。
僕は、みう、と彼女の名前を口の中で転がすように呟いてみた。頬がゆるまないように気をつけながら、半蔵門線のホームに向かう。
「トワイライト、また聴かせてよ。途中で寝ちゃったからさ」
駅の階段を下りる間に結局白状したら、
「仕方ないな、いいよ」
と肯定されたからだ。来週また会える。

パークライフ

商店街を歩いて行くと、お気に入りのパン屋がある。パン屋と言っても、基本的にベーグルしか置いていない。ニューヨークで本場のベーグルを食べてみたいなぁと思いながらも、小麦中毒のお姉ちゃんによると、ここのはパン界（？）では超有名な女性がつくっているらしいし、とりあえずいっか、と思う。

ベーグルに乗っかるオレオをがりっと噛みながら、余分な物は一つもない部屋を見渡す。顔洗って、そろそろ支度しなきゃ。

達大がうちを訪ねてきたのは、この前の同期飲み（と言っても同期は二百人以上いて、各地に飛んでいるから東京組だけで）の帰り道、住所を教えてきっちり十日後だった。

その日は土曜日で、私は木曜日から二日間体調不良という理由で会社を休んでいた。本当はどこが悪いとかも言えなくて、ただもやもやした感じを抱えたまま、お姉ちゃ

んが突然訪ねてきた金曜の一時間以外、何の記憶もないほどぼんやり過ごしていた。

朝も何もする気が起きなかったから、シリアルに牛乳をかけてしゃくしゃく食べた。でも結局シリアルだけじゃ物足りなくて、ビスケット片手にチャットをした。東京高層化について○○ヒルズをたくさんつくった会社の友達と不毛な議論をしていたら、チャイムが鳴った。

部屋着のまま、ドアスコープを覗き込むと、達大だった。彼の家はどこだっけ、数字がつくとこ。二子玉？　三茶？　彼は確か、結構なおぼっちゃんなんだった。

私は今日、自分を上手く説明できないとわかっていたから、部屋着のままドアを開けて、靴を三つ脱ぎ捨てればいっぱいになる小さな玄関で複雑に笑う。

「昨日5課に書類持って行ったらいなかったからさ。ちょっと気になって」

休んでいたことに説明は求められなかった。弁解もさせられなかった。部屋には何か音楽が流れていたはずだけど、私は一人、静寂の中にいた。多分、表情も一度も変わらなかった。口も動かない。

そのとき、彼はスーパーの袋をドサッと床に置いた。その音とほとんど同時に、感情がただ音に代わっただけの言葉を二つ聞いた。達大の腕が背中まで回っている。きっと今までもそんな風にして言葉をくれた人たちがたくさんいて、その度に充た

されていたけど、それを深く吸収する素地が、やっとできたのだと思う。自由気ままに生きているふりをして、私は凝り固まっていた。そんな自分に穴を開けたり溶かしたりしているのは、本当に最近のことだ。

とりあえずいてくれればいい、お前には笑っていてほしい。

そんなことを寸分の狂いなく思ってくれるのは、私にとって家族だけだったのに。

家族だけ、その過去が悲しかったのではもちろんなく、家族だった人が一人、私の前から去ってしまった悲しさがまた迫ってきたのでもなく、頭の天辺からしみてくる何かがあった。

「ごめんなさい」

やっと開いた口から言葉がこぼれ、言葉に間に合わなかった気持ちが、丸い涙になって胸元に落ちる。

「こんなに泣いちゃう子だって思ってなかったなぁ。美人さん台無しだよ。笑ってみ？」

「笑えって言われて笑えないよ」

「いつもの強気業绪もちゃんといるじゃん。笑っとけよ。前話してたベーグルとか、スーパーで適当に食えそうな物買ってきてやった。見た？」

「あ、シナレがある！」

「シナレ？　何それ、あぁ、レーズンのか。俺がレジにいたときに、カウンターに並べ始めたから買ったよ。あ、笑えてるじゃん。これ熱いうちに食おうぜ」

「すごいね。シナモンレーズン、一番好き。コーヒー入れるよ」

私は、友達宛に詫びの一文を手早く打ちこんでパソコンを閉じ、コーヒーメーカーのスイッチを入れた。台所から戻って、がらんとした部屋の中でやたらと目立つステレオにCDを入れる。ソファがまだないからクッションを勧めた。

「すげー、BOSEじゃん！　どうしたん？」

「こつこつローン」

「怖いねぇ、社会人二年目のローン。あ、これ安藤裕子だっけ？　懐かしいな」

「うん、久しぶりに聞いてよかった。その曲とかすごくいいよ。『洒落た言葉は要りません』って歌詞とかね」

「ふーん。俺の言葉は洒落てないからちょうどいっか」

勝手に自分と私になぞらえた歌詞の解釈をしている彼が、とても可愛らしく思えた。

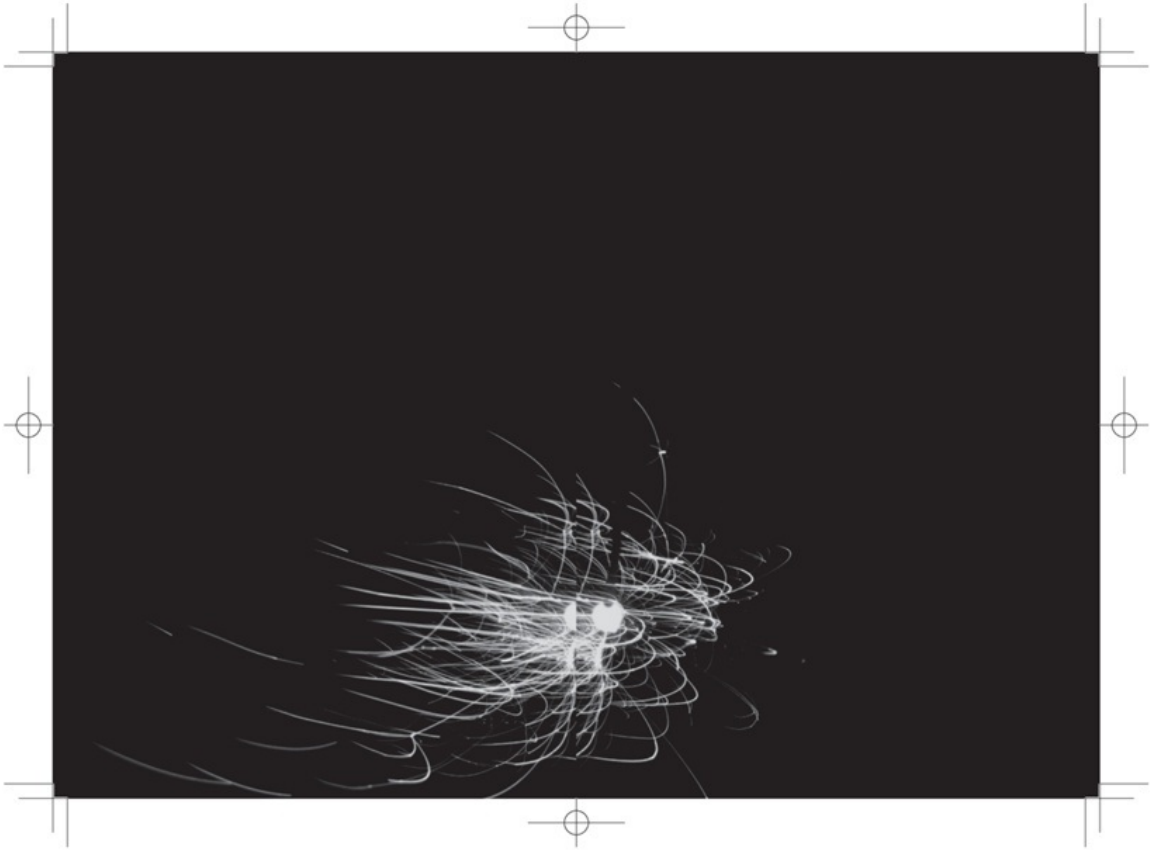
ありがとね、と呟くと、聞こえなかったのか不思議そうな顔をして、

「残りは公園で食べようぜ」

と達大は笑った。笑うと、目元にくっきりとしわがよる。そんな彼のシャツをつかんで、頬にキスをした。

今日は、達大と部屋で食べたのと同じシナモンレーズンベーグルを自分でつくってみた。クリームチーズをたっぷり塗って、大きめの保温ポットにコンソメスープを入れた。あと三十分もすれば達大が公園で待っている時間だ。

今日は会うのは私のためじゃなくて、ベーグルのつくり方と、途中になっていたパリの話を聞きたいからだとメールには書いてあった。でも今日も、パリの話をする私は、彼に甘え方を教わるんだろうな。芝生の上で寝転びながら、今日は聞こえる声で言おう。ごめんね、じゃない方の言葉。



有楽町線

非常階段

「なんで、私たち会ってもあんまりしゃべらないんだろう。沈黙しても、埋めようと頑張りもしないよね」

「うーん、しゃべるよりずっとしたいこと知ってて、今はそれができないから、どうしていいかわからないんだよね。休日の昼時、担々麺屋には人がいっぱい。器下げられちゃったから、そろそろ席立たなきゃ、そこで待ってる人たちに睨まれるな」

「……私、それでも、ちょっとだけ」

彼女は突然、机上で組まれた僕の手のひらに触れるように、前のめりに伏せた。彼女の手が僕の手の甲を、意思を持って這い回る。袖口と腕の隙間にすっと指を差し込んで、担々麺屋の小さなテーブルでできる限界まで、彼女は僕を犯した。

彼女は自分のニットの袖口を指でひっかけてほんの少し開き、僕の右手をその隙間に引き込んだ。僕らはしばらく黙ったまま、互いを浸食しあっていた。彼女は、突っ伏したまま、しばらく顔を上げなかった。気まぐれな動きに翻弄されるまま動かないでいると、やっと、ほんの少し上気した顔を持ち上げ、

「一言もしゃべんなくても、好きだな」

と呟いた。僕はもう少しの間、翻弄されて立ち上がれない。

会計を済ませた彼女の手を引いて、学生時代から変わらない、古いビルの非常階段へ歩いた。重い鉄のドアが閉まる音が聞こえたのと同時に、僕は彼女に向き直った。もどかしさが思ったよりずっと多くつもっていて、性急に動いてしまいそうな自分を抑えながらも、きつく抱きしめた。

もう、どこにもいかないで。

お願いだからそばにいて。

顔を見たら、彼女も同じことを思っていた。触れただけで痕が残るような素材で僕らができていたなら、僕らはとっくに痣であらかたの輪郭が構成されていた。

「ここと、十本の指だけで、事足りる時間」

彼女はそう言って唇を僕の首筋に押し当てながら、だらりと落ちた僕の腕にぶらさがる手のひらを探り当て、すがるように指をきつく絡ませた。お願いだからそばにい

て。もう、どこにもいかないで。外気に触れる方のコケティッシュな言葉とはうらはらな強い力で、僕に伝える。

初めて、僕にもたれかかることを彼女が自分に許した日、僕たちはいつも以上に話をしなかった。バーで隣り合った人とどうかなるなんて、どっかのつまらない小説みたいだ。

でも、この人はいつまでも知らないままだけど、ほんとはずっと前から、彼女が店にいればすぐに気がついた。景太と話す声がよく聞こえるようになった頃から、そういえば彼女は一人で来ていた。

試飲に付き合う代わりにカウンターの中の景太を独り占めにして、夜が更ける前に帰ろうとしてカウンターに背を向ける彼女の横顔が、底のない淋しさをたたえていて、次は声をかけよう。景太をダシにして次は、と思っているうちに、多分もう好きだった。

彼女はまだ声を出さないから、一生知らなくてもいいことを、うっかり言ってしまいそうになる。絡んだ両方の手指をそっとほどくと、彼女は黒目に孤独を同心円状に広げて僕を見上げる。違うよ、別の方法でもう一度、気持ち知りたいだけ。

両腕を背中に回すと、彼女の顔が見えなくなった。けど、ちゃんと安心しているのがわかる。温かい息遣い、安らかな肩の上下。ずっとほしかったもの、いとおしいひと。

フェード・アウト

啓発好きな同僚がいる。他人に影響を与えるということが生き甲斐なのだ。情報を持っていることが最上の状態だと思っていて、自分が得た有益な（と彼女が思っている）情報を身近な人に知らせてあげないと、周囲が大損をすると思っているみたいだ。

亮と会った日から少しして家庭教師のアルバイトを辞め、小さな建築事務所の事務として働き始めた。今週末まで出張の彼には、家庭教師を始めたことも話していなかったから、今度のことも特に言わなかった。何にせよ、彼が私より早く家に帰る可能性はほとんどゼロだ。

事務所は、池袋とはいえ駅から少し歩くし、大がかりな看板も出ていないから、新規のお客さんはほとんどいない。昔からの付き合いばかりの中、飛び込みの若い営業マンが来たりするとみんな驚いてしまうような、そういうところだ。

でも、今まで恋人の稼ぎだけで何不自由ないノープレッシャー生活を送っていたので、こうやって毎日仕事を与えられることは、新鮮だ。

ただ、今日も始まった。

「美海ちゃん、トイレをきれいにしなきゃ駄目だよ。きれいだといいことばっかり起きるんだって。美海ちゃんもいい年だし、セレブな人と出会うかもよ、トイレ磨けば」

なーんか胡散くさい。そういうことを1%の疑いもなく話す根拠は何なのだ。しかも余計なお世話だし。と言いそうになりながら

「へー。うちまぁまぁきれいですよ。出会えますかねぇ」

とか言ってもう関心は昼休み読んでいた小説の一場面に戻っているのだけど、彼女の熱っぽい口調に根負けして、先週本を買った。

願望は映像化されて、宇宙と交信することで叶う。ほしいものは他人と取り合うものじゃなくて無限にあるから（なんたってコズミックだから）お願いして、ほしいものをイメージしちゃったもん勝ちだよ。とかこちゃこちゃと書いてあったのだけど、まぁとにかく、願わないと叶わないということが言いたいのかと思う。あれだ、宝くじも買わないと当たらないって理論だ。あれは、私にもよく響く。

というわけで、一人で好きすぎる音楽を聴いて、ピアノを弾く時間がほしいと願っていたらできた。表参道のホールが明日も練習場として使えるらしい。ラッキー。

「美海さぁ、もう飯田橋出なきゃダメになるって言ってたでしょ。一年間限定で、身

を寄せ合いません？」

音楽サークルの友達、杏奈からルームシェアの提案があった。やっと、家を出る決心がつきそう。

ずっと探していたサファイヤのピアスが見つかった。ママが二十歳の記念に買ってくれたものだ。なぜか、昔使っていた化粧ポーチの中に入っていた。危ない、捨てるところだった。

宇宙ありがとう。でも、あの同僚には報告しない。話したところで、彼女の興味は次のネタに移っているのだろう。次はなんだろう。意外とそのネタに内心つっこむのを楽しみにしている自分に気付いてちょっと可笑しくなって、一人で気に入りのレストランに入る。

啓発されるなんてことは、一生に何度も起こることじゃない。啓発本が刊行される度に起こるはずがない。

まだ午後七時だけど注文した、真夜中のスパゲティを食べきって、有楽町線に乗り込む。杏奈はどこ辺りに住む気でいるんだろう。そんなに貯金ないから、あんまり都会じゃないといいけど。

ルームシェア、いいよ。と言ったら、杏奈は見事な情報収集力を見せ、二人で暮らせそうな部屋をいくつも見つけてきた。一年期限だし、敷礼とかあんまりないとこがいいよねぇなんて現実的なことを言いながらも、一番隠れ家っぽい雰囲気のこぢんまりしたアパートの角部屋に決めた。護国寺駅から歩いて七、八分。変わった間取りで、二人の個室の間に小さなリビングとキッチンがあった。

見慣れない荷物の中にぽつんと置かれたソファに座って、杏奈が持ってきてリビングに置きっぱなしの純愛漫画を読みながら、薄っぺらいサンドイッチを食べた。

厚い雲が夜を閉ざす。雲は空を、カーキに思い切り良く白を混ぜたような不思議な色に染めていて、その下に細く長く街路樹が枝を伸ばしていた。それは影みたいに真っ黒で繊細だ。私は立ち上がり、仮に吊られた生成りのカーテンを閉める。

引越は嫌いじゃない。私がどれだけ物質に取り囲まれて生きているかを実感してはうんざりし、あやふやなものをすべて捨てて、その度にリセットボタンを半押しできる。でも今回は、ボタンを押し切った。本当に身一つだった。持ってきたのは小さなスチールの机と、スーツケース一つに押し込められた服と化粧ポーチ、くまのぬいぐるみだけだった。あの人が、確実に必要としないものだけだ。

飯田橋のマンションに、私は下宿人として存在していたかのようだった。私がその

わずかな荷物を運び出したら、生活感は驚くほど薄れていった。休む間もなく一ヶ月の長期出張に出た彼の大きなデスクに手紙を残して、私は家を出た。

好きなことだけしているのが私らしいと思っていながら、何一つ、食事の用意すら期待されるものがない毎日を送って辿り着いたこの部屋は、夕方になると人の気配が一気になくなる。誰一人知り合いのいないこの街で、私は友達と暮らし始める。

昨日は、服をしまい込んだだけで泥のように眠ってしまった。杏奈の帰りに合わせて料理をつくることになっていたのに、この家には足りないものがありすぎて、今日は両腕をうっ血させながら大量の買い物をした。帰りに通り抜ける路地には、どこかの家の晩ごはんの匂いがただよっていた。それは、もうしばらく私の周りには存在しない香りだった。

帰り着いて、エアコンをつけた。配管の繋ぎ方がおかしいようで、本体から水が漏れてきた。

ボタン、ボタンと規則正しく落ちてくる水の粒を皿に受けながら、私は泣いた。やっと実感した。三日前と二日前との差異と比して、昨日と今日の違いがどれほど大きなものであるかがじわじわと迫ってきた。昨日は肉体労働で、それどころじゃなかったのだ。

私が泣きやんでも、エアコンの滴は止まらなかった。もう遅い時間だったから、エアコンを切って、明日管理会社に電話することにした。

ようやく、部屋が真っ暗になった。

「美海の部屋ね」

と言われている東側の4・5畳に戻った。机と今朝届いたベッドと小さな本棚と机でいっぱいになった部屋だ。ベッドの縁に背中をつけて、床に足を投げ出して座り、新しい通勤定期の入った定期入れがバッグのポケットに見えている今、ようやく答えられる気がした。

あなた今、どこにいるの。

私が一生持って行く小説の最後に出てくる、あまりに印象的な問いかけに。

私と杏奈は一年という約束でこの隠れ家に身を置いて、一生懸命考える。自分と、自分を濃く取り巻いている人について。そういう場所に、私はいる。

今日はもうすぐ家に帰ってくる杏奈に、トマトのたくさん入ったパスタをつくろうと思った。まずはごはんとか、気負わずに人を笑顔にできることから始めてみよう。

そしたら私もまた、上手く笑える気がする。

時間

引っ越して、初めての週末になった。杏奈はハンズで収納ボックスを見てから、クラブに行くのだと言っていた。仕事をしながら週に一回英会話のレッスンにも行くし、帰るなり私を座らせて、使い古したキヤノンのカメラを構えて光の加減を見たりしている。忙しくしている杏奈を見ていると、休日と言えども家で寝転んでばかりはいられない気になってくる。

誰かと朝ごはんを食べることも久しぶりだったから、今朝の私は気合いを入れて、野菜のトマト煮とチーズを挟んだホットサンドと、スープをつくった。

杏奈を送り出してから、永倉君にメール便を送った。永倉君は、この前も私の練習を見に来ていた。そうなると、もはやあの時間は練習じゃなくなって、彼という一人の観客に披露するための練習が別に必要になった。それはそれで楽しくて、私は気まぐれに続けていた音楽サークルに、仕事帰りにまで顔を出すようになった。

彼の名前を知ったのは、先々週の土曜日だ。彼は曲についてばかり質問をするので、会話というよりはインタビューを受けているような気分になった。真面目な話が途切

れて、互いの焦りがピリっと走った瞬間、永倉君が突然口を開いた。

「さっき管理人さんに渡したペコちゃん焼きの正式な食べ方、知ってる？」

「へ、何それ、知らない」

「まず、ペコちゃんの口にストローを挿して、穴開けるんだ。で、ほっぺを押して、出てきたクリームから食べるの」

「それ、絵的に悲劇的！　くだらなすぎる」

「くだらないよなぁ、ほんと。高校の時、何回かやったけど難しいんだよ」

子供がそれ見たらショック受けるよ、なんて言い合って、私たちは初めてげらげらと、昔からの友達同士のように笑ったのだった。

リビングに戻って、杏奈が持って帰ってきた地下鉄路線図を眺めていると、毎日使う有楽町線だけでも降りたことのない駅がたくさんあった。一週間後の友達の結婚式が椿山荘だったことを思い出し、下見がてら散歩をしようと決めた。持つべきものはセレブ友達。お料理が楽しみだ。

江戸川橋駅から歩いてみると、履こうと思っていたピンヒールじゃちょっと大変そうだった。タクシー相乗り相手でも探そうかな、と思いながら坂を上る。

椿山荘への道沿いに、混み合うパン屋さんがあった。フランスパンが有名な老舗ら

しい。とりあえずフランスパンを一本と、とぼけた顔のパンダクッキーが乗せられたクリームパンを買った。近くのコンビニでミカドコーヒーのカフェオレも買った。

歩き出すと同時にストローを挿し、苦甘い液体をすすっていると、今日はいい日になる気がした。スニーカーは歩きやすい。ほしくてしょうがないものが目の前にあって、欲望に耐えかねて手に入れてしまうのはとても行儀が悪くて気持ちのいい、私らしい生き方だと感じて、またストローに口をつける。

ハンズで台所用品を買って池袋駅まで歩くと、中途半端な時間になっていて、買ったパンをどこかで食べたくなった。大人がクリームパンを食べていても違和感のない場所なんて、外界にはほとんどない。ふと、思いつきで西武百貨店の屋上に行った。雨ざらしのテーブルと椅子が並ぶ屋上には、なぜか手打ちうどんの店があって、しかも何人かが店のそばのテーブルでうどんをすすっているのが見えた。気になって一杯頼み、近くの椅子に座った。

向こうで一人だらだらと座っている人は、逃るものの何もない空に煙を吐き出している。ある人は腕組みをしながら居眠りをして、私は湯気の立ち上る釜揚げうどんを食べる。向こうには数Ⅲ・Cの参考書を開いている人がいる。それはこの場所の使い方として、うどんをすするよりも粋だと思った。

思ったより空腹だったのか、うどんを食べきって、クリームパンを少しかじった。三月初めの割にぬるい空気は、しばらくとどまるのに十分な理由になった。今日は、なんだか幸せだ。

すると、一通めずらしい人からメールが来た。悪趣味な冗談でなければ、中学時代の思師の奥様が亡くなったらしい。まだ若くて、三人の子供も、末っ子に至っては小学校にすら上がっていないはずだった。

連絡を受けてから、少しの間何も考えられずに屋上を見渡すようにして、親友に電話をかけた。あの子は、長い間黙っていた。お葬式、行くっと聞いても、しばらく返事はなかった。

切った瞬間かかってきた電話は、永倉君からだった。

「もしもし？　今？　大丈夫、一人だよ。そうだ、今朝、音源入ったCD送ったよ。私の無名曲だけじゃ申し訳ないから、おまけにビートルズのブラックバードも入れたよ。なんでこの曲、こんなに優しいんだろうね」

「ありがとう。ブラックバードは僕も好き。ポールはメロディーメーカーすぎて、店

でかかってたりするとたまにびっくりする。加工いらないんだ、メロディーがあそこまでしっかりしてると。えっと、話変わっちゃうんだけど、こないだのトワイライト、途中の和音で一ヵ所気になるところがあって……あとでメールするから、そこに書いてある和音を当てはめてみてくれるとうれしい」

「ありがと。そんな真剣にならなくてもいいんだよ。今、百貨店の屋上にいるんだ。たまに館内放送入るけど、空気が気持ちいいよ。なぜか手打ちうどん食べちゃった」

たわいもないことを話して、ふと、宙に浮いた空白に、私は自分が中学生だった頃を思い出した。

同じ部の女の子たちの会話についていけなくて、私も、つまらないから。とついていく努力もしなかった。だんだんと私は孤立して、もっと悪いことに、すがりつくこともできなかった。テニスができればそれでいいと思っていたのに、日に日に増す休憩時間の重苦しさに耐えることができなかった。

一人でいることがつらいのではなくて、一人でいることを周囲に認識されていく過程が苦しかった。部というまとまりから離れたところでの一人になりたかった。集団

に属しながら一人を選ぶしかないという現実に、目をそむけたかった。

大好きなテニスをするためだけにいた部活を辞めますと言いに、職員室の先生の机まで行った。

「どうした？」

「えっと……」

いつものように笑う先生につられて、思わずつくり笑いをしたら、その表情のままで涙が出た。それを見た先生は、慌てて職員室の横のこたつ部屋へ私を引っぱり、ティッシュを箱ごとこたつに置いた。

「思いっきり泣け。とりあえず、止まるまで」

私は何枚もティッシュを手にとってくちゃくちゃに泣いた。

「辞めたいんです」

「あと少し、次の大会終わるまで頑張れないか」

頑張れるかわからない。やっぱりもう苦しい。泣きすぎて空っぽになった胸から、絞り上げるように口にしたこたつで、私は聴いた。

「おまえがいなくなったら、俺はあの部活、やってける自信ない」

新任顧問の先生は、驚いて、泣きはらした顔を上げた私に続けて言った。

「女の子そのものみたいなあのメンツの中で浮いちゃうお前がいなきゃ、俺もあそこに居場所ないよ」

「……私、はしゃいだりできないし、思考半分男ですもんね」

「そうだよ。俺、ずっとサッカー部の顧問でいる方が断然楽だったよ。この年頃の女の子って、難しいよな」

予想外の言葉に、一応この年頃の女の子な私は笑ってしまい、先生も困ったように笑った。どんな形であれ、どんな理由であれ誰かが必要としてくれているのがわかったら、それだけでよかった。

「どうした？」

永倉君の落ち着いた声で空白が失われたとき、私は今先生に必要とされていることが顔を見なくてもわかったから、ぼろぼろと泣いた。そして、話したこともない人のお通夜に行くことにした。

十五歳の私を必要としてくれた先生を一目見て、自分の辛さに固執して結局大会前に退部届を出した過去の弱さを悔いて、先生みたいな人を裏切ることはもうしないと決めて、またこの家に帰ってきて、大好きな人たちに、「いてくれなきゃ困る」と言う。

弔辞なんか、時間的には哀しいくらい意味がなくて、悔しいことにそれが一番伝えなくちゃいけなかった言葉だ。それを聞いて、彼女があの写真みたいな笑顔を見せられるそのときに言わなくちゃいけなかったから、みんな泣く。私は今読まれている弔辞の無意味さと、読み上げる人の悔しさに触れて泣いた。

「頑張れよ」

昨日の通夜の帰り、先生は私にそう言った。

落ちる寸前の涙をこらえる眼の中の先生は、ひどく歪んでいたからわからなかったのだ。通夜の後、枯らすように泣いて遅えた今は、記憶の中よりもずっと痩せた先生の顔がはっきり見えた。

数人が前に並んでいるときから、私はこけた頬の上に乗る先生の目しか見ていなかった。それに気付いた先生は、同じように一度も目を逸らさずに私の手をとって、肩をたたく。

「また、会ってください」

私は十五の私に戻ってそれだけやっと口にして、こたつ部屋でそうしたようにく

ちゃくちゃに泣いた。くずおれそうな私を右手で支え、

「また、会おう。ありがとう」

あの頃と同じ、みんなは眠くなるって言っていた大好きな声で先生は言った。痩せた彼を支えたくて目の前に現れたはずなのに、彼の手にこもる力は強くなるばかりで私はまた泣いてしまう。

大好きな人たちを支えても崩れない力がほしかったし、もう少しはついていると思っていたのに。ハンドルを握る車の中でも、私は涙を止めることができなかった。

魔法の言葉

多分、小さい頃声を上げて泣くのは、誰かの関心を惹きたくて、とにかく心配されたくて、そういうことなんだと思う。だけど私は、一人の部屋で逃げるように電話を切って、もういい大人なのにベッドの上で泣きじゃくっていた。

また、手の中の携帯が鳴った。最近見かけなくなったショートメール。

『すぐ泣くんで早めに電話切りましたが、本当に応援してるんで頑張れ！　またいつでも相談乗るから』

この時間、家に誰もいなくてよかった。大人っぽく取り繕わずに、思いっきり泣ける。

あの日から、ずっと会いたかった。

田舎者だから、つるつるした三越のライオンの前足に触ってしまう。何人こうしたらこんなにすべすべしちゃうんだろう。触れながら目を泳がせて、あ、みっけ。

もうありえない話をして笑っても全然不毛に思わなかった。頼れる人が、嘘かもしれなくても一晩考えてくれた結論に、私もワクワクできたから。

甘ったるいジュースを二杯飲み終わると、彼は生中を六杯飲んでいた。

一次会を終え、私たちは銀座らしい大通りを歩き出した。あなたはジュースしかダメだから、と陽気に笑う彼は突然立ち止まり、

「あの店、まだやってるかな？　なお様が好きな店、本棚がたくさんあるお店」

そう小さく独り言を言って右に曲がった。それはとても素敵な提案だった。久しぶりだった私はうん。と頷いて、彼に先んじてにこにこ歩く。

本棚に囲まれた螺旋階段を下り、ラストオーダーも近かったから、今日はケーキを頼まなかった。慇懃なウエイターが運ぶ紅茶のカップに、ゆっくり口をつける。

「仕事、最近どうよ」

「ここまではあっという間でしたけど……」

話しているうちに、ただの相談になっていた。周囲の環境に相変わらず馴染むのが遅い自分に、平気な顔を保ちながらずっと焦っていた。

「反省したって仕方ないよ。だからフィレオフィッシュ食べただけで胃が痛いんだよ。

顔しかめてるよ、たまに」

彼は心配そうな顔で言った。

「フィレオフィッシュって、さっき食べた魚のフライのこと？　あれは食べすぎただけですよ」

私は笑って、高い紅茶を飲まないのに注ぎ足す。また吐き気がする。ねえ、タクさん、私、営業なんかできるタイプじゃないって知ってるよね。タクさんの会社で広報やらせてもらってたら、お荷物って言われずに済んだのかな。言葉にできないまま、カップの中に角砂糖を二個沈めて、彼の話に耳を傾ける。

私も一応社会人なのに、一次会も二次会も端数すら払わせてもらえなかった。私はきっと、彼にとってずっと就職活動中の大学生なのだと思う。敬語なんかところどころ忘れて話しても、彼が私のことを名字じゃなくて名前で呼ぶようになっても、ずっと。

店を出て、マロニエ通りをゆったりと歩いたつもりだった。なのに、あっという間に着いてしまった改札の前で、私は尋ねる。

「仕事中に知り合った人で、好きになった人っていますか？」

「いないなぁ。俺も人間だからさ、単純に美人だと思った人とか、面白いやつは何人か知ってるけど」
「そうですよね」
私たちは、またね。と言い合って、開けた構内のど真ん中で握手をした。白々しく光る駅の蛍光灯のような、ひとつも後ろめたいところのない握手に、私はちょっとだけ傷ついた。
泥みあう金曜日の電車に乗り込む直前、短いメールをつくった。
憧れだと思っていたけど、ずっと会いたかったのは、好きだったからかもしれません。
こんなの、送ったところで何にもならない。彼の心をほんの一秒波立たせることすらないかもしれない。いつもそう。口にできない言葉で自分を囲いこんでしまう。
あっという間にでき上がったメールの字面をぼんやり目で追っていると、地下鉄の駅まで歩いているのだろう彼からメールが来た。
『気をつけて帰りなさいよ』

やっぱり、彼にとっての私には、何も知らない、後輩らしい振る舞いが必要なんだ。ずっと大学生だっていい。会いたい気持ちの方がずっと強かった。私は、未送信メールを削除して、次の駅で降りて電話をかけた。まだ彼は地上を歩いているはずだ。
「おー、どした？」
「タクさん、おかしくなる一歩手前になったら、また、呼びつけていいですか」
「一歩じゃ遅いから、五歩前ね。いつでもいい。一匹狼のなお様、もっと人に甘えなさい」
その言葉は、視野がどんどん狭くなって内側に閉じこもる七歩手前に辿り着いたとき、肩をトントンと叩いてふっと顔を横に向けてくれるのだ。横を向いた私の手をひいて脇道に連れ出し、登りきった坂道の上に座らせて世界を俯瞰させてくれる言葉。
ありがとう。私はホームの上で、不審なほど大きく頷く。

月から、イースター

何かに出遇ったときの考え方とか感じ方が似ている。

予想外の共感は、強い友情や愛情の基点になって心地いい。でも、それ以上はない。

景太君とは、私の友達でもある彼の恋人について相談を受けたのが最初で、今日で会うのが二回目だ。彼と私は好んで聴く音楽も似通っていて、凝り性で、たまにクラブに出かけるところも同じだった。

もんじゃは、明太もちチーズを頼んでくれればあとはなんでもいいと言ったら、彼は二枚目に海鮮スペシャルを頼んでいた。私の忌み嫌うあさりだかはまぐりが、銀色のお椀に山盛り乗ってやってきた。

「なんでもいいって言った手前悪いんだけど、コテで刻まれると避けることもできないから、鉄板の隅で別焼きにしていい？」

「上手く焼いてくれるならいいよ。でも、もんじゃ自体は全くスペシャルじゃなくなるな」

「確かに。海鮮と名乗っていいかもわかんないね」

私は、そこにあった醤油で貝類を鉄板焼きにして、すべてを彼の取り皿に入れた。

「あーこれはこれで旨いかも。あさりの何が嫌なの？」

彼はおおらかな性格そのままの笑顔を向けて、あさりだったらしい二枚貝を美味しそうに噛み締める。

「滋味深い味と、二本並んだ排水管。それより、彼女とは大丈夫になった？」

「ん、まぁ、大丈夫だと思う。俺もマスターに真剣に話したら、卒業を条件に雇ってもらえそうだし。『いろいろ本腰入れて教えてやるか』って言ってくれた。レポート十枚書かされるとは思わなかったけど」

「レポート？　さっきからちょくちょく出てくるけど、マスターって面白い人だね。まぁあの子、結婚結婚騒いだりするタイプじゃないし、大丈夫よ」

「うん。それより、サポートしてやらないとなって思った。もう内定先でバイトとして働いてるんだけど、社員見てて、内定取り消されてもいいかもって思うくらい忙しい週とかあるらしい」

私たちは話に熱中しすぎてパリパリになった貝抜きの海鮮（元）スペシャルを、かなり苦労して鉄板からはがした。

コーヒーだけ注文した月島のマックで、誕生日プレゼントをもらった。私のものに

なったアローズのモンキーストラップをゆらゆらと手元で揺らし、一通り愛でていると、彼は突然言った。

「行きたいところに行って、それを好きなように撮り残している杏奈ちゃんが羨ましい。嫉妬する」

急に真面目な顔になった彼に驚きながら、きっと

「そんなにいろんなとこ行ってないよ」

とか、

「写真だって、ただの趣味だし」

とか、そういうことを言う場面じゃないんだということは私にもわかった。

「うーん、じゃあ言うけどね、自分の思いを形ある言葉にして吐き出させてくれるのはあなたの能力で、会って二回目の今日も、私は嫉妬してるよ。他にもあるけど言おうか？」

彼は言葉を飲み込んで、お互いが、もう心地いいだけの関係を望んでいないんだということを理解した。彼は頭がいいから、言葉を必要以上に重ねるのはやめて、私も黙った。

本人を前に口走った嫉妬で、首すじから胸までが一瞬のうちにざわついた。ざわめきが鈍い痛みに変わって、私たちは、癒し合うのをやめた。当たり前だけど、嫉妬の対象は、自分が欲してやまないものだ。

「……俺、行きたいところいっぱいあるのに、バイトとか、ろくに行ってないのに授業とかいろんなことを理由に目逸らして、何もしなかった。でも、羨ましくて仕方なくなったから、今年から見て、感じたい場所に一つずつ行こうと思う」

「最初はどこ？」

「イースター島」

「いいねえ、東京から遠いってだけでいいよ。東京で見つかるものがガラッと変わる。多分ね、私、会社辞めるんやわ。その分時間も余裕できるのに、いつでも動けるって状況に危機感なくなって今より動きが鈍ると思う。そしたら会って。イースター島の話と、その後の東京での話を聴かせてほしい」

嫉妬を消化してすぐに動こうと決めた彼に、この先私は間違いなく刺激を受ける。いい循環が起こっていた。

ストラップは、その場で写真のバックアップ用に買ったフラッシュメモリにつけた。ピーチピンクのメモリに、バナナとサルが揺れる。私が昔、謹に嫉妬して、その才能を欲して、会社員を始めてからも未練がましく記録道具を買ったのかを、これで忘れ

ることはない。

隅田川沿いを勝どきの方に歩いていく。途中の酒屋さんで買ったジンジャーエールを開けて、飲みながらのんびり歩く。ドライらしいひりつきを喉と鼻の奥に感じ、そろりと勝関橋の可動部分を覗き込んでいると、お、と声がして、振り向きかかった背中を軽く押された。

「ひどい！」

「大丈夫だよ、落ちたりしないよ」

「落ちたらタクシーも乗せてくれないよ……そいえば、イースター島ってあったかいの？」

「うん、一年中そんなに変わらないよ。だいたい二十度から二十五度」

「東京と、時差は？」

「十五時間、何、電話でもくれる？」

「ううん、違うけどその即答具合、合格。ほんまにいこうとしてるんやね。携帯って通じるの？」

「くれないのかよ。って携帯？　うーん、ここで答えられたらかっこいいんだけど、わかんないや」

「わかったら、教えてよ」

私たちは橋の真ん中で引き返して、物も言わずに立ち止まり、土曜日の太陽が、逆光で黒くなったビルに隠れていくのを眺めた。私たちの真横で、湾曲したビルの大きな窓が、世界を二つの破片に分けた。夕日で瞳を焦がす私は、破片の鮮明な方を自分の世界だと思い込む。

私は次、どこに行こう。夕日を並んで見つめる人と、手をつなぎたくなるのは、なぜなんだろう。

半蔵門線

家族

水天宮の次は新宿御苑に行くと言っていたのに、隅田川沿いを歩くことになった。

父は、私より菜緒よりさらに気まぐれだ。

押上で降りて隅田川沿いを歩く。花見客の往来で、温もった空気はゆるやかに流れ、道端にはござが無造作に敷かれ、背の低い長机が道に置かれている。

隣の屋台で父は缶ビールを買ってきて、母はさっき人形町で買った高級な人形焼を机に並べる。

「うわぁ、皮うす……あんこばっかり」

いい歳して和菓子が苦手な私は、一つ食べて手をつけるのをやめて、母がつくったクッキーを懐かしく食べる。

父は、うるさいと思わないのだろうか。私も、協調性満点の母も、全然そうじゃない菜緒も、家族が集まるとひたすらしゃべり続け、何かにつけてツッコんで笑ってい

る。

「幸せやなぁ……真昼間からビール飲んで、至福やなぁ。菜緒、お前至福って書けるか漢字？」

「えーそれこないだも聞いてきたよ」

菜緒は呆れて、人形焼をもう一つ口に放り込む。

「あ、そうやったか」

照れ笑いを浮かべる父を見て、妹が実家に帰ったときにも、この人には至福を感じる瞬間があったんだ、と少しうれしくなった。父は続ける。

「なぁ母ちゃん、定年したら浅草に住もうや。毎日ここ散歩できんで」

「えー東京？　嫌やわ。いつか地震来るし」

「だってガイドに『永井荷風（ながいかふう）は毎日のように浅草に通った』ってあるし」

「永井荷風とうちって何も関係なくない？」

私も話に混ざる。

「そうや、何のゆかりもない」

「そもそも、ながいかふーって何してた人？」

菜緒の頭の中に、漢字が思い浮かんでいるかは怪しい。小説なんかほとんど読まず、

訳のわからない法律書をうれしそうに持ち歩いていた人なのだ。

「小説家やけど、下町で決まったもの食べてるイメージのが強いよなぁ。今日あれやな、アリゾナキッチンに行こか」

父は、家族の同意を得ようと洋食メニューを並べたてる。

屋台のスピーカーから懐メロやら童謡が流れてくる。そのうち父の缶ビールが空になった。

「父さんはなぁ、あぁいう風になりたいんや」

父の視線の先には、小さな折りたたみ椅子に座り、屋形船をぼんやり眺めている一人の老紳士がいた。かしこまった中折れ帽、背広姿でカップ酒を飲みながら座る彼の背中を、家族全員で見つめる。すっと背筋が伸びた老紳士の背中は、この風景にずっと前から溶け込んでいて、欠けてはならないものになっているのだった。

「なれるよ。もうちょっと痩せて長生きしたら」

「無理やわ。俺は上手いもん食いまくってころっと死ぬんや」

私たちは、呆れたように、でも同じ調子で笑う。

こうして家族四人で出歩く機会がこれから先、確実に減っていくだろうことを全員が感じ取りながら、桜並木で飾られた川沿いを歩く。散り舞う花びらは、私たちの肩や髪にとどまったり、また風に乗り直したりしている。これから強まっていく日差しが、今日はまだやわらかい。

リ・スタート

「時間止まんないかなぁ」
東京駅を見下ろすデッキに立っていた彼が、私に触れることなく呟き、
「めっちゃ念じたら止まるかも」
私は真面目な顔で言う。
二人して黙り込み、念じてみたら信号が赤になって、都会の人は行儀良く白線の前で立ち止まり、タクシーの流れが緩やかになり、あるとき、本当に駅前の動きが止まった。
「電車も出発しなきゃいい」
良くないことを言って笑ったら、その瞬間、また街は動き出す。
私たちは昨日、会社の中で出会った。私が働いている神楽坂の小さな会社に書類を届けに来た人が、今、右隣にいるのだった。

これがないと何も進まなかった。待ちわびていたデザイン案の入った封筒をその場

で切って席に戻ろうとする私の背後で、
「あの、ハンコ、ください」
と遠慮がちな声がした。
「あ、すみません」
改めて顔を見ると、冷たい色のメタルフレームの眼鏡にかすかに見覚えがあった。昨日もここに来て、向いの席のお局様に「届けるのが遅い！」と八つ当たりされていたバイク便のドライバーだった。
「昨日、すみませんでした。全然あなたのせいじゃないのに」
私は、当のお局本人には絶対に聞こえないように近寄って、声を潜めて謝った。
「いいんです。こういう仕事って、たまにそういうことあるから」
彼は、私の幼なじみに声がそっくりだった。それだけなのに、明日の予定を埋める人としてふさわしいように思った。
「突然すみません、別件。明日、会えたりしませんか？」
「明日？　……大丈夫ですよ。この近くのどっかで待ってます。駅前のマックかな」
突然の誘いにも眼鏡の中の表情を変えず、彼は大まかな時間だけ指定して帰っていった。急に声をかけた私の方が、少し戸惑っていた。

「知り合い？」

席に戻ると、お局様は表情のない顔を書類から上げることもなく声を発した。たった一つの単語に、何かしら義務を負わせるような人間にはなりたくないと思った。今回は回答する義務を負わされたその言葉を、私は聞こえなかったふりをして、デザイン案のチェックを始めた。言葉とは別の、受取手が勝手に解釈して終わりにできる表現方法に憧れて、私は写真に執心しているのかもしれなかった。

その後、私は三時間残業して帰宅した。顔が疲れている。まだフェイシャルマスクあったかなぁ。あの書類がもっと早よ来てれば、今日の広島戦見逃さへんかったのに。しかも負けたし。あのデザイン事務所契約切っちゃうかな。

疲れに任せて頭の中で悪態をつきながら近所のスーパーに立ち寄って、発泡酒とブルーチーズ、それと朝食べるキウイを買った。

翌日、マックの窓際で文庫本を読んでいた彼に、窓越しに手を振った。本を閉じ、すぐに店を出た彼と地下鉄に乗る。

有楽町の高架下でハイボールをあきれるほど飲み、店を出る頃にはお互い色んなことを忘れて、新丸ビルに入った。午前四時まで占拠しても咎められることのない、高級そうなソファに身を沈めた。人影もまばらなその場所で、甘えてもたれかかる年上の人の髪を撫でる。

「アンナちゃん、でも、これしてるよ、俺」

べろべろに酔っぱらった彼はそう言って、私の顔の前に、薬指に指輪のはまる左手をかざした。私は撫でるのをやめなかった。今日はいじめない。眼鏡の奥のどろんとした瞳は起こさない。自分の出した答えに、かけらも自信が持てなくて焦ってばかりの私に、一瞬でも時間の経過を忘れさせてくれたお礼のつもりだった。いつも周りに甘えてばかりの私が、こういう位置にいるのは不思議な感じだった。

そんな私の便利さに、彼は大いに満足しているようだった。キスされるとわかる瞬間は、幾つになっても快楽だ。でも、それは利那だからだとわかっている。明日にはまた他人に戻るから、私に近付いてくるその目はいとおしくて、閉じられた瞼に感じる唇の圧力は、密やかでただ気持ちがいい。

あんなに小さな会社なのに、社長と二人きりで話をするのは三ヶ月ぶりだった。辞表を出した翌日は新橋駅で待ち合わせ、銀座のウエストに連れて行ってもらった。名前だけは聞いたことのある老舗に、上品なブラウンのジャケット姿の社長は、一番ふ

さわしいように思った。

私は名物らしい、ふっくらしたシュークリームにそっとナイフを入れ、こぼれ落ちないくらいもったりとしたカスタードクリームを口にした。ほのかな甘みが広がって、気持ちが落ち着いていくのがわかった。何杯か紅茶をお代わりした後、社長はあくまで穏やかに慰留した。

何のスキルもない私にはもったいないあの日の言葉に、思いとどまって頑張ってみた。引っ越しもして気持ちを立て直そうとしたけど、ダメだった。

どこで話しても結論は変わりようがなかったけれど、連れていってもらった古めかしい喫茶店はとても気に入った。カルピスが五〇〇円くらいして、場所代という概念がない子供らしく憤慨した、長岡天神駅前の喫茶店を思い出した。私は、ミックスジュースを頼んだ。

「関西の喫茶店には、大抵ミックスジュースがあるんですよ。なんか懐かしくて」

「へえ、そうなの。そういえば桜井さん、実家は関西だったね」

ホットコーヒーの後に告げられた、ミックスジュースという単語の響きを物珍しそうに聞いていた社長に簡単なつくり方を説明して、バナナの匂いが強めの甘い液体を

ストローで流し込んだ。

父と同い歳の社長との共通話題は、カメラだった。彼の写真はただひたすらに素直で、美しいと思うものを一番美しいと感じる距離と角度まで自分が寄って撮っている、そんな作品だった。説明書きがないと理解できない、デザイン雑誌に載るようなのとは全く違う美しさを持つ写真が、カメラの液晶の中におさまっていた。

こういう写真が撮れる人に、所有するものの一つである会社を去りたいと伝えるのは、何度となくその場面を想像したのに、そのどれよりも苦しかった。ストローを氷にぶつけながら話していたら、ふいに涙がこぼれた。社長のポケットから、丁寧にアイロンをあてられたチーフが取り出され、使いなさい、と伝える目を見て頷いた。

社長は、行きつ戻りつする私の話を熱心に聞いてくれた。その上、私が漠然とやってみたいと思っていたことを引き出すように、じっくり話をしてくれた。

「こんな時間になっちゃったね。帰ってごはんはあるの？」

「残念ながら、料理上手のルームメイトが出かけちゃってるので何も……」

「じゃあ、もう少し写真の話をしよう。もうあんまりできなくなると思うから……ナポリタン、食べていいかな。ここのは結構旨いんだ。桜井さんは何か食べる？」

「同じもの、いただきたいです」

「きみにとってのお好みソースみたいな感じなんだろうな。このケチャップ味って」
社長は穏やかな笑顔で呟き、黒髪をバツンと肩上で切り揃えたウエイトレスを呼んだ。

私は、その月の末日に会社を辞めた。
社長は、学生時代からの友人である私のゼミの教授に連絡してくれたらしく、大学の非常勤助手としての採用がすんなり決まった。社長の助言通り、助手をしながら、興味の赴くままいろんな教室に通うことに決めた。貯金を取り崩せば、来年と再来年の半分くらいは、そういう生活ができそうだった。人に甘えるのはここまでだ。
会社を辞めてから、有楽町で飲み明かしたあの人とは一度も連絡を取っていない。というか、また会える気が勝手にしていて、連絡先を尋ねなかった。名字は聞かなかったし、ノブユキという名前が本名なのかすらわからないまま、私は母校で働き始めた。同僚は前職に比べて一気に若返ったから、毎日結構楽しかった。
ある日、丸の内に新しくできたビルで助手友達と食事をした。
「酒井教授の下の中野さんって、毎日持ってるバッグが違うんだよね。しかも全部高

そうなの」
「ああ、杏奈ちゃん来たばっかりだから知らないか。彼女、小倉教授の親戚なんだって。お嬢さんだもん」
「さすが情報通の詩織様。でも、ブランドバッグたくさん持ってることよりもさ、毎日替えてるってとこがマメだなぁって思うんだよね。すごくない？」
「なんでだろね、風水とか？」
「ねぇ、その返しは全く予想外だった。今日の会話の中で一番面白い。採用！」
「採用って何によ」
私たちは思いきり笑って大きなピザを食べ、通りを真っ直ぐ進んだ先のＤＥＥＮ＆ＤＥＬＵＣＡまで歩き、チャイラテを飲んだ。新丸ビルの裏を通ったときも、あの人の声は全然思い出せなかった。甘えた声は、幼なじみとちっとも似ていなかったのだ。
空が暗くなると時間の感覚がなくなってしまう。私がこのお店をとても好んでいる理由は、一人で本を読んだり、くだらないことで笑い合ったり、意識してつくらないとなくなりがちな時間が実は、結構大事だと思っている人が集まるところが一つ。もう一つは、高い天井に回るファンが、始まりかけた恋も、高慢な愚痴でさえも何もかも混ぜて外に出してしまうように、くるくると旋回するところだ。

やっと時計を見て、時間を数えた。私の右手は四本の指が折られ、

「やっぱそういうとき、未だに指折って数えちゃうよね」

と子供みたいにけたけた笑う彼女と私は、四時間ずっと笑っていた。

何を思い悩んだって、いつの間にか忘れていく。でも、悩み切ったその後、忘れないうちにこまごまと動き出している今は、スタート地点として間違っていない気がした。

A s o r e

どこまで続くのか、先の見えない列に景太君と二人で並び、二階席へと階段を上る。ベールホワイトの屋根の下にふわっと漂う白いスモークを見下ろすと、別世界が広がっている。

満席の武道館が、真っ暗になった。ステージを照らすアジサイ色のライトがオレンジに変わって、予想通りの曲目でライブはスタートした。

縦ノリの曲なのに、飛び跳ねる人も体を揺らす人もあまりいなかった。春先の思わぬ寒さで固まった体は、まだほぐれないのかもしれない。会場が広すぎて、まだ熱気が全体に充ちていないのかもしれない。小さなライブハウスからスタートして、一つのゴールに辿り着いた彼らの大箱に不慣れな感じが、観客にも伝染しているようだった。

ロンドンで録音された曲が聞こえる。突然、頭の中に文章が浮かんで止まらなくなった。失いたくない光景が、ぴたりと単語に置き換えられたらいいのに。この感触が私の中を通り抜け、消えてしまうのはとても怖い。

グロテスクな緑のライトが、アリーナとステージを覆う。ライトに混じるスモークが、アメーバのように光の膜を這い回る。深い緑色が、空間を侵食する。

ライトとスモークがつくり出す樹海の中に隠れるプレーヤー。直立不動の私。緑。緑の中から聞こえてくる、切り刻まれたギターの音。楽器みたいなボーカルの声で、かろうじて彼らの存在を確認できる。キーボードの音が奇妙にうねり、私たちをまた樹海の中に引きずり込む。非日常よりまだ先の異世界に連れて行かれて、私は自分を失わないためにも、手を叩いて賞賛するしかない。

目と耳から流れ込む音が、足元へ抜けていく。私はもう動けない。威嚇するように立っていた警備スタッフと同じ姿勢で立ち尽くす。足の裏が張り付けられたように動かない。床が、だんだん傾いていく。体が火照る。肌が粟立つ。目をつぶって、開けて潤んで、視線が定まらずに泣きそうになる。

私、今、気持ちいいことをしてる。シンクロした感覚と彼らの音を、首から下げている大ぶりのペンダントに閉じ込めて持って帰りたい。

景太君は、同じように直立不動のまま、ギタリストを見つめている。

「俺、この曲ラジオで聴いて、ギター始めた」

「そっか……」

「生で聴けて、すげーうれしい。生まれて初めて、泣いた曲。俺、ギターやめたくなった。こんなん聴いちゃったら……」

「わかるけど、やめないで」

景太君は答えないまま、ギタリストの手元を見つめ続けた。

「大丈夫？　顔赤いよ」

「うん、火照っちゃっただけ、大丈夫。景太君のきっかけの曲、演ってくれてよかったね」

「やっぱすごかった。あなたもファンだとは思ってなかったけど。誘ってくれてありがとう」

私は誰かの信者になる気はないし、物や人に頼り切ることも絶対にしないけど「また会いましょう」と言われて、心底「はい」と返せる人がいることは、とても幸せなことだと思う。耳がやっと日常の音を拾い始め、門をくぐるあたりで、駅に着いた、とメールが届いた。

「景太、卒業できんの？」

「多分ね。じゃないとレポート十枚無駄になるもん」
「レポート？　あぁ、マスターあれ本気だったの？」
「そうだよ、本気も本気だよ。一万字にご丁寧に赤入れて返された」
「マスター、ああ見えて真面目で心配性なんだよ。お前の方がずっとよく知ってるだろうけど」
「うん。俺、柊士みたいな生意気で一見いけ好かない奴が、一瞬無防備な顔しちゃうカクテル作るってレポートに書いた。外で頑張ってる奴が、家帰る前にちょっと一息つく秘密基地みたいな店持ちたいって」
「とりあえず、俺の評価にはつっこまない。でも、店持つって、大変だぞ」
「その辺りは、マスターから時間かけて方法盗む。柊士も、上司にも嫁にもやられたら、ちゃんと息しに来いよ」
「毎日お前の店に金落とす気はないんだけどなあ……こちらも、左隣のお方次第」
「売り上げ、貢献しちゃうかもね」
「二人して協力してくれるなんて、酒好きのいい友達持ったよ」
彼と景太君は、バーに景太君が入店した頃からの友達なのだ。私はそのやりとりを聞きながら、たまに話に交ざりながら歩く。ペンダントを振っても音はこぼれないけど、反射する光のせいかフラッシュバックが起きた。

外の歩道には人がたくさん歩いていた。ライブ帰りというには多すぎる。
「びっくりしたけど、二人並んで歩いてる感じは合ってるよ。仲良くね。また店にも顔見せてよ」
バーへ行く景太君は私たちにそう言って、二度手を振って駅に向かった。
「マスターに口調似てきてる」
「親子みたいなもんだよ。そりゃ景太も八年生の古株だわ。そういえば最近、景太のオリジナルが店のメニューに採用されたらしいよ」
「えー、初めてじゃない？　どんなの？　なんて名前？」
「きみが必ずはじめに頼むあの暗い色の。名前はブライトライター」
「ブライト？　輝くとか、イメージじゃないけど」
「俺もそう言ったんだよ。その場で携帯の辞書ひいたら、bright lightsって大都会のはなやかさって意味もあって。この色でなんでそんな名前なんだって聞いた。そしたらあいつ「これ見て『何もない空』って淋しそうに言った人がいて、そうじゃない。その下ではあなたも誰かのこと照らして、繁ごうとしてるって言いたかったんだよね。で、これ、飲み切ると出てくんの」って言うんだ」

「もったいぶってるけど、知ってるよ。景太君、あの日からずっとカットの練習してたもん」
「……今は、光たくさん見えてる？」
「うん。レモンの皮で作った不格好な星より、確かにキラキラしてるかも」
「あれ、三つ入ってるとしたら、かろうじて星っぽいのは一つあるかないかだもんな」
「最近なんか『これ、ビルの窓の灯り』とか言って、ただの四角の時あったよ」
茶化すように笑いながら、私は、景太君がこの名前に込めたいくつかの意味を誰よりも理解した。今すぐにでも彼の前に座り、光の粒が沈むカクテルの名前を、ありがとう。とまったく同じ調子で伝えたいと思った。

私たちは、千鳥が淵に沿って歩く。
「わーきれい……」
私は、さっき通り過ぎていった女性たちと同じような声を上げて、お堀の向こうでライトに照らされる桜を見ていた。重力に従順に、暗い水面に触れそうに咲いている桜が、白く静かに浮かび上がる。
遊歩道に沿って植わる大木の真下を歩いた。枝は大きく広がって、その末端はとても細い。重なり合う枝花は、空を透かした天井をつくる。薄い天井は、風に吹かれる度に微妙な揺れを起こして、その揺らぎは、私たちをじっと黙らせてしまう美しさをたたえていた。暗い空は、水のようにも見えてきて、水面の花々は私の頭上をたゆたう。
途中で雨が落ちてきて、久しぶりにざんざん降りになった。冷たくなった頬に、雨粒と花びらが貼りついた。散らないでほしい。今この時間を、私がきちんと使える言葉を尽くして書き残したい。
花冷えが入らせたカフェで、ラテの入った白磁のカップを持ったままほっと息をつく。彼が口を開く。
「本籍地どこにする？　家にしといた方が楽だよな」
「え、それでいいの？　どうせだったら、一生住めないような思い出の場所にしようよ」
「思い出か……ちなみにどこ？」
「あの隙間かな」
「へぇ、日本橋って中央区でいいんだよね？　俺、きっとあのバーの住所にすると思ったよ」

「それもありなんだけど、私の糸を手繰ってくれたの、あそこだと思うから」
「……いいよ、そうしよう。書類やら取りに行くの面倒かもしれないけど、ついでにあの辺寄ることもできるしね。高島屋とか結構好きなんだ、俺」
彼は、冷え始めたコーヒーを一気に飲み干した。
「私も。あのエレベーターたまらない」
「そうそう、あれをちょっと小ぶりにした感じの手動エレベーターが神保町にあるの知ってる？」
「手動？」
「そう。表のジャバラを開くのもドアの開け閉めも自分でやるんだよ。ボタンは、階数指定のしかない」
「不思議。そのうち連れてってくれる？」
「いいよ。来週行こう。あと、マスターにも報告しに行こう。びっくりするだろうな……びっくりしたときに似合うカクテルってオーダーにしよっかな」
「ねえ、楽しそうなのにごめん。今なんか気になって調べたら、中央区役所の最寄り、新富町だよ！」
「……近いし築地で飯食うか。エレベーターのくだり、全く意味なくなったけど、

神保町は行こう」
「あと、高島屋の特別食堂も、普通の日に」
私たちは笑って、いつもクールなマスターがどんな反応をするのか予想し合いながら店を出て、まだ混み合う九段下駅の階段を下りていく。

the first

「独身最後の夜って、何か特別なことしてました？」
と同僚に聞いて、
「あー友達と朝まで飲み明かした」
とか、ベタだ！とはしゃいでしまうような返答をしたのは三人中一人だけだった。あとの二人が全く覚えていないように、私の今夜も、何も特別なことはないんだ。
今日と明日で何かが変わるわけではなくて、明日も会社はあって、多分朝は今日と同じで食欲ないからヨーグルトだけ食べるし、耳慣れたチャイムが鳴ると会社は始まり、夕方にまた鳴って終わる。
でも、久しぶりにこの家にいるのは私一人だ。誰かと飲むこともなく、べら一枚の資料をつくってから駅の中にある讃岐うどん屋で冷たいうどんをすすって、彼の家に帰ってきた。
一人じゃなきゃできないこととかすればよかったかなぁ。とぼんやり思ってベッドに横たわると、壁際にある無印の半透明ケースの中に、私が贈ったカプリンクスの空

箱が全部取ってあるのが見えて、まぁそれより、早く明日になればいいと思う。
単純にはしゃぐには、いろんなことがありすぎた。私は仰向けに寝転び、目を閉じて、妻となり、いつか母となる自分を想像しようとした。それはなかなか難しいことだった。いつも、転機が訪れてみてなんとかやっていく人生だった。なら、今はこれでもいいのか。
閉じた目の上に右腕を乗せてじっとしていたら、いつの間にか眠っていた。彼が帰ってきたことにも、全く気がつかなかった。

朝になった。薄手のワンピースを着て、いつもの電車に乗る。目の前で必死にメールをつくっている人も、気のない感じで新聞の一面を読んでいる人も、今日が転機なのかもしれないし、昨日がそうだったのかもしれない。人はみんなドラマ持ちだ。でも、話しかける訳にもいかなくて、ウォークマンをいじる。コーネリアスのMusicが耳に心地良い。淡々と和音をつくり出す歌声を、アコースティックギターが絶妙にカットする。
夕方のチャイムが鳴って、急いで指定されたレストランに向かった。建てられて五十年ほど経っているマンションの一階に、無理やりはめ込まれたようなドアを開ける

と小さな階段があって、上った先で、二人は食べかけの前菜と一緒に待っていた。
マスターはすでに上機嫌で、顔なじみのウエイターに同じものをもう一つ持ってくるよう告げた。この店はマスターの友人がつくった店で、とっておきの日にだけ訪れるらしい。
ウエイターの一人は早口だったから、誰もパスタの名前を聞き取れなかった。ただ、一口大に盛りつけられた三種類のパスタは高そうな味がした。
「じゃあ、酔っぱらわないうちに書いとこうかな」
「そうですね。お願いします」
「人のこんなものにサインする日が来るとは思ってなかったよ。店にお前らが二人揃って来たから何事かと思ったけど、サイン頼まれるなんて想像もしなかった。俺でいいのかよ、ほんと」
マスターは、彼の鞄から取り出された婚姻届と、私たちの顔をじっと見比べた。彼と私は深く頷く。マスターはそれを見て、証人欄にゆっくりとサインをし、実印をついた。そして、本籍地の正確な住所がわからず携帯で調べだす私たちを見て
「え、そんな感じなの？　こういうのって、もっとかしこまって書くもんじゃないの？」

と笑った。
「これいつ出すの？」
「この後すぐ、区役所近いんで」
「すごいね。夜間受け付けだ」
「マスター、そういえば今日店は？」
「いいんだよ、任せてある。0時で閉めろとは言ったけど」
マスターは、ワイングラスをぐっと傾ける。
「もしかして……景太君？」
私は、グラスに深い色味のワインを注ぎながら尋ねた。
「そう。やっぱきついやってサラリーマン目指してくれれば、それはそれでいいんだけどな」
「意外と上手くこなしてたりして」
彼はマスターにニヤニヤ笑いかける。
「常連さんにもかなり評判いいしね。あの人なつっこさは天性だよ」
私は二人に話しかける。
「いいから、お前らは早く区役所行けよ。俺、店戻るから」

「やっぱ、心配なんだ。可愛い一番弟子が」
「早く行けって」
むきになるマスターと別れて、一駅だけ地下鉄に乗った。かつてのマスターがそうだったように、かしこまった感じを一つだけ真似して、コンビニでカラーコピーを取った。どっちが本物かわからないほど鮮明で笑ってしまった。
区役所の夜間窓口に着いた。人の良さそうな職員に、届の欄外に捺て印を捺すよう促された。彼が先に捺した。
「最近の人にしては珍しいね。旦那さんが上で奥さんが下。最近の夫婦は、横に並べて押す人がほとんどだよ。まぁ、立ててくれるのは今だけかな」
いたずらっぽく笑う初老の男性に
「そうです。この先は、わかりません」
と私は愛想良く笑った。
「ずっとそうあっていただきたく思います」
彼は大仰に言い、苦笑いした。三者三様の笑顔が、暗く静かな庁舎入口に浮かんでいた。

0時を過ぎてから、近くのホテルに部屋をとった。上品な紺色のジャケットを着たポーターの案内を断って、ドサッと荷物をベンチに置き、昨日と同じようにベッドの上に横たわる。
「わかってたけど、簡単だったな」
返事を求めていないように、天井に向かって呟いた私に、彼は言った。
「そうだな。でも、ちゃんと受理されてたらだよ、俺がビール買いに行こうとしてコンビニ前の通りで轢かれたら、親じゃなくて、まずきみに連絡が行くんだよ。昨日までなら、多分五番目くらいじゃない？」
彼は、簡単だと言った私に対して、あえて言葉にしたのかもしれなかった。あの日のバーの重苦しい雰囲気を、景太君と私が向かい合って囲んだ哀しい空気を思い出しかけたとき、私の真横に飛び込むようにしてうつ伏せに横たわった彼は、またロを開いた。
「もう、景太から大事なこと聞いたりしなくてよくなったんだ。しかも、俺は老衰で死ぬ予定」
彼はそう言って、穏やかに笑った。
「じゃあ、私も」

私はそう言って、少しだけ泣いた。

午後に休みをとっていた彼と明日の午後から会う約束をして、一瞬で眠りについた。

私が出す書類が問題なく通った記憶がほとんどなかったから、今回も書き直しがあったりしてまだ受理されていないんだろうと勝手に思っていたが、区役所はちゃんとその日に受理証明をつくってくれた。

「そんなに要らないでしょ」

「なんか買っちゃったんだよ」

彼は、証明書を五枚も買って戻ってきた。私の肩書きは妻になった。名字も変わった。五枚ともに同じことが書いてあった。あっけなくて実感もなかったけど、なんとなくほっとした。

「死にたいくらいつらくなったとき、いつも、一番に呼んでくれてありがとう」

彼は、立ったままちょっと困ったように笑った。もうちょっと上手い言い回しがあったはずなのに、と思っている顔だった。

紙切れ一枚の結婚なんて必要ない、と言っていた自分たちが、その紙切れを出して、千疋屋に行った。プリン・アラモードのプリンは普通の味だったけど、私はこれを記念日の食べ物として覚えておこうと思った。

ダイアローグ

四半世紀生きてきた僕を食べさせてくれるような、物好きな女性はやっぱりいなかったから、一人東京に生きるには働いてお金を稼がなくてはならない。養うべき家族もまだいないし、目的といえば自活する、それくらいしか。

三ヶ月前に見習いが解けて、僕は車掌になった。乗務員室からはいろいろなものが見える。

地下鉄が通り過ぎた瞬間、線路に下りる作業員。

車体が傾くくらいの殺人ラッシュに詰め込まれる人々。

台に乗って、そのラッシュに目を光らせる駅係員。

サバンナの何かしらの群れのように、発車ブザーとともにけたたましい足音を立てて駆け込む人々（永田町大移動と僕らは呼んでいる）。

僕のお師匠さんは、普段どんなに下ネタを飛ばそうと、心からしょうもない話をして笑っていようと、乗車すれば、駅の近付きを音で感じてガタンと窓を落とす。空気の流れを感じると車掌の顔つきになって、ドアの開閉に神経を注ぐ。一つ一つの動作

にはちゃんと意味がある。そんなこと説明されなくても、手元を見ていたら、伝わる。

都会に生きるということは、シンプルでない。何をするにも人が働いた結果を利用しなければならないから、人の労働がなければ生きられない。誰かをここに生かすために、自分も生きるためにまた働く。

人は今でも新しい仕事を生み出し続けて、それをこなして複雑な都会をつくる。複雑さに絡め取られた人は、そこにどうにか自分の居場所をつくろうと何か仕事を見つけてまたこなして、やっと誰かを支えた気になって、なんとなく誰かの働きに支えられる権利を得た気になれる。

人は働くのを止められなくなったから、東京は今日も動きを止めない。僕にそれを止める権利はない。動きたい人を困らせないように、意味のある所作を重ねる。これが、僕が東京で生きていくための仕事で、誰かの労働結果に支えられる権利を得るための義務なんだと思う。

人を困らせないなんて、どれだけ消極的なんだと思うけど、僕に、車内を快適にするため美しい（これだって私見だ）音楽を流したり、構内で道案内をしたせいで電車を遅らせたりということは求められていないから、仕方ない。

でも僕は、あの人が泣いていたなら、その義務も権利も何もかも放り出してしまう

かもしれない。

＊＊＊

バタバタと狭いフロアを走り回り、長い打合せもようやく終えた、その後、二〇〇枚重なる業書に宛名ラベルを貼っていることを、特別自分にとって面倒な作業だと感じることもなかったのは、今朝出会った人の言葉が頭にこびりついているからだろうか。

「石川美海」

最小限の情報しかない、ひどく殺風景な名刺を手渡した取引先の女性は、爪にとても上品なアートを施していた。グロッシーなベージュに、薬指にだけラインストーンが縦に一列、整然と並べられている。

「お手元、素敵ですね。どちらのサロン行かれているんですか？」

「いえ、これ、自分でやってみたんです」

「ほんとですか？　こんなのプロ並みですよ」

「ありがとうございます。最近結構時間ができちゃって、何したらいいか探してる途中なんです。今までマニキュアすら塗ったことなかったんだけど、意外と向いてるのかな」

彼女の会社はこの不景気の中で受注量が激減して、週休三日、定時は午後五時、一切残業はしないようにと、ひと月前に社長から通達があったのだという。

「水曜日のお休みにお昼ごはんの支度してると、仕事があって会社に行けるって、本当にありがたいことだったんだって思いました。料理だって家事って仕事といえばそうなんだけど、会社の中で生まれる仕事しか、今の私には働いている実感を与えてくれないんだなぁって」

「そうですか……私も、そうだったのなのかなぁ。専業主婦みたいになってた時期あったけど、家を出る理由がないから本持ってカフェにばっかり行ってたなぁ、そういえば」

「石川さん、家の外に出られる理由があるってことは、本当にありがたいことなんです。仕事してるからこそお休みもありがたいと思えるんですよね」

彼女は実感こめてそう言っていた。だから私も、雑用でも仕事ができることがうれしかったのか。

本当はそんなこと、関係ないとわかっている。私は、あの女になりたくないだけだ。

私のことをもう二年も前に、罵倒して去った人がいた。若いだけじゃないか、こんな女。安っぽい服着て、頭の悪そうなこんな女のどこがいいんだ。労働者が行き交う駅の構内でそうわめいたあの人は、少し前まで同居していた人の、前の恋人だった。

彼女は、自分には能力があるのに思うようにいかないのは社会が悪いと信じていて、あらゆることを人のせいにして死んでいくタイプの人間だった。彼が、

「もう、帰れ。帰ってくれ」

と言うまで、社会と私に文句を言い続けていた。

「そのうち捕てられるんだから、あんたも」

その言葉に私はなんて返事したんだっけ。ひどいこと、言った気がする。

「男一人引き止めておけないなんて、それでも女？」

そんな感じだったと思う。私は若くて傲慢だった。なぜか、男に逃げられない自信だけはあったのだ。今、あのとき吐いた言葉がよく似合う自分がちょっと痛い。

彼はもう、私の不在を認識したはずなのに、連絡は来なかった。部屋に残っている家具なんかより、彼の中では薄まった存在なのかもしれなかった。彼の頭に溢れる仕事の山で私はすっかり居場所を失った。

二年前のあの日、私は社会人になるための反面教師に出会っていて、朝に見た端正なネイルはそれを思い出すきっかけだったにすぎない。なのに、一度よみがえってきた鬱屈とした感情は、仕事が終わっても消えてくれなかった。

「ビートルズみたい！」

なんて言う杏奈と一緒に買った、丈の短い金ボタン付きのジャケットをソファに落とし、雑誌を読みながら長々と入浴した。火照った体が冷めてきた頃、私は小さな机の引き出しを開けて、ずっと前に買ったピアッサーを出した。

適合と避合は違うから。一定の制約を受けてたお、しっかり生きる人間の強さを見せてあげるよ。私は五つめのピアスホールを開けた。高校生になってすぐに開けた二個以外は、きちんと意思を持っている。

油性マジックでいびつな点を小さな耳たぶに描き、小さな器具を持った指同士に力を入れる。パチン、と乾いた音を立てて金属が貫通し、カランと白いプラスチックが床に落ちる。薄い痛みはすぐに消え、穴を開けるという目的しかない安っぽい青色のピアスが刺さっている自分を見つめた。

かすかに熱を持つ耳に冷えた手で触れて、私はこんな夜中なのに出かけようとしている。永倉君はまだ仕事中のはずだ。私は家を出て、永田町駅で降りた。

階段近くのホームに立ち、不審にも車掌さんのいる狭い空間を凝視する。……馬鹿っぽい。反対側だったらわかりっこないし、もう寝ているならこんなところ通らない。そう思いながらもやめられなくて、五本電車を見送った。

六本目の清澄白河行きの電車に、永倉君は乗っていた。ホームに降りて、発車を知らせるベルに指を押しあてたとき、彼はホームの端に立つ私に気がついた。

＊＊＊

事務室を出る前に確認したけど、今日は美海さんからメールが来ない。僕は、暗い駅間で、一昨日行った神田の喫茶店のことを思い出した。

亮さんの彼女の千夏さんから、突然連絡が来たのだった。取り壊されてしまった交通博物館で会ったときに話して以来だ。風邪をひいた僕に、うれしそうに話していたシナモントーストを食べに行こうという誘いだった。きっと亮さんが捕まらなかったのだろう。千夏さんの昼休みに合わせて行けば十分だったんだけど、僕はそれより一時間以上前に神田に着いた。

場所はすぐにわかって、二階に上ってブレンドを頼んだ。少し酸味の強いコーヒーを飲みながら、ぼんやりとする。まだ新しいメニューには、ちゃんと千夏さんの大好

きなシナモントーストが載っている。あの雰囲気だとかなりの甘党なのだろう。飲み物も、コーヒーじゃなくてココアとか、甘いフレーバーラテを頼みそうな感じだ。

雑誌から抜き出したみたいな、華やいだ表情の千夏さんが二階に上ってくるまで、僕は美海さんのことを考えていた。彼女からほんのり立ち上るその香りよりも、なんとなく心もとない、手首と足首の細さを強く思い出した。僕はそれを打ち消すように、コーヒーカップに口をつけた。

席につくなり千夏さんは、エスプレッソとシナモントーストを頼み、僕はブレンドのおかわりと、同じくシナモントーストを頼んだ。

「意外ですね。飲み物は苦いんだ」

「シナモントーストを最高に美味しく食べたいの。それだけなの」

「……ほんとに好きなんですね。確かに、周りの人もたまに頼んでたな」

「あ、朝生君って人間観察好きな人？」

「そうでもないですよ。あんまり趣味のいいことじゃない」

「……なんか、亮が朝生君のこと好きなのがわかるなぁ。正直だね」

「ノリが悪いって言われます。亮さんには」

「それ、そのまま返したらいいよ。就職して接客始めるまでかなり寡黙だったよ」
千夏さんは笑って、一口エスプレッソを飲み、亮さんをこの喫茶店好きにするまでにどれくらい苦労したかを話し出した。するとちょうど、マスターらしき人がブレンドのおかわりを運んできてくれた。
「ね、ノブさん。最近はあの人一人でも来るんでしょ？」
「そうだよ。毎回ブレンド三杯はおかわりしていくね」
ノブさん、と呼ばれた彼は、人懐っこい千夏さんに合わせて愛想良く笑う。
「朝生君、今度、亮にツッコんであげて。最近通ってるとこのマスターが、他の物も頼んでくれないと採算とれないって嘆いてましたよって。でもノブさん、もうすっかりマスターだね」
「千夏ちゃんたちが御茶ノ水の社長の店に来てくれてたときは、まだ修行真っ最中だったんだよな。早いなあ」
「ノブさん、御茶ノ水のマスターのこと、社長って呼んでるの？　なんか変な感じ！」
千夏さんは可笑しそうに笑ってから、ホイップクリームをたっぷりとナイフにとって丁寧にトーストに塗り、ジューシーと評したそれを噛んだ。目を閉じて咀嚼する千夏さんの向かいで僕も真似をして、シナモンの色が隠れてしまうようにクリームを

塗って、大きくかぶりついた。
「確かに、あんなうれしそうな顔で話せる味だと思います」
僕は、自分が言葉を発するのを待ち切れず、もう一口食べてから言った。
「私も、自分に正直なの。昔と違って」
千夏さんは黒目がちで小粒な目を細めて笑い、あっという間に分厚いトーストを食べきって、何度もトーストの甘さに溺れるためだけに頼んだエスプレッソをキュッと飲み干した。
僕がやっと食べ終わると、もう行かなくちゃ、と言って、テーブルの伝票を取った。
「もうちょっとここにいれば？　なんとなく、似合ってるよ」
立ち上がるタイミングを逸した僕は、不思議なことを言う千夏さんが職場に戻った後、ごちそうになったことにもしばらく気付かず、もうちょっとどころか、二時間も居座ったのだった。その内半分は、美海さんのことを考えていた。もう亮さんに何も言えない。僕は二時間で五杯もブレンドをお代わりして、申し訳なくなってコーヒー豆を買って帰った。詳しくないから、マスターに勧められたモカにした。
短い駅間では、あのゆったりとした時間もあっという間に過ぎて行った。もう次の

駅が近付いている。僕は、カタンと小窓を下ろした。生ぬるい風が、勢いよく僕の頬を滑る。

ホームに降りて、発車ベルに指先が触れたときだった。ベルが鳴り出すより、ほんの少しだけ前に、彼女の存在に気がついた。

「どうしたの……」

僕の声は、ベルにかき消されるように小さかった。美海さんは、今まで見たことのないラフな服装で、財布も入らないような小さなバックだけ持って、笑おうとしながら涙をこらえていた。言葉を続けることができない。

「声聞くには、多分一番早いと思ったから」

僕は、発車ベルを押しっぱなしで彼女の顔を見ていた。清澄白河止まりなのもあって、乗客は数えるほどしかいなかった。動悸がする。無言で乗務員室に戻ると、彼女もその電車に乗った。

「次は、」

始まったアナウンスは、女性の声の自動放送だ。でも、さっき美海さんは何て言ってたんだっけ。声が聞きたいって言ってたんじゃないか。

＊＊＊

そういえば、路線違うけど毎朝これ聞いてるじゃない。私はがっかりして、シートに沈み込んだ。うちのパパが、

「やっぱり女性の声はいいよなぁ」

なんて低次元な満足を覚えている自動放送が、がらんとした車内に響き渡る。

カチ、とスピーカーからかすかな音が聞こえた気がした。その直後、スクリーンの向こう側で彼はアナウンスを始めた。彼の少しこもった声は、車掌独特のアクセントで発せられることはなくて、普段の会話と変わりなかった。

そういえば、仕事してるところを見たことなかったな。清澄白河って、もう結構すぐだよね。終電も近いけど帰れるかな。ダメだったらその辺で泊まればいいか。

暖かな空気のこもる車内で、何度か車内放送を聞いて座っていると、終点を知らせるアナウンスが聞こえた。

「次は、清澄白河、終点です。右側の扉が開きます。本日も、遅くまで大変お疲れ様でした。……外は寒いです。どうか、お気をつけてお帰りください」

耳慣れないフレーズに、ぼつぼつと座っていた乗客が、スピーカーが埋め込まれて

いる車両の天井を眺めていた。私は、その温度を持つ声をはっきりと、彼から自分だけに与えられたものに感じてからホームに下りて、歩き出す。

＊＊＊

彼女は、僕を振り向くことなく歩いていく。何かに納得したような表情は、ほんの少しだけ見えた。僕は黒い鞄を抱えて、長い階段を駆け上がって踏所に戻る。

「ちょっと、コーヒー買ってきます」

「あ、なら俺のも頼むよ。なんでもいいけど微糖な。……どうしたんあいつ、走っちゃって」

財布も持たずに、行き先に見当もつかないのに、携帯すら忘れたのに、僕は駅の外に出た。

宝物

ボーナスで何買おう。と浮かれるってとても社会人らしくて、一度やってみたかった。結局、社会人の間にそれはできなかったんだけど。

「カメラ、液晶映らんくなっちゃった」

「杏奈、使い過ぎなんだよ。先週の飲み会でも、練習でも撮ってたでしょ」

美海とは、学生時代に入っていた音楽サークルで友達になった。あとから聞いた話だけど、彼女は専門学校の課題に行き詰まると無性にピアノが弾きたくなったらしく、スタジオをふらりと訪れては勢い良く弾きまくり、自分を追い込んで帰って行った。

そんな調子なので、最初は仲良くなるどころか話す機会すらなかった。少しずつ会話をするようになったのは、彼女が専門学校を出た頃からだった。

「今は何にも追われないで、変に期待されることもなくて、好きなことだけできる環境にいるんだ」

そんなことをちょっと、淋しそうに話していたのを覚えている。この人はきっと、どんなに忙しくても、誰かの期待に応えたいともがく方が性に合っているんだろうと

思った。そんなことを面と向かって言えるようになったのは、最近のことだ。

美海と国道２４６号そばのカフェで夕飯を食べていると、

「じゃあ、この前までもらってたボーナスで買う物って、カメラじゃない？」

と決まった。野菜のグリルは、料理好きの美海の勧めだけあって、美味しい。

カフェに併設されている書店には、旅に関する本しか置いていない。私は、そこにあった一冊の写真集をとても気に入ったし、横にあったノートを見て撮ってみたい人や景色が浮かんできた。

ここに、いつか自分の作品を並べてもらえたらいい。いつも持ち歩いているキヤノンのカメラをじっと構えて、カフェの看板を撮った。これで撮り納め。

美海は、次の日のカメラ選びにも付き合ってくれた。絵画館の前から真っ直ぐに伸びるいちょう並木を通り抜け、表参道にぶつかった。交差点のそばの店で、零れ落ちそうな果実がつやつや光るタルトも食べたから、昨日撮り納めと決められたはずのカメラは、色とりどりの被写体の前で休む暇がなかった。

真っ青な空の下で傷だらけのカメラを見ていたらなんだか寂しくて、構える手に力が入る。四年近く私の表現にずっと付き合ってくれたこのカメラは、シャッターチャンスを逃したくないとか勝手なことを言う私のせいで、ケースに入れられていた時期なんかほんのわずかだったから、目にする誰もが驚くほど傷だらけで、十年は使い込んだようだった。

ブラックベリーにフォークを突き刺したまま、美海が話し出す。

「ちょっと前にスタジオでピアノ弾きまくってたら、ベースやってる女の人に、ライブ一緒に出ませんか？って誘われたんだよね」

「ピアノがいるバンド？　めずらしいね」

「ううん、普通のロックバンド。キーボードやってほしいって」

「美海、キーボやったことあるの？」

「ううん、全然ない。えっと、これ……音源もらったんだけど、関わったことないジャンルな感じ」

「でも、このＣＤジャケット素敵やね」

「そうそう、自作らしいの。で、私この色味が気に入っちゃって、そこまで聴いてないのに次の日にやらせてくださいって電話したんだけど、やっぱり勝手が違って大変。再来週の練習までに、ある程度全曲弾けるようになってねって言われて」

「でも、楽しそうな顔してる。ライブいつなん？」
「三ヶ月後、渋谷で」
「新しい彼氏も来るんでしょ？　車掌さん」
「まだ、彼氏って訳じゃないよ！」
美海は、この後表参道で電車に乗り込むときも、妙にそわそわしていて可愛かった。
七五〇〇枚、最初に撮ったものが何かは忘れたし、何を撮ったのか思い出せないものがほとんどだけど、確実にカメラがカウントする数字は増えていた。
最後は何を撮ろう。タルトの接写から時が止まっていたカメラをポケットから出した。私はそれを真上に持ち上げ、星のない空を撮った。
暗がりから、もう一度スタート。このカメラの存在する場面をどんなに描いても、過去形になっていくことが哀しい。でも。
今日買ってきた古めかしい形のカメラで撮る一枚目は、キヤノンの銀色カメラ。私が何人か友人を失って、また出会い、笑ったり歌ったり泣いたりしている間もずっと時を切り取ってきたカメラは、いつの間にかとても大きな存在になっていて、めったに使えない表現をさせてくれそう。私にも宝物があった。

護国寺に引っ越してから、意識的に外に外に出ていたから、まだ開けていない段ボールがいくつもあった。想像以上に家庭的な美海がリビングやキッチンをシンプルに整えてくれていて、自分の部屋とのギャップにがっかりする。今日中に、段ボール二個は最低片付けようと決めた。
それで、本当にありがちすぎて呆れちゃうけど、一つ目の箱を開けて出てきた日記を読みふけってしまった。モレスキンのノートの最初に出てきた文章を書いた日と、今の自分は全然違う。
ある日の日記の中で「クラブで会ったフランス人」と何の感情も込められず書かれている人が、素晴らしいプロカメラマンであることがつい最近わかった。出会ったその日が、彼の指導を受け始めた今につながっていることが、不思議だった。
踏み出してみてついてくる日々というのもあるんだ。黒い表紙の日記は、諭すように語りかける。

南北線

あの海へ

今日は金曜日で、随分前から休暇を取っていた。久しぶりに平日のデパートへ服を買いに行った。買った中で今日使えそうなのはこれくらいかな。紙袋から取り出して、ラビットファーの帽子をかぶった。

私は、すれ違うみんな頭がいいんだろうなぁと、それこそ頭の悪い感想を覚えながら歩く。

赤門の前の柵にもたれ、片足を遊ばせるように立ち、ぼんやりと「きっと頭のいい人たち」を見送っていた。突然、目の前で人が立ち止まる。

「美術史専攻の方ですか？」

東大生のナンパはなんとなく知的な感じである。

「違いますけど」

「そうですか」

小柄な男性はふいっと私の前からいなくなり、門の中へ入っていった。ナンパでもなんでもなく、彼は美術史専攻だかの飲み会幹事だったみたいで、門の中では彼の横で数人が円状に集まって、特に親密ではない感じをにじませて立っていた。

何故かフラれた気分だ。早く美術史の人来てあげなよ。私は残念ながら、ルーブルでまともに見たのはモナ＝リザだけという女なのだ。

携帯を取り出し、『待ち合わせ場所変えよう』とメールをつくった。けど、私はそれまでここに来たことがなかったから、何が有名で目印になるのかもわからなかった。あ、安田講堂って東大だよね？　その前にしよう。

並木道を歩くと、ヨーロッパの真似っこして文化財になってしまい、建て替えられなくなった美しい建物が両側に並ぶ。自転車が横をすっと通り抜けた。懐かしい感じのする後ろ姿を見送って講堂前に着くと、もう友人は待っていた。

「こっちのが近かったから、ありがたかった。授業一コマだけ本郷で、残り全部駒場ってやっぱミスだよなぁ、俺の」

「私は赤門でナンパ未遂に遭ったよ。元東洋史だから断ったけど」

「意味がわからん。しかも、東洋史ってつまんなそう」

もう何度か会っていて、こうやって並んで歩くことに何も違和感を感じないけど、たまにふっと思い出す。私たちは、ネット上で知り合ったのだった。ＳＮＳというものが流行ってきた当時、その中で属しているコミュニティが（五個しかないけど）全部同じだった。

私たちは、フルーツ牛乳が大好きだった。

「あれは牛乳ではないから、誤解を招かないために牛乳という単語をつけてはいけない」

とかくだらない誰かの主張で、フルーツオレなんてつまんない名前になったことを許せていないのも同じだった。それ以外も世間的には取るに足りない互いの切れ端だったのだけど、私たちは、それを理由に会うことにした。

ネットきっかけって、危ないことに巻き込まれたりしないの？と業緒はかなり心配してくれていた。まぁ、大丈夫。と、待ち合わせたカフェのテーブルの上に、彼は学生証を提示した。普段から、何かあるとこれなんだろうと思った。東大ブランドってまだまだ通用してるんだなぁ、と思いながら聞いた。

「これ以外に、何か身分証明ありますか？」

すると、彼は一瞬怪訝な顔をした。

「足りませんか」

「足りないんじゃなくて、バイク、乗れるのかなぁと思って」

「なんだ、そんなことか。はい」

彼は免許証と、お兄さんと共用ながらバイクも持っていた。おまけに、私の好きな俳優に似ていた。

私たちは安田講堂の地下食堂でゆっくりと定食を食べ、バイク置場まで歩いた。

「一応、マナーだよ」

彼は品のよさが隠しきれない笑顔を見せ、バイクを正門まで押していく。そりゃそうだろうねぇ。私は、太めのマフラーを見ながら笑う。

「はい、ヘルメット」

ちっとも使えなかった帽子をとって、手渡された白くて小さなヘルメットをかぶり、カチッとベルトをしめる。エンジンをふかす音の中で

「できた？」

と聞かれたから、返事の代わりに後ろに座り、肩をポンポンと叩いた。車掌の合図で駅を出る電車みたいに動き出す。あっという間に、門は遥か後方へ。

ちょうど午後八時だった。どこに行くのかも、そういえば聞いていなかった。都心

ではバイクにも車にも乗らないから、私は駅と駅の狭間の風景をほとんど知らなかった。十月の風は何をするにも心地いい温度と湿度で、その中でも、バイクの後ろに乗って、こうやって知らない道を走っているのは最高だ。

「ねぇねぇ、わたくし、テンション上がってきちゃいました」

「声がでかい」

「ごめん、降ろさないで。で、今日どこ行くの？」

「朝市！」

「……まだ夜だよ」

「夜は夜、朝は朝」

「ふーん」

私は、別にどこに行こうとも明日の夜、家に戻っているならそれでいいのだ。

「どこでもいいんだけどさ」

「だから朝市だってば」

「なんでもいいんだけどさ、そこ行くまでに、通ってほしいところがあるんだけど」

「いいよ。まだまだ時間あるし」

「ありがと」

そうは言ったものの、私にはそんなところありそうでなかったから、彼の背中にこめかみをくっつけて、流れて行くチェーン店の並びを見つめていた。

その姿勢でしばらく動かずにいると、私が卒業した学校が近付いていることを知った。

「ありゃ、懐かしい」

「あなたにも、ちゃんと大学生してた時代があったんだよね」

「そういうことです」

バイクを停めて、私たちは夜のキャンパスを歩きまわる。よく焼きたてパンを食べたベンチに座り、声をあげて伸びをする。右隣の彼は、小さな声で歌う。私たちは、その曲が世界一好きだというコミュニティにも入っていたので、それはとても心地よく聞こえる。

「どんな学生だったの？」

「そうだな……フランス語のできない学生」

「『フランス語ができない』で包括できる人間っているの？　何の比喩？」

「包括とか、そういう難しい言葉を使わないで。日本語もできない気がしてきちゃうから。まぁいいや、とにかく、驚くほどできなかったんだよ」

「あとは？」
「好きと嫌いが、四年間できちんと区別できた。できた上で、嫌いでも避けられないものと、付き合わないといけない人がいることは、最近わかった」
「結構遅いね」
「遅いよ。でもいいんだ。理屈抜きに好きな人も物も時間も、なかなか多いから」
「たとえば？」
「聞く前に自分の言えば？」
「そうきたか。うーんとね、今の時間」
「チャラ男は二言目にはそれだよ。私は、キンモクセイの木の間を通り抜けて振り返る瞬間」
「あーキンモクセイ、いいよね。沈丁花とね。でもね、それこの前会ったときも言ってたよ」
「そうだっけ。駅までの道に何カ所かあるんだよね。先週雨続いたでしょ。あの小さな花を通り抜けた雨なら、打たれていたいと思ったんだ」
「もう歳だよな」
「おー、詩的な部分全くもってシカトだね。まぁ、そういうことです」

母校の門を乗り越え、路駐したバイクに乗った。
「じゃあ、もう朝市目指して真っ直ぐいくよ」
「いいよ」
私は、彼の背中に鼻と口許を近付けすぎていて、くぐもった自分の声が起こす振動にうとうとした。さっきまで、キャンバスの裏手に伸びる二本のキンモクセイの間に、私たちはしばらく立ったままでいたから、彼のブルゾンはとてもいいにおいがした。
「今日はオールだぞ」
彼は、笑いながら共用の愛車を飛ばす。
「眠くならない話、してくれる？」
「難しいな……あなたは、恋愛相談とか乗ってる方？」
「うーん、女の子のはあんまりない。私がしないから」
「そっか。俺さ、付き合うことはできても、すぐ醒めちゃうんだよ。なんでだろ」
彼が「自分は男性しか好きになったことがない」と口にしたのは、初めて会った日、駅のベンチにぼんやり座っていたときだった。
夜になってもひっきりなしにホームへ滑り込む丸ノ内線の轟音で、かき消されて

も、なんとか続けていけそうなくだらない話をしていたはずだった。それなのに彼は、ホームのアナウンスすら聞こえてこないわずかな空白に、何の感情も込めずに言った。
「なんで、私に話したの」
「なんでだろう。わかんないや。上京して半年経って、ちゃんと標準語で話して、友達も恋人もできて、学生として真っ当に生きていけるってことがわかって、ほっとして話しちゃったのかも。あなたは、俺の生活からいつでもいなくなってしまいそうだったから。でも、困るよね。突然こんなこと話されても」
「別に平気だよ。迫られることが今後ないっていうのは残念だけど」
「本気でそう思ってる？」
「うん、立場上言っていいのかわかんないけど残念だよ。だけど、一緒にいたいと思う人って、多分ね、一番好きなものと一番嫌いなものが同じ人だと思うんだ。きみと私はそれが一緒だから、きっといろんな場面にいてほしくなって、これからも呼び合うと思う。恋人じゃなくても」
彼は、しばらく黙りこむ。荻窪行きの列車が、目の前でぴったり止まる。
「あなたの一番好きなものは？」
「マルイチのプレーンベーグル」

「なんだよ、いきなり違うじゃん。俺、西荻の店のプレーンがいいもん」
「次に好きなのは、変なとこで生意気な男」
「……だけど、じゃあ一番嫌いなのは？」
「可愛くないぶりっこ」
「あ、一緒だ」
「あ、やった」
「何？」
「笑った。やっぱり、生意気なのより笑顔がかわいい男の方が好きかも」
「じゃあ俺のこと好き？」
「好きだよ。可愛いもん」
「女の人にカワイイって言われたの、初めてだな。……よかったらまた会って。俺、今日兄貴のバイク借りてきたから上行くね。あ、それ乗らないと……」
彼が言い終わる前に、開いたドアに反射的に乗り込んだ。直後に閉まったドア越しに電光掲示を見ると、次が最終電車だった。

「前に本郷の駅で話したとき言ったけど、一番好きなものと一番嫌いなものが一緒だったら、その間のことなんかどうでもよくなって、服着てない相手のことだけ見てられるよ。そういう相手に出遇ったら、醒めないよ」
「そんなもんかねぇ。俺、この先どうやって生きて行けばいいんだろう。兄貴は、普通なのにな……男しか好きになれない東大生は、どこにいったらいいんだろう」
「今、楽しい？」
「うん、さっきも言ったよ。この時間好きだって」
「あれはチャラいだけだったけど、ほんとだったなら大丈夫だよ。このまま海まで行こう」
「明日晴れだっけ？」
「確か。途中にスタバのドライブスルーないかなぁ。急にスコーン食べたくなっちゃった。チョコのやつ。チョコチャンクスコーン！　東大生、チャンクってどういう意味？」
「……ちゃん」
「ん？　何か言った？」
「俺、あなたのこと、好きだよ。笑うと目の下がふくらむとこも、『私となら趣味もぴったりだから付き合ったら上手くいくよ』とかつまんないこと言わないとこも大好きだよ。抱いてあげられないけど」
「いいよ、それくらい足りてるから。なんか不思議な関係も、きみも好きよ」
「ねぇ、既婚者があんまり品のないこと言っちゃダメよ、俺以外の前で。俺でもドキドキしちゃうよ」
「ごめんごめん、海までどれくらい？」
「下行くからなぁ、あと四時間」
「私、オールって初めてだ。オールってこういうこと言うんだっけ。もっとはじけた感じとか、逆にすごい退廃的な感じが伴ってないとダメ？」
「あなたも大概めずらしい単語使ってるよ。退廃的とかさ。さぁ、どうだろうな。あー今から四時間も話してたら、海の前で話すことなくなりそう」
「明けるまで座ってればいいよ」
私たちは、一台の車も走らない暗闇に向かって、自分たちが起こした風にかき消されないように大声で話し続ける。そのうちに東京を出ていて、まだ暗い海へと走り抜けた。

手紙

理由は二つあった。歳の近い二人姉妹であることと、母は専業主婦で、家族それぞれ交友関係も狭かったこと。だから、家族が別々に出かけることはほとんどなかった。あまりにめずらしかったから、そういう機会があると疑ってばかりいた。父が休みの日に突然「出かけるか」と私だけを連れて行った先には、お母さんでない女の人がいるんじゃないか。とか。何故そんなことを思ったのかもわからない。あれは、今なお当たったためしのない女の勘だった。

覚えている限りでは、私が父と二人で出掛けたことは三回ある。最初は池袋の東急ハンズ、次は祖母の家がある金沢。最後は中学生だった頃に、大船に行った。

大船への長い道中、無口な父にそれなりにしゃべりかけ、聞かれているのかもわからない曖昧な返答にもそれなりに慣れ、ひたすら電車に揺られていた。

私たちは、大船観音を見に行った。それが何のためだったかはわからないが、私が今日ついてきたのは観音様を拝むためではもちろんない。もう一つの行き先として知

らされていたのが、ランドマークタワーだったからだ。住んでいた町には高い建物なんか一つもなかったから、展望台に上るのがとにかく楽しみだった。

父は、観音の写真をいろいろな角度から撮り、思ったほどじゃないなぁ、みたいなことを呟いて降りて行った。

きっとおなかが空いたのだろう。黙り込んだ父と京浜東北線に乗り、石川町で昼食をとった。有名店が立ち並ぶ中華街の大通りから一本逸れた道にある、小さな中華料理屋だった。

父は、餃子が旨いな、と言って天井近くに据え付けられたテレビを見ている。私もテレビを見ながら、普段家で食べているものより随分と大ぶりの餃子を、三口に分けて食べた。

ランドマークタワーまで、山下公園を歩いていく。これが今でも定番のデートコースだということも私にはまだわからなかった。

展望台から見える景色にはあまりに馴染みがなくて、快晴の日の写真でつくられた案内板と見比べて、横浜を知ろうとした。父は、下からタワーを撮ってから先のことに関心がなかったようで、所在なさそうに立っていた。

土産店にあったランドマークタワーのペーパークラフトがほしいと言うと、

「こんな細かいの、すぐ飽きるやろ」
と一蹴されて、買ってもらえなかった。ちょっと悲しい気分でまた電車に乗り、黙って東京駅に着くのを待っていると、父は突然言った。
「今日、野球観て帰るか」
「え、なんで？　やってるの？」
「東京ドームでやってるはずや。昨日阪神対巨人やったし」
「じゃあ行きたい」
父はちょっとうれしそうな顔をして、秋葉原に着くと、降りるよう促した。父は人生の半分を過ごした地の訛りが染みついてしまっているが、生まれは東京なのだった。
総武線に乗り換えて、父は内野席のチケットを買った。内野は満員で、一番後ろの手すりにもたれながら観ることになった。巨人の攻撃中に、高いなぁと文句を言いながら幕の内とすき焼き弁当を買って、通路に座ってぽつぽつ食べた。
ガルベスは呆れるほど調子が良くて、暴れることもなく、阪神の打者は全員驚くほど差し込まれて完投勝利を挙げた。
私たちは同時に、疲れも溶け込ませた深いため息をつき、大勢の阪神ファンとともにドームから押し出されて、駅に向かう列をつくる。

「あかんかったなぁ。全然あかんかった」
「松山が観れたから、まぁいいかな」
「ガルベスでかかったなぁ」
「うん。遠いのに大きかった」
「弁当残ってるし、食べるか？」
「すき焼きがいい」
阪神の攻撃と同じくらい起伏のない表情のまま、帰りくらいいいだろう。と特急電車に乗った。なのに自由席は空いていなくて、最後まで座れなかった。暗い連結部分で立ったまま冷え切った弁当を食べ、やっと家に戻ってきた。

ネットで改めて写真を見るまで、大船観音には胸から下がないことすら記憶していなかったし、タワーのペーパークラフトも買ってもらえなかった。（大学生になって買ってみたのだが、父の言うとおり紙を三枚切ったところで飽きて、残りは恋人が組み立てた）
阪神は情けない負け方をしたし、帰りの電車も座れなかった。なのに、東京ドームのそばを歩くと、父と最後に二人きりになった日のことを思い出す。手すりに腕と顎

を乗せ、だらだらとガルベスと桧山を観ている自分と、無言で幕の内弁当を食べている父が並んでいる光景を、手を伸ばせば幕の内のだし巻きくらい盗めそうな距離感で思い出せる。

今日は一日家に居たのにあの時間を思い出したのは、多分、結婚式が近いからだ。生きてきた時間に比して、父と過ごした時間は少なかった。それでも、父に受けた影響は私の性質となって息づいている。そうやってどこかでつながっている家族を、この先つくってみたいと思った。

「そろそろやるか」

私は独り言を言って、いわゆる花嫁の手紙を書くために買った、すずらんの花が描かれた便箋に向かう。

「そんなんよく書けるよね。みんなの前で読むのとか照れちゃわない？」

遊びに来ていた菜緒はそう言って笑いながら、台所でパンの焼け具合を見ている。

「だよねぇ。でも、そんなこと言ってる人が、誰よりも号泣したりするんだよ、絶対」

私は笑いながら万年筆をくるくる回す。

「達大にもそう言われるんだよね。泣き虫って」

「私、達大君好きだなぁ。好青年っぽくて。最近いない感じに体育会系だし」

「うーん、おぼっちゃんは嫌なんだけど」

「とんがりやさんの菜緒のことかわいがれるって、器大きいよ。そのパン、八割方おぼっちゃんが食べるくせに」

「パン好きだって言うんだもん」

香ばしい香りが、部屋に漂い始めた。

「これ、何ナッツ？」

「ピーカンナッツ」

ふーん。と呟いて万年筆を持ち直すと、突然移動カフェでもらったパンの味を思い出した。優しい目をしたあの店主は、もう出会えただろうか。うすぼんやりした過去を、少しでも今に繋げられていればいいな。

私も思い出をこの紙の上に運んでこなきゃ。そう思っただけで泣きそうになったとき、菜緒がオーブンを開ける音がした。

食べてくれる人のいる温かな食べ物が取り出され、湯気の向こうに、若々しい母がバタバタと動き回っている錯覚を起こした。

グッドモーニング

クリスマスイブの今日、女性は全員定時でいなくなる。私もすぐ一階に下りて、今日のクラブイベントに誘ってくれた友達と合流した。彼女は音楽雑誌の出版社勤務で、イベントに出演するその子の彼氏は、大学八年生のバーテンダー兼DJ、景太君だ。

今日は休みのはずが、朝まで仕事だったとぼやくものの、彼女は真っ赤なニットを着て、耳には小さなエメラルドのピアスをしている。今日のドレスコードは、赤か緑のものを身につけることだ。

私はトイレに入ってハーフパンツとニットを脱いで、代わりにバッグから薄い生地のワンピースやイミテーションパールのネックレス、レザーのロンググローブを取り出して身につけた。不思議なヘッドドレスは、会場で付けることにしよう。

「杏奈のバッグ、なんでも出てくるね」

「うん、爪赤くする時間ないのが残念」

ラメぎっしりのアイシャドーを濃い目につけて、睫毛を品がなくなるまで伸ばす。柄の入ったニーハイを履いて外に出ると、一日暖房のきいた部屋で火照った頬に、ひんやりした空気が触れた。顔を見合わせた瞬間、

「あーーー!」

二人して声を上げて、解放感を分かち合う。私たちのパーティーは、大学のトイレから始まっていた。

麻布十番駅の出口を出てすぐにある、飾り気のない倉庫のような建物の中に入る。さすが音楽雑誌の編集者、受付から連なる列にも、フロアにも彼女の友達はたくさんいて、一度見れば忘れないくらいにそれぞれ個性的な顔をしていた。受付でチェックされるドレスコードをプラスチックの真っ赤なピアスでクリアして、地下のフロアへつながる階段を下りた。

暗いフロアにはハウス系の音楽が流れていて、私は彼女の友達だという人と少し話をする。仕事について聞かれて「ぼちぼち」としか答えられないのは、やっぱりせつない。

「仕事が面白いなんて人、ほとんどいないもんね。生活のためだし」

そう返す男の子の口調も、空っぽだった。

たくさん友達をつくって帰ろうと決めてきたのに、大抵友達同士の輪は小さくて、

知り合いが二人きりの私は、その場から動けなくなった。社交性満点の人たちが飛び回る知人同士の小さな輪を、私はちぎることができずに立っていた。

のろのろとバーカウンターへ歩き、ブラッディ・メアリーの入ったグラスを片手にスクリーン前のソファに座った。近くの人とグラスを掲げて乾杯しちゃえば、なんとかなるのだ。たわいもない話の合間にアドレスを交換して、連絡が取れてしまう人が一瞬で増えていく。

ソファに近付く誰かと入れ替わりのように立ち上がり、カウンターにグラスを戻して階段の踊り場に座り込んだ。ゲームが始まった眼下の空間を見下ろし、私は紫煙と嬌声でむせかえりそうな部屋の住人より、素直に生きようと決めた。

「うちらって最高だよね」

そんなこと言い合って確かめて、安心する暇なんてないくらいに。

フロアに戻ると、あちこちから感じる視線が心地良くて、話しかけられるのを楽しんでいた。

「一人で来たの？」

「ううん、友達が今日出るＤＪの彼女で。一人？」

「俺は一人。クラブ好きで、ひと月に一回くらい来るんだ。カミさんももう諦めてるよ。こういう場って楽しくない？」

「うん。普通に歩いてたり、職場にいても知り合えない人と遇えるのは楽しいから好き」

「俺はノブ」

「アンナ」

そのとき、やっと気がついた。メタルフレームの眼鏡が外されていて判らなかったけど、彼は、私が前の職場で咄嗟に誘って有楽町で飲み明かした人だ。まだ気付かれていないなら、今のうちに逃げよう。

「あ、ごめん、あたし、友達向こうにいるから……」

名前を教え合っただけの不自然なタイミングも無視して離れようとしたら、

「今日は、いいんじゃない。踊り疲れたら、話したりしたい」

彼は、私の手首を、振りほどこうと思えば容易くそうできるくらいの強さで掴んでそう言った。彼も、会社帰りのあの日とは似ても似つかない格好をした私のことを覚えていた。アドレス交換をしただけの人と気のない会話をする疲れは、確かにあった。でもそれより、彼の目の無防備さが私の腕から力を抜いた。私は無言で頷いて、彼の隣に残った。

並んでブースを見ていたら、友達が酔っぱらった満面の笑顔で戻ってきた。
「私の友達をナンパするんじゃないわよ」
彼女はあながち冗談でもないような口調で、顔見知りではないはずの彼に言った。
彼は、苦笑して何も言わなかった。
私たちは景太君の出番を待ちながら、Ｍａｃのつくりだす無機質な映像と単調なリズムにただ揺れていた。激しくなるリズムで飛び跳ねる。フロアが揺れる。目が眩みそうな照明の点滅に、空中に突き上げられた数十本の腕が黒々と浮かび上がって残像をつくりだす。
景太君がようやく現れて、ブースの中で交代しているのが見えた。あの子は大騒ぎだ。
ＭＯＮＤＯ　ＧＲＯＳＳＯの有名な曲が流れてきた。その選曲センスに捧げられた歓声にはっとした私と彼の目が合って、一瞬で今の気持ちを共有した。しっかりしたベース音が腹腔に響く。そこは完璧なダンスフロアになった。こんなに美しいクラブミュージックは、もう一生見つからないことがわかっているから、ほんの少し、涙が滲む。
足元に光が落ちる。見上げた天井にはミラーボール。今、私たちは、世界一のクラブミュージックを生で聴いて、東京一のフロアにいる。

水玉みたいな光がちらちらと舞う中、自分でもどんな顔をしているかわかるくらいにこっと笑って、右隣の左手を取った。ノブが笑って、きゅっとにぎり返してくれる。私たちは、相手のことを気にする余裕もなくただ踊っていたけど、十分以上費やされたその曲が終わるまで、ずっとつながっていた。シンクロする意識と動きが幸せだった。
「なんでみんな踊らないのかねぇ、杏奈？」
「日本人だから」
「踊った方が楽しいのにねー」
友達は全く解せない。といったように、好き勝手なリズムで踊っていた。
「ノブさん、人間ってアホよね。爆発がくるなぁっていう前の収縮した感じだけで備えちゃうし、爆発したときに絶対身体動かしちゃうもんね」
「確かに単純だよな」
「これは反射やんね」
「そうだね」
私たちは一曲踊りきって手を離し、次のＤＪに代わるまでグラスホッパーを飲んだ。

友達は、どこかへ行った。きっと景太君のところだろう。なんだかんだで二人は離れられないのだ。あの子が指輪をしてるのなんて、初めて見た。

午前一時を回ったフロアはあまりに空気が淀んでいて、私とノブは外に出た。寝静まった麻布十番商店街を抜けて六本木に向かった。

交差点の真ん中に立って、私はカメラを構える。人も車も、液晶画面からあっという間に消えていく。シャッターを遅めに切った。慌てて対岸に渡って見た画面には、顔のない人影と、いびつに流れる光の糸だけが写っていた。私は知覚したかも定かでないような一瞬を切り取って残したいんだ。今日までほとんど知らずに生きてきた男の人とぽつりぽつりと話をしながら、そんなことばかり考えていた。

一度外気に触れてしまうと、あの倉庫に戻るのも嫌になって、踊り疲れた私たちは駅のそばのカラオケの一室でコートを着たまま眠った。鈍い頭痛を感じて目を開けると、始発まであと一時間くらいだった。防音ドアで閉め切られた部屋は暗い。奥まった部屋のドアから、廊下の明かりがほんの少し漏れているだけだ。彼が向かい合うソファの上で動き出す音がするまで、私はその場に座っていた。

「おはよ」
「……おはよ」
「部屋寒くない？」
「めちゃくちゃ寒い。温度上げるように言ってくるよ俺」
「ごめん、ありがと。コート着てても寒いもんね」
出ていく彼を見送り、目元をぐっと押さえる。硬いソファで眠った身体が固まっている。
「今言ってきたから、もうちょっとであったかくなると思う。始発出るまで約束通り話でもしてよっか。何がいい？」
「ノブさんの恋愛遍歴」
「俺の？　つまんないよ。絶対」
「いいよ。私もつまんないから」
彼の話が、やっと今の奥さんに辿り着いた。薄暗い部屋に目が慣れて、少しだけ彼の表情が見える。
「アンナちゃん、なんでも話せる友達っている？」

「なんでも？　は、いない……かな。人によって話すことは選んでる。何もかも話すことが友達の証じゃないと思ってるから。自分でも把握しきれへん自分のこと、人に晒したってどうにもならへんもん」

「そうだよな……俺も、アンナちゃんと同じ考えだったんだけど、結構今、苦しい。他人に自分のことわかってほしいなんて思わなかったし、わかりっこないって思ってたし、わざとわからせないように仕向けてた気もするんだけど」

「今、苦しいの？」

「……うん。友達にも、あいつは一人で平気だし、とりあえずなんでも任せときゃ大丈夫って思われてて、カミさんも『うちの旦那は弱音も吐かないし、感情的にならない人』って思ってて、それをもう崩せない。たまにだけど、疲れて、俺が属してるカテゴリー全部からふらっといなくなりたいと思う」

「そうなんや……じゃあ、今からなろっか。友達。なんでも話せる友達。私もそういう人、いないから」

「……なってくれる？」

笑われてもおかしくない、唐突で子供じみた自分の提案が、こんなにも素直に受け入れられるとは思っていなかった。彼は、属すカテゴリーも肩書きも数えるほどしかなくて、あくまで自分は自分で、そんなもの意識したこともなかった頃の目をして私を見つめていた。クラブで、私を引き止めたあの目だった。

「うん。今からなろう。はい」

フロアで握った手と逆の手をとり、彼の小指に自分のを絡めた。冷たい手をした私たちはじっと見合って、どちらからともなく、小さい頃によくやったように約束の唄を歌った。

「……のーます、ゆびきった！」

カラオケに入って初めての歌はすぐに終わり、指をパッと離して、私たちは笑い合った。

「久しぶりすぎて笑っちゃったよ」

「うん。でも、もう針千本よ。友達になろうって宣言してなるの初めてやけど」

彼は、それもそうだと笑う。

「ノブさん、家どこなん？」

「ん、新大塚。そろそろ帰ろっか。……楽しかった。ありがとう。聞いていいのかわかんないけど、アンナちゃん、仕事辞めた？」

「うん、この前辞めたの。今は非常勤の仕事しながら写真の勉強したり、ベース弾い

たり、一緒に住んでる友達に料理教わったりしてる。これからの時代、手に職系ですよ」

「そうなんだ。うん、前会ったときより、ここ、力抜けてたから。言葉も柔らかくなった。よかった」

本当はなんて名前なのかも知らない人は、自分の眉間に指を当てて、ほんの少し笑った。一度きり会っていない人を心配させるほどの顔つきからは、脱したようだった。それは自分でもわかっていた。

「写真、いつかいいのが撮れたら教えてよ。俺、ずっとバイトしながら修行してて、アンナちゃんが会社辞めようか迷ってたくらいのときに、神田で喫茶店始めたんだ。壁がまだ殺風景で」

「なんか、クラブで踊ってる人と喫茶店って、全然結びつかへんなぁ」

「そんなことないよ。踊り疲れただるい身体引きずって辿り着いた空間で、朝飲むコーヒーは最高だよ。俺が心こめて淹れる。今度飲みにおいでよ。あと、甘いもの好きだったら、社長直伝のシナモントーストも焼いてあげる。甘党のお客さんから結構人気あるんだ」

「ほんま！　私コーヒーは苦いのがいいな。そうや、壁に飾るってどんな写真イメージしてる？」

「そうだなぁ……アンナちゃんが好きだと思った景色の中で、知らない人が喋ったり佇んでる写真がいいな。何もすることがない待ち時間とか、何も考えたくない時間にコーヒー飲みながら壁の写真見て、それぞれの頭に自然とストーリーが浮かんでくるような。とにかく街にいる人が写ってるのがほしい」

「わかった。そのうちお届けできると思う。気に入ったら引き伸ばして飾ってね」

「ありがとう。アンナちゃん……俺、ほんとはすごく弱い。もう一回だけ、約束して」

「これで針、二千本やわ。強い人」

私はもう一度指を絡めて、あらゆるものを壊さないようにそっと、二人の手元を上下させて歌った。彼は歌わずにじっと目を閉じて、つながった二つの手を大きな左手でぎゅっと包んだ。この人の名前がノブユキどころかジョンだったとしても、今に何も関係ない。そんなこと、どうでもいい。

冷え切った身体は最後まで暖まることはなく、私たちは交差点に紛れる。土曜日の朝、駅へ向かってどこからともなく湧いてくる、六本木の蟻の一匹になった。

喫茶店の地図が書いてある洒落たカードだけもらって、また、プライベートな連絡先を聞かずに地下鉄に揺られた。乗り物といえば大抵地下鉄の私は、移動距離の長くないのを体の方がよく知っていて、眠ることはない。

でもその日は、右手で頬を支えた瞬間落ちたようで、目を開けると、乗換駅のホームに向かってドアが開いているところだった。私は眠気を覚ますために、乗り換えをやめて駅を出た。

運河は、冬らしい白っぽいもやの中に流れていて、大きめの鳥が何羽も水面に浮いていた。空を飛ぶ鳥が、濃く重い流れに楔形の影をつくっていく。朝飲むブラックコーヒーは、自販機で買ったものなのに、確かに彼の言う通り、身体に染みていく気がした。

彼の中に、私というカテゴリーがいつまでもつくられませんように。そうしたらいつまでも、ふらっといなくなりたくなったときに迷い込める隠れ家でいられる。

Voyager

自分だけのために料理はしないので、お昼は坂の下にあるメゾンカイザーで買ってきた生ハムのサンドイッチをゆっくりと食べながら、テレビを見ていた。電車で小学校に通っている息子が帰ってくるのは、あと四時間くらい後だろう。私は、店の名前と場所をメモした紙を見つめ、公園でカプチーノを飲みながら笑っている自分をじっくり思い描いている。

派遣先の会社を辞めて家庭に入ったのは、もう七年も前だった。夫の実家は、ひ孫の代まで誰も働かなかったとしても生きていけそうなくらい裕福だった。退職するときは「上手いことやったわね」と、裏も表もないやっかみ１００％のセリフで送り出されたし、私も正直、これで人生安泰だろうなと思った。その約束された立場が少しずつ崩れていることに気付いたのは、最近のことだ。

一つの原因はもちろん、夫にあった。息子の誕生日に、仕事が忙しいから今日も泊

まってくる。と一言で電話を切った頃が始まりだった。私は、反論や懇願をする間もなく切られた電話の受話器を見つめた。リビングに視線を移すと、息子はすでに等間隔にろうそくを挿したケーキの前でぽつんと待っていた。私はこの子の親でしかないのに、なんと言っていいのかわからなかった。火のつかなかったろうそくを抜き、箱にしまったケーキを抱えて両親と弟の住む三宿の実家へタクシーを飛ばしたのは先月のことだ。弟の大げさなほどの明るさで、息子の誕生日がなんとか救われた記憶はまだ鮮明だ。

夫は結婚前から忙しくしていて、会社の中でも有能だという評判だった。受付の私が知っていたくらいだから、それは本当なんだと思う。ただ、週に一回だった外泊は、一言電話が入るものの、いつしか週二回に増えていたのだった。

でも、こういうことは日常起こりえる範囲内の出来事として、なんとか自分の中で処理ができたと思う。子供の前で取り乱したくないという気持ちもあったし、今の環境は確かに、きちんとした格好をして上品に振る舞っていさえすれば、何の不足もなかった。

なのに、もう一つの不穏は私の方に生まれた。しかも、たった一時間前にそれは起きた。

ぼんやり見ていたワイドショーで、都内を巡る移動式のカフェが特集されていた。それは、黄色いフォルクスワーゲンのバスにオーブンを載せて、何種類かのパンとコーヒーを出すカフェだった。夏場になると手づくりのアイスクリームも出すらしい。バスの内部では、美味しそうなクロワッサンが天板に並んでいた。それを食べられない私は、サンドイッチを代わりに齧る。

よく通る声に顔を上げると、画面の中では若々しいカフェオーナーがインタビューに応じていた。私は、思わず目を見開いた。その人は、幼い頃、私にボイジャー計画のエピソードを話してくれた男の子だった。名前がテロップで出てこなくても間違いない、すっかり大人の顔をしたあの子だった。

ボイジャー計画で打ち上げられた、ボイジャー1号と2号。

もうとっくに燃料なんかなくて、そのうち電池も切れて地球に写真を送信しなくなっても、宇宙を惰性で飛び続ける。積み込んだディスクがいつかどこかに辿り着くかもしれないけど、もうそれを知ることもできない。

そんな1号と2号は途中まで同じ軌道を進んでいたけど

ある時点で、道を違えて進むことになった。

もう、二度と出会わない。そんな軌道を描く前に
二つの探査機は、お互いの姿を写真に撮り合って、地球に送信したんだ。

当時、私たちは小学三年生だから、軌道とか惰性なんて単語は交えずにもっと幼い言葉で話していたはずだけど、内容は今でもはっきりと覚えている。

「なんか、泣けるよねぇ」

そう言われても、あの頃の私はその情景を上手く想像できなくて、彼の弱々しい顔に笑ってしまったけど、テレビの中で快活に話す彼の顔を見て、ぼろぼろと泣けてきた。

今の私に、あの話のせつなさを共有してくれる人は、一人もいないのだった。

ボイジャーの話を終えた後、私に笑われた彼はふてくされたような顔をして、鞄の中をごそごそ探っていた手を止めた。彼は、ランドセルという共通項すら持っていなかった。一部のいきがった子供とも違う、布製の鞄で毎日学校に来ていた。

「何か探してたんじゃないの？」

「あったけど……もういいんだ」

「なんで？　気になるよ」

「……写真、撮ろうと思って」

「いいよ、撮ろうよ。私シャッター押すから、もうちょっとこっち寄って」

「違うよ。撮り合うんだよ」

「一人ずつ？　二人で一緒に写らないの？」

「いいから、僕に撮らせてよ。その後マナミちゃんも撮ってよ、僕のこと」

「変なの。いいけど」

彼と私は、放課後毎日のように遊びまわっていたのに、彼のお父さんは転勤族で、写真を撮った日からたった数週間で彼は他県に転校していった。それまでも、彼は一年とか二年で海外も含めた各地を転々としていたらしく、私や周りの子とは違う、大人びた空気をまとい、どこの方言に染まることもなく標準語で話し、どこから仕入れるのか見当もつかないような話をいくつも私の頭の片隅に残し、彼は去った。

あれは、私の初恋だった。不思議な確信があって、きっと彼にとってもそうだったんだと思う。

彼のカフェは都内の駐車場や公園なんかに出没するらしいが、場所の確保が大変なようだった。

ただ、彼はリポーターに促され、明日カフェを開く場所を告知した。それは、隣町にある高架下の公園だった。

特集があっけなく終わり、画面が芸能人の熱愛スクープを報じるスタジオに切り替わった瞬間寝室に走り、いつも駅まで息子を送っていくときのようなスーツやワンピース以外の服を探した。ほとんど捨ててしまったけど、昔よく着ていたニットが見つかった。いつ来客があるかわからないから、家の中でも、朝息子を見送った格好のまま過ごす方が楽になっていて、ラフな服をしばらく買っていなかった。多分、このニットはすごく時代遅れなのだろう。がっかりしながら、久しぶりに実家に電話をかけた。

「はい、安藤です」

「え、達大？　なんでいるの？」

「姉ちゃんか。今日俺、振替で休みなんだよ。土曜にイベントの手伝いして。姉ちゃんこそめずらしいな、電話」

「あぁ、そうだね。えっと、お母さんいる？　探してもらいたい物があるんだけど」

「今日も、向かいの本橋さんとミュージカル観に行くって張り切って出て行ったよ。狂ってるよな。探せそうなもんなら俺探すよ？」

「あーいいや、今日そっち行く。夕飯達大の好きな物つくるから、奏介の面倒見てくれる？　渋谷で買い物もしたいんだ」

「おーいいよ。奏と会うのも久々だな。姉ちゃん、オムライス頼むよ。ケチャップの」

「相変わらずの洋食好きだね。了解」

私は、いつから家の中にいてもこんなに隙のない顔をしていたんだろう。

電話を切った後、洗面台に向かい、早朝じっくり塗りこんだ化粧を全部洗い落した。時代遅れのざっくりとしたニットと、仕方なく淡いツーピースのスカートを身につけ、フェイスパウダーだけ叩き込んで奏介の帰りを待った。帰ってくるなりランドセルを置かせて実家に預け、私は渋谷に戻って、カプチーノやワーゲンバスに似合う服を買ってこよう。

私のこと、さすがに気がつかないと思うけど、彼のことを一目見て、取材を受けるほどの可愛らしいうさぎが描かれたカプチーノを飲んでみたい。

写真、まだ残っているかな。彼が転校先からくれた手紙に同封されていた二枚の写真。引き出しの奥にしまってそのままになっていたのを中学生のとき見つけて、小さ

なアルバムに横並びに入れ直したあの写真。彼と私が一人ずつ、一見するとセルフタイマーで撮られたようなあの写真。でも、私の笑顔は彼が撮った特別なもので、彼の笑顔は、私が撮った特別なものなのだ。

私にとって、あのせつなくていとしい時間を共有してくれるだろう唯一の人に、早く会いたい。今も宇宙を飛び続けるボイジャーは二度と出会わないけど、ここは地球だから、もう一度軌道が寄り添うこともあっていいよね。私は小学三年生のあの子にそっと話しかける。

渋谷駅

副都心線

うつろい

西早稲田という真新しい駅の階段を上りながら、もう随分前のことを思い出した。僕が大学生を始めたときから続く話。

バイトの面接とか科目登録に気を取られていたら、新歓シーズンが終わりかかっていた。僕は、高校の物理で勉強というものを心から嫌いになってしまったので、大学生は酒を飲んで、彼女と友達と馬鹿みたいに遊んでばかりいようと決めていた。

なのに、こんなにたくさんの人間が出入りする大学の中で、友達と呼べるような人は五月になっても一人もできなかった。授業も、あまり脈絡なく人気のものばかり取ってしまったらしく、隣に座る人が毎度毎度変わるから、声もかけられなかった。

僕はどんな授業でも、教室の一番左側の最後方に座っていた。そうやっていると、なんだか別の世界で起こっていることを覗き見しているような錯覚に陥ることができた。そういう位置は、嫌いじゃなかった。

何枚貼ったら気が済むんだよ。と悪態をつきたくなる自由掲示板のサークル案内のビラも、見る度に数が減っていて、僕は完全に出遅れたようだった。

携帯のメモリも全然増えないまま、早稲田に行った高校の同級生、伸司が主催しているマラソン練習に週一回付き合うのだけが遊びだった。こんな苦しいもの遊びなんて呼びたくないけど、本当にそれしかなかった。

戸山公園の周りを全速力で駆け抜ける。一分走って、一分歩いて、を延々繰り返す。何も考えない、考える余裕なんてない時間がほしかった。何のためにとか、そういう目的もいらなかった。

趣味だったチェロはたまに持ってきて、マラソン練習の後、一人になってから公園でほんの少し弾くだけになっていた。弦もなかなか取り換えないから、音の響き方もどんどん悪くなった。

練習が終わると、伸司の授業がある日は、早稲田の理工キャンパスの食堂で飯を食って帰る。

「俺の払う四〇〇円のうち三五〇円は鑑賞料だからちょっとそこどいてくれる？」

「どくけど、そんなまともな顔で言うことじゃないぞ。絶対」

伸司は、通称「カツマシーン」と呼ばれる、揚げたてのカツをサイボーグのごとくものすごい勢いでカットするおばちゃんのパフォーマンスを高く評価していて、毎回何かしらのカツを頼んでいた。

午後四時には食堂を出て、僕はバイトまで久々にチェロを弾こうと思い、一人で公園に戻ろうとした。

テニスコートに面した道を歩いていると、ちょうど試合が行われていた。「ちなつー」と大声で応援されている女性は、サーブを打つところだった。

僕は、高校の休み時間たまに遊びでやっていただけなので、教本なんか読んだことはない。だけど彼女のフォームは、素人の僕が見ても、どの瞬間も美しかった。トスを上げる腕の角度も、真っ直ぐに上がったボールを、重力に逆らわずしなやかに振り抜くラケットさばきも素晴らしかった。

サーブは、フォームそのままに真っ直ぐコートに突き刺さる。もっと彼女のサーブを見ていたい。僕は、シューズの入ったナイロンバッグを片手に、チェロケースを立て掛けるようにして、金網の外に立ち止まった。

反対側とはいえ、そこはあまりにも彼女の正面だったので、しばらくしてからコートの左手に回った。彼女はボレーがあまり上手くなくて、ポイントを自分で重ねていくタイプの選手ではなさそうだったが、サービスゲームは落とす気配もなかった。

あと、ドライブのかけ方が見事だった。山なりのボールは、地面についてからの方が勢いを増しているようだった。相手が構えている位置よりもずっと後ろに跳ねていくので、相手は慣れるまで、バウンド直後のボールをライジング気味に打ち返すしかない。

彼女のサービスゲームが終わって、コートチェンジになった。初めて彼女の顔がはっきりと見えた。そんなに日差しも強くないのにきつくサンバイザーを結んでいる小さな顔には、小さなパーツがバランス良く配置されていた。腕は細長くて、小柄だ。座った目のまま、ゆらりと彼女がこちらを一瞥する。僕だけが目を逸らせない。何事もなかったかのように、彼女はレシーブ位置についた。一つに結んだ髪が、身体の動きと連動してかすかに揺れる。ほんの一瞬目が合ったそのときから、止まらなかった。さっきまで繰り返していたインターバル走で、一分走った後のような動悸がした。

僕は、そのこちんまり整った顔に留まる集中力を、一瞬も緩ませることのできない自分の存在にちょっとがっかりしながら公園に歩いた。サッカーの練習に興じる学生たちの横で、がむしゃらに練習曲を繰り返した。

次の練習は、その一週間後だった。食堂でぬるいカレーを食べながら、味噌カツの伸司と話をする。
「伸司、俺、一目惚れした」
「何、突然。誰に？」
「多分、ちなつって人に」
「多分って何よ」
「サーブがいいんだよ。すげー」
「全然噛み合わねー。整理すると、その人は多分ちなつって名前で、何のスポーツかも知らんけどサーブが上手いんだな。どこで見た？」
「理工の中のテニスコート」
「あぁ、あそこね。俺毎日横通ってるよ。外見的にはどんな感じ？　学部同じなら、もしかしたら知ってるかも」
「背は高くない。１６０はないくらい。腕がひょろ長くて、顔も口も小さくて、養ってるのにサンバイザーしてた。胸はそんなない。髪はうっすら茶色。笑うと目が漫画みたいに細くなる。色はちょっと白め。足はいい感じに筋肉がついてる」
「お前にそんな記憶力があるとは知らなかったよ。すげー」

「な、これを世の中のために生かすことができるだろうか。これから」
「そうだなぁ。これがみんなに知られれば、テスト前には友達増えそうだな。隙間空いてきたし、ピラ貼れば？」
「最近閑散としだした掲示板？　早稲田もやっぱそうなんだ。友達かぁ。まだそれらしい人いないんだ……」
「どしたん亮？　……あ、もしかして、あれ？」
「……うん、あれ。なんでわかった？」
「あんだけ詳しく描写されたら普通だよ。それより、お前の言ってることに一つも間違いがないことにびった。サンバイザーつけてないのは当然だけど」
「ドライブかけるのも上手いんだよなぁ」
「ってかあの人知ってるわ、俺。一回見学行った陸上サークルの新歓コンパにいた。三年だ」
「テニスじゃなくて？」
「あのコートは体育の授業と大学のテニス部しか使えないはずだよ。陸上の方はマネージャーみたいな感じじゃん？　パンフ、来週持ってきてやるから、入会したいとか嘘ついて電話してみ」

「お前やさしいな。ご指摘通り、陸上なんか全然やりたくないけどな」
「亮のめずらしくふぬけた顔を見て、おろしカツ三枚で手を打ってやるって決めたよ」
なんて言っていたのに、僕は伸司の力もパンフレットの力も借りないで、その日のうちに彼女と話をすることになった。

僕は、自分の大学のそばにあるお堀沿いのカフェでアルバイトをしていた。立地のおかげか、たまにテレビに取り上げられる店だった。一度ドラマのワンシーンに使われた後なんか、入口から歩道に五十人は並んでいたのだ。
でも今日は月曜日だし、そんなに混んでいない。そうなると気分的に、閉店時間がなかなか来ない。やっと、午後九時を回った。
そこに、彼女は一人でやって来た。頼むからセルフサービスのカフェの方に行かないでくれ、という願いは届いて、彼女は、ウエイターがつくレストラン側を指定した。待ち合わせだと言うので、水辺がよく見える席に案内する。いつ見ても、夜の水辺は美しいと思う。風とも呼べないかすかな空気の動きに翻弄された水面を、店の灯りが照らす。反射した光が、空気の動きを投影して揺らいでいる。
彼女は、キールロワイヤルとアマトリチャーナを頼んで、水面を照らす光の揺らぎ

を飽きもせずに見ていた。器用にフォークを使って巻き取った適量の麺を、口に滑らせるように放り込む。一通りの注文を終えた彼女がこちらを向くことはないとわかっているから、小さく整った横顔を見ていた。待ち合わせの相手は誰だろう。だんだん気になり出して、僕は出入口にも頻繁に視線を向けた。
店は完全に停滞し、仕事はほとんどなかった。出入口の方を見ていたつもりでも、視界の片隅にずっと彼女はいた。彼女は僕の方を向いて軽く手を上げ、ウインナーコーヒーを追加した。クリームがたっぷり乗ったコーヒーをテーブルに置き、のんびり他のテーブルを見て回っていると、閉店時間が近付いた。
「お客様、ラストオーダーのお時間ですが、ご注文はよろしいでしょうか」
「はい。すみませんでした。結局最後まで一人だったのに、いい席通してもらっちゃって」
「いえ、昼の水辺も意外といいですから、またいらしてください。おかしなくらい大きな鯉もいます」
店員とお客様として、とてもスタンダードな会話ができたことに満足しながら、彼女がもうここに来ないかもしれないと思うと、淋しさが胸から指先にまで広がった。急に覚える寒気のように、止められない。

僕は、同じ日にバイトを始めた同級生のおぼっちゃんに頼み事をして、彼女のいる席へもう一度近付いた。

「突然すみません。あの、先週、理工のキャンパスでテニスの試合してませんでしたか？」

「え、あ、はい。してました。体育の授業で試合だったんです」

「サーブ、どうしたらあんなに綺麗に打てるんだろう。って見とれてました」

「んー、恥ずかしいな。ありがとうございます」

「お名前、ちなつさんですか」

「……あぁ、応援声大きかったですもんね。そうです。千の夏で千夏っていいます」

「千夏さん、店、あと三十分で終わるので、五分でいいです、店の入口で待っててもらえませんか。最寄駅まで送らせてください」

「駅までというか、家、ここから歩けますけど。いいですよ。待ってます」

多分、待っていた人が来なかった空虚のせいもあったと思うけど、突然の申し出は受け入れられた。

実家が神楽坂の有名料亭だという脅威のおぼっちゃんは、天然のお人よしだったので、何の対価もなしで後片付けを全部請け負ってくれた。僕はギャルソンエプロンを

外して、暗いからいいか、と髪もろくに整えないで休憩室を飛び出した。

体に不釣り合いな大きさのラケットバッグを背負った彼女は、煙草を咥えて箱を左手に持ったまま、じっと目を閉じていた。深く煙を吸い込んで吐き出す姿は、日中のテニス姿とは別人のようで、疲労が全身を取り巻いていた。

そっと近寄って、箱を取り上げた。軽く驚いた彼女の顔と、数本残るハイライトの箱を交互に見つめ、夜見る彼女も好きだと思った。

千夏さんは僕の目を、電池切れす前の体に残る最後の力で見返して言う。

「父はこれしか吸わなかったから、ずっと実家のお仏壇に供えてあって、たまに持ってきちゃうんです。古いの置いとくのもかわいそうだし、その日のうちに新しいの買って供えるの。実家もすぐそばだからできるんだけど、母は気付いてるかもしれない……久しぶりだと、ちょっと重いな」

箱を取り上げただけの初対面の僕には、不似合いな重みを持った話だけど、案外すんなり受け入れている自分がいた。明るい時間そんなに、自分をすり減らして生きなくていいよって、いつか言ってみようと思った。

僕は、彼女がマネージャーをしている陸上競技のサークルに入り、友達をやっとつ

くって、あまり練習をせずに事務関係の仕事を一手にこなした。どんな人間も許容してしまいそうなお嬢さん育ちの彼女は、誰からも人気があった。たまに近くに来られると、無意識に髪や、小さな顔に手を触れてしまいそうになる。

でも、本当の彼女は、一度の許容を二度三度に延長するかを慎重に図るタイプだった。彼女の中でその基準は絶対なのに、屈託のない笑顔とか怒っても恐くない声のせいなのか、内面まで踏み込まれては拒絶して、相手を傷つけたと悩んでいた。

「もう、そんなに人の心読もうとして悩むなよ。他人なんかわからなくて当然なんだよ」

苛立ちを込めてそんなことを言ったのは、彼女が旅行会社に内定をもらった頃だった。もう敬語も使わなかった。

「結局、世界中の誰からも好かれたいんじゃないの？　そんなの無理なんだよ。現に千夏さんは、苦手な人に踏み込まれて何度も拒絶してる。そんな人たちに好かれて楽しい？　いいじゃん、実は疲れてるとろくに返事もしないし、苦手な人の前では笑顔もこわばるし、ほんとはこんなサークルの中で話す価値ある人間なんてほとんどいないって思ってる。そういうとこ見せたって、あなたのこと好きだって人はちゃんと残るよ」

「手頃って言われたの。ずかずか踏み込んできた人に」

「……どういうこと？」

「飛び抜けて綺麗でもないし、親しみやすいから、気楽に付き合うのにちょうどいいんだって。愛想良くしてくれたから、いけるのかと思ったら断られて心外だ。思わせぶりなことするな。お前はモテるんじゃなくて、隙があって手頃なだけだって。いけるって何？　手頃とか、そんな風に思われてるんだ私。愛想良くするのだって、相手の気分を害さないように無理してたのに、簡単に手に入る隙だらけの女だと思われてた。どうしたらいいのかわかんないや、もう」

彼女が言葉を、叩きつけるように使うのは、初めてのことだった。僕は、そういうことを彼女に向かって言い捨てた人たちの顔も浮かんだから、余計にやるせなかった。

「手頃って……千夏さんは、そういうこと一番言われちゃいけない人だよ」

絞り出すように言い切って、黙ってしまった。何を言っていいのか、全然わからなかった。

「亮くんは残ってくれるの？　さっき亮くんが言った欠点プラス、料理もできないし、ほんとはこの歳まで誰とも付き合ったこともないし、別に全然好きじゃないのに嫌なことあると煙草一箱一気に吸うし、父の遺産頼みでバイトしたこともない。それでも、

残ってくれる？」

「残る。疲れてるときは死にかけの魚みたいな目のまま煙草吸っててくれていいし、無理して笑うこともない。料理は俺が教えるし、バイトなんかしなくてもあと一年したら嫌でも働いてるんだからいい。絶対傷つけないから、俺と一緒にいてください」

誘導尋問に引っかかったように、あっさり口にしてしまった僕の踏み込んだ言葉に、彼女は、感情が読みとれない不思議な顔をした。

「……最近、チェロ持ってないね。私、理工のコートで試合してたとき、チェロケースがやけに目立つなって思ってた。えんじ色の」

「チェロ弾くなら、千夏さんに会えない時間にしたいから」

「こんなことになるなら、海外添乗希望するんじゃなかったな。でもたまには聴かせてよ」

その日、初めて彼女の家に行った。コンクリ打ちっぱなしの、小さなデザイナーズマンションだった。ベッドと床に転がるノートパソコン以外、ろくに物はなかった。料理もしないというのは本当のようで、調理器具は外に出ていなかった。カフェオレボールと、フォークとスプーンとおはしと、マグカップしか使わないのだと彼女は笑った。

住人である彼女の、意図しないところで勝手に膨らんでいく自らの虚像に反発した結果が、真っ黒なカーテンで閉ざされたこの部屋なのだと思った。ふわふわしたニットも、よく似合っている華奢なアクセサリーも、何もかもが壁一面の大きなクローゼットにしまい込まれていた。

無理してつくった自分が思いのほか愛されて、一部の人間にはその無理も否定されて、どうしていいかわからなくなったんだ。彼女は、実像だって魅力的だ。僕が、黒いカーテンもハイライトも、ふわふわのニットも千切れそうに細いネックレスも似合う本当の彼女に、少しずつ戻してやろうと思った。

一年後、千夏は毎月のように海外旅行の添乗をするようになった。帰ってくれば何をするでもなく、ただ布団に寝転んで静かに存在を感じる。そうすることで、千夏のいない毎日にようやく目を向けられた。

明後日からまた会えなくなる。僕も早く働きたかった。彼女のことを考えなくて済む時間がとにかくほしかった。自分の発想が、伸司の陸上練習に付き合っていた頃から全然進歩していないことに気がついて、一人で不二家のそばを歩きながら苦笑した。

ここの店でしか売っていないペコちゃん焼きは結構人気で、今すれ違ったショート

カットの女性も、できたてのそれを買って出てきた。その人は、千夏と同じ香りをまとっていた。もうしばらく会っていないけど、後ろ姿が美海に似ていた。あいつは今、何してるんだろう。淋しいとか言ったら、馬鹿にされんのかな。

泊まりの仕事が終わって家に帰る途中、急に思い立って市ケ谷で降りたのが始まりだった。住宅街の中の、あのデザイナーズマンションを目指して歩いた。

千夏の住んでいた部屋の大きな窓には、ピンクのレースカーテンがかかっていた。小さな出窓にはカーテンも引かれず、洋服を着せられたくまのぬいぐるみが、こちらに背を向けて置いてある。

ふとあのカップが懐かしくなって、理工キャンパスへ行ってみることにした。マンションのすぐそばには東新宿駅ができていて、一駅だけ乗車した。日中の車内はがらんとして、今こじつければ、地上に出てから始まる喪失を予感させるような寂しさだった。

キャンパスの真横、明治通りの下にできた新しい駅の階段を上る。食堂で洋風カツ

というメニューを頼むと、カツマシーンと呼ばれたおばちゃんはいなくなっていて、学生バイトなのか、背の高い黒人男性が一心不乱に揚げていた。切るスピードは、いたって人間らしかった。

外に出ると、テニスコートがあったはずの場所には、大きな複合施設が建っていて、前からそんなものなかったよ、と誰かに言われたら信じてしまいそうに跡形もなくなっていた。僕たちの思い出はこの先視せていくはずなのに、鮮やかな色を取り戻すための鍵をことごとく失ってしまっていた。

だけど、ここでお手本みたいに美しいフォームでサーブを打っていた人と、でかいチェロケースを抱えたまま彼女に見とれていた人は、今もまだ、一緒にいる。二人でいれば、退色も、少しは遅らせることができるだろう。それでもいつか、あの部屋もカツおばちゃんも、テニスコートがあったことすら思い出せなくなったとしても、鮮やかな彼女が隣にいれば、それでいいのかもしれなかった。

ドラマチックデイ

名前を挙げるのもめんどくさい。だって、七人もいるのだ。私と菜緒、杏奈、景太君、亮と菜緒の同期の達大君と、美海の恋人の朝生君が今、ファミレスのテーブルについている。

亮と朝生君が、

「お前ちゃんと報告しろよ！」

「すみません、亮さんの幼なじみだなんて知らなくて」

「言い訳すんなよ」

とか体育会系に騒いでいたのを除けば、おおむね和やかだった。私は柔らかい豆腐ハンバーグを、箸ですっかり食べきった。生ぬるい空気がこもる地下鉄に乗ると、足元の暖房に眠気を誘われる。

「ライブハウスって、探せばたくさんあるんだろうね」

「……そうだなぁ。でもこういう機会ないとなかなか行かないよな」

隣の亮からは想像したのとは違う返事が聞こえて、次の駅に辿り着くまでに彼はすとんと眠った。私は、終点までのわずかな時間、夜空の下の雑居ビルのことを考えた。ライブハウスはビルの地下にあった。その上も、もう一つ上も別のスタジオだった。東京には、ライブハウスや劇場やスタジオが雑居ビルの中に思ったよりたくさんあって、それぞれの中で活動がなされているのだと思うと、それはすごくせつなくて、空しいように感じるのだった。小部屋から生まれる音や映像や感情は、生まれた瞬間、誰もいない暗い場所に吸い込まれるように思えた。

東京で時間を使うほとんどの人が、そこで連日演奏される勝手気ままな音楽も、日常からかけ離れすぎて笑えるような大仰なセリフも、それを発信する人も知らない。美海に誘われなかったら、私も、それらのたった一つにすら触れることはなかった。

でも、その空しさに一度ならず何度か気付いていて、それでも発信をやめられない人の顔はとても美しかった。腕の筋肉にぐっと力が入って、今生まれたばかりのイーマイナーを三拍数えた未来に消し去るんだという、意志というよりも本能的に動く指先は、美しかった。

美海がピアノを弾くのは知っていたけど、こうやって、キーボードも軽やかに叩けるのは知らなかった。

「鍵盤の音って、引き締まるよね」

と、昔うれしそうに言っていたけど、こういうことなのだと一瞬でわかった。

朝生君は、美海の細長い指しか見ていない。それをとても可愛いと思い、彼の一つ向こうにいる菜緒も彼の顔を見ていた。目が合って、私たちは同じことを考えているのがわかって、二人で笑った。

ボーカルは、短めのMCを一つ挟んだ後、すぐに曲紹介に入った。

「次の曲、聴いてください。ストロボ」

朝生君が、息を飲んだ。キーボードの音が小部屋に広がる。歌いだしたのは、美海だった。朝生君より一拍後で、私も菜緒も息を飲む。さっきまでとは少し違う不思議な和音が並ぶ音楽に、かすかに震える美海の声が乗っている。

あの日感じた眩しさはストロボじゃない
あなたが放つ光のせい
目映さに目が眩む
世界に残像を結ばせる
私もあなたの中に　そんな風に残っていたい
鮮やかな光

一瞬綻んだ光の糸

ストロボよりもずっと　鮮やかな光
今もきっとどこかで
見知らぬ鏡に出会い
反射しながら真っ直ぐ進む
私もそのひとつとして　あなたを送り出せたなら
鮮やかな光
一瞬綻んだ光の糸
ずっと覚えている　鮮やかなあなた

この歌が、謙の手で書かれたかが、私にはわかった。自分の表現に負った責任の重さで震える美海の声は、それでもかき消されないで響いてくる。

静かに鳴っていたすべての楽器が、ある一点で突然最大音量を放つ。もう音程なんか謙一人気遣えないまま、感情を転化した音の波が襲いかかり、停電したかのように消えた。会場が暗転し、無音の空間に余韻が残る。

再び明るくなったステージを包むように、大きな拍手が起こった。美海は、深く長く頭を下げた。スローに上げられた彼女の額には汗が流れ、緊張がやっと解けた笑顔が、スポットライトに照らされた。

美海たちの出番が終わると同時に、今日初めて会ったはずの亮と景太君は、隅にある小さなバーカウンターで、リキュール瓶を指差しながら話しこんでいる。達大君は菜緒にこそこそ耳打ちをして、菜緒はくすくす笑う。

目の前で電話に出た杏奈が、英語と日本語を混ぜこぜに使っているのをぼんやり眺めていた。

「杏奈、英語できるんだ」

「まだまだ日本語混じりやけどね。でも、最近教室には通ってるよ」

「でも、なんで？　昔、TOEIC受けたのに、点悪すぎて受けてないことにしたって言ってたのに」

「よう覚えてんなぁ。360点。そうそう、でも今の電話の相手フランスの人やねん。フランス語は無理やけど、二人ともつたない英語ならまぁまぁ平等かなって。彼、プロのカメラマンやから、いろいろ勉強させてもらってて」

「杏奈……関西弁？」

「うん。ちょっとずつね。やっぱりこっちの方が楽やなぁって思って。生まれたとこの言葉が、一番やっぱりしっくりくるわ」

みんな、誰かと出会って生きている。狭い空間で実感する数え切れない糸は、私も途中に絡ませて外に伸びていく。

「今日のバンドかっこよかったなぁ、ベースの子がよかったよなぁ、朝生」

「そうですね。いやいや、キーボですって」

「そりゃそうよ。美海は俺の幼なじみだもん」

「亮さん、自慢げに言わないでください。ちょっとムカつく」

「ベースの子、俺の彼女だもん」

「ケイタさん、関係ないのになんかムカつく」

「美海ちゃん、楽しそうだったね。よかった」

「菜緒が人の心配できるくらい元気になって、姉さんうれしいよ。達大君、頼むね」

「お任せください、お姉さま」

「お姉さまって何？　気持ち悪」

「菜緒ちゃんって結構ズバッと言うんやね。あーあたしもベース弾きたなってきたなぁ。あ、美海戻ってきたよ」
「ただいま。あぁショック。二か所もミスっちゃった」
「そう？　よくわかんなかったよね、杏奈」
「うん、リズム完璧合ってたよ。最後、ゾクゾクしたよ。めっちゃかっこよかった」
「ありがと。朝生君はわかっちゃったよね」
「でも、全体通してよかったよ」
「ちょっとかっこつけてるお前がムカつく」
「亮さん黙ってて」

そんなことしなくたって生きていけるけど、それでも、やめたら生きてる感じがちょっと減る。そういうものを持っている人たちの集う小部屋に入っていくと、私はじゃあ何をしようと考えている。

あなたが、そんな風に激しく弦を掻き鳴らすなら、あなたが、そんな風に軽やかに鍵盤をたたくなら、あなたが、そんな風に声を枯らして叫ぶなら。あなたが、自分の生み出すリズムに誇りをもって観客を踊らすなら、あなたが消えて、演じる一つの個

体になるのなら、あなたが、夢中になってシャッターを切った時間がそこに飾られているのなら、私は、出会ったそれらをきちんと見届けて、活字に起こしてみたい。書かなくたって生きていけるけど、私もやっぱり生きてる感じがちょっと減る。

東京の中の見知らぬ表現者達のことを、私は同じ表現者として書いてみたい。私の書いたもので、想像力を揺らしたい。私の糸を手繰り寄せてくれた人たちと、一緒にいたい。出遇った一握りの大切でたまらない人ともっと話をして、触れ合って生きていたい。そんな人たちを最期まで探しに行きたい。世界中の全員とは会えない。それを知りながらも、糸を伸ばすのをやめたくない。

暗闇から放たれる光の糸。街の灯は意味もなく点いているわけじゃない。その下では、都会の表現者たちがスポットライトを当てられている。糸が縒られて生まれる食卓での会話に、雀卓を囲んで笑い合う声に、アーティストの歌声に、ブザーと悲鳴を聞きながら、シュートを決めるプレーヤーに。

暗い部屋で独りきり泣く声も、本当はどこかの誰かにつながっている。

あの日、屋上から水平に眺めていた明るい街を、立ち止まって見上げる。あの夜、

指を一本立てても見えなかった光の糸は、この身体中から紡がれている。この街で、私は糸を紡ぎ続ける人たちに、これから先も出遇い続ける。

私は、東京の中で発信することにした。仲間と一緒に。

立ち止まる私を、みんなが一斉に出口の前で振り返る。私はみんなに追いつくように歩き出し、新しく生まれた東京の地下に繋がる階段を、一歩ずつ降りていく。

あとがき

東京にはこんなに人がいるのに、電車に乗って一両見回しても、誰のことも知らない。私と隣に立つ人に実は共通の友人がいるとか、何かの拍子であっという間に意気投合するかもしれない、なんてことは知り得ないし起こり得ない孤独な車両を、当たり前と受け入れられればいいのに、それもできないから孤独感は増していく。

だけど、この電車がトンネルの中に点在するホームに停まって降りた先には、なにかしらの理由で私と会おうと思ってくれた人が立っていて、それは、本当にありがたいことだった。資源不足の小さな私には、今あるつながりを大事にして、自身の変化に合わせて広げていくしかないってことをちゃんと覚えておきたくて、この話を書きました。

高望みを許されるなら、読後、ご自身と周囲をつなぐ無数の糸が、ほんの少しでも色濃く感じられたとしたら、本当に幸せです。

最後になりましたが、毎回美味しい物の話で盛り上がりながらも、こまやかにご指導くださった敏腕編集者、本橋友紀さん、毎回大幅な変更をかけてお手を煩わせてしまった制作スタッフの皆様、雑誌で一目惚れした写真を表紙カバーに使わせていただいただけでなく、素敵な作品をもとに一冊の本を共作してくださった天性の人つなぎ、プロカメラマンの久富健太郎さん、写真での共作だけでなく、デザイン面のフォローもいただいた同志、カヂマサトさん、また、忙しい中原稿を下読みし、別の視点から本当に多くのアドバイスをくださった３２０さんに心から感謝を申し上げます。

あなたがやりたいことを、限界までできるように。そんな気持ちを持って、忙しい合間を縫うように向き合ってくれた仲間を得られたことは、幸せでした。

貴重な時間を割いてお読みいただき、本当にありがとうございました。私の軸をはっきり固めてくれる皆様とのご縁を大切に、これからもこまごま活動します。

二〇一〇　初夏
山の上ホテル５０３号室にて

津川　梓

参考文献

「海辺のカフカ」村上春樹

数寄屋橋不二屋で業緒と達大が聴いた曲

「Ｊｕｂｉｌｅｅ」くるり

— CREDIT —

All stories written

津田　梓

*

Cover photo

久富健太郎（SPUTNIK Ltd.）

*

Photographer

カヂマサト

久富健太郎

津田　梓

*

Editor

本橋　友紀（PARADE Inc.）

*

Special thanks

本の話を面白がって、
所望してくださった皆様方

頼れる助言者

本を置いてくださる、理解深き方

家族

こんなに広い世界で、私の糸に
一度でも触れてくれた一握りの皆様方

ヒカリノイト

2010年7月26日　第1刷発行

著者　津川（つがわ）　梓（あずさ）

発行者　太田　宏司郎
発行所　株式会社パレード
大阪本社　〒530-0043　大阪府大阪市北区天満2-7-12
TEL 06-6351-0740　FAX 06-6356-8129
東京支社　〒150-0021　東京都渋谷区恵比寿西1-19-6-6F
TEL 03-5456-9677　FAX 03-5456-9678

印刷所　創栄図書印刷株式会社

本書の複写・複製を禁じます。
©Azusa Tsugawa 2010　Printed in Japan

撮影／久富健太郎

津川 梓　ツガワ アズサ
１９８４年 京都市生まれ
好きなことは、
美味しいものを囲んで向かい合う人の持論を聴くことと
水面を眺めること、それとライブ。
２０１０年初夏、ヒカリノイトを上梓。
ようやくフリーランスとしての活動開始。